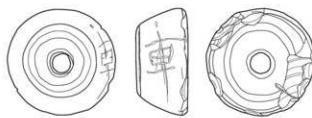


棟高西弥三郎街道遺跡

—宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査—

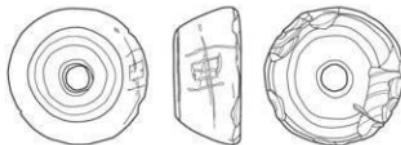


2019

高崎市教育委員会
株式会社 測研（文化財研究室）

棟高西弥三郎街道遺跡

—宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査—



2019

高崎市教育委員会

株式会社 測研（文化財研究室）

例　言

1. 本書は、高崎市棟高町字西弥三郎街道 2221-1, 2222-1, 2222-2, 2222-3、に所在する「棟高西弥三郎街道遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、志村洋子氏が計画した宅地造成に伴う事前発掘調査である。
発掘調査から整理作業を経て本報告書刊行に至る経費は、土地所有者である志村洋子氏に負担して頂いた。
3. 試掘調査は、高崎市教育委員会が平成 30 年 11 月 29 日に実施した。
4. 発掘調査は、平成 31 年 1 月 28 日～3 月 8 日に実施した。
資料整理・報告書作成は、平成 31 年 3 月 11 日～令和元年 8 月 31 日に実施した。
5. 発掘調査は、株式会社測研文化財研究室の大塚昌彦が担当した。
6. 遺構写真は大塚が撮影、遺物写真は石井克己が撮影した。
7. 遺跡の遺構測量は、株式会社測研の阿部祐樹・高平新吾が、空中写真は、武井英太が実施した。
8. 本書の整理は、株式会社測研文化財研究室の大塚昌彦・黒田紀子・関智賀子が実施した。
9. 本書の執筆は、第 1 章第 1 節は高崎市教育委員会文化財保護課が、それ以外の執筆と編集は大塚が行った。
10. 石器の石材鑑定は、パリノ・サーヴェイ株式会社の坂元秀平が行った。
11. 出土遺物及び遺構・遺物図面、遺構・遺物写真等は、すべて高崎市教育委員会が保管している。
12. 発掘調査から報告書作成にあたり、下記の関係機関・関係各位からご助言・ご指導・ご協力をいただいた。

川端建材株式会社 かみつけの里博物館 パリノ・サーヴェイ株式会社
石井克己 飯塚 誠 石坂 茂 清水 豊 志村直之 大工原 豊 高橋 敦 角田真也 中村博樹
永井智教 増田 修 三宅敦氣 矢島 浩 (順不同 敬称略)

凡　例

1. 本書で使用した座標は、すべて世界測地系（測地成果 2011）である。
2. 採図中における方位（N）は、座標北を示す。
3. 遺構図の縮尺は、各図に明示している。
4. 遺構断面の水準値は、海拔を示している。
5. 遺物実測図の縮尺は、各図に明示している。
6. 遺物写真の縮尺は、実測図とほぼ同寸になるよう掲載した。
7. 本報告書に使用した地図は下記のとおりである。
国土地理院発行「前橋」「下室田」電子地形図 2 万 5 千分の 1
群馬町発行群馬都市計画区域図 1 万分の 1 (平成 17 年 1 月)
8. 土層注記及び遺物一覧表中の土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局 財團法人日本色彩研究所監修「新版 標準土色帳」(1998 年版)を使用した。
9. 調査地内に 5 m 四方のグリッド (A～J - 1～12) を設定した。
10. 調査面積は、道路部分の合計 493m² である。

目 次

例言・凡例・目次

第 1 章 発掘調査と遺跡の概要	1
第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 遺跡の立地と周辺の環境	2
第 3 節 遺跡の概要	4
第 4 節 基本土層	4
第 2 章 縄文時代の遺構と遺物	6
第 3 章 古墳時代の遺構と遺物	36
第 4 章 平安時代の遺構と遺物	41
第 5 章 近世の遺構と遺物	46
第 6 章 栗高西弥三郎街道遺跡出土の寄贈遺物	50
第 7 章まとめ	51

写真図版

挿図目次

第 1 図	遺跡位置図	1
第 2 図	周辺の遺跡図	2
第 3 図	遺跡全体図及びグリッド配置図	4
第 4 図	基本土層	4
第 5 図	時代別遺構全体図	5
第 6 図	7・11 号住居平面及び断面実測図	6
第 7 図	7・11 号住居出土土器実測及び拓影図	7
第 8 図	1 号小竪穴平面及び断面実測図	8
第 9 図	1 号小竪穴出土土器実測及び拓影図	9
第 10 図	1～17 号土坑平面及び断面実測図	10
第 11 図	18～31・51・85～88 号土坑平面及び断面実測図	11
第 12 図	32～45・101～103 号土坑平面及び断面実測図	12
第 13 図	46～50・52～63 号土坑平面及び断面実測図	13
第 14 図	64～69・72・74～84 号土坑平面及び断面実測図	14
第 15 図	73・89～99・104・105・107 号土坑・P 4～7・10・22・23 平面及び断面実測図	15
第 16 図	P1～3・14～20・24～29 平面及び断面実測図	16
第 17 図	1 号長方形柱穴列平面及び断面実測図	16
第 18 図	1～3・5・7～9・11 号土坑出土土器実測及び拓影図	19
第 19 図	12・13・15・16・19～21・23・24 号土坑出土土器実測及び拓影図	20
第 20 図	25・27～29・39・40 号土坑出土土器実測及び拓影図	21
第 21 図	41・42・51・52・59・61・62～65・77・79 号土坑出土土器実測及び拓影図	22
第 22 図	81・83・85・88・90・97 号土坑・P1 出土土器実測及び拓影図	23
第 23 図	1 号倒木跡、70・71 号土坑平面及び断面実測図	24
第 24 図	1 号倒木跡出土土器実測及び拓影図（1）	24
第 25 図	1 号倒木跡出土土器実測及び拓影図（2）	25
第 26 図	遺構外出土土器実測及び拓影図（1）	26
第 27 図	遺構外出土土器実測及び拓影図（2）	27
第 28 図	遺構外出土土器実測及び拓影図（3）	29
第 29 図	遺構外出土土器実測及び拓影図（4）	31
第 30 図	遺構外出土土器実測及び拓影図（5）	31
第 31 図	遺構外出土土器実測及び拓影図（6）	32
第 32 図	縄文時代遺構内出土石製品実測図	34
第 33 図	縄文時代遺構外出土石製品実測図	35
第 34 図	1 号住居平面及び断面実測図	37
第 35 図	3 号住居平面及び断面実測図	37
第 36 図	4 号住居平面及び断面実測図	37
第 37 図	8・9 号住居平面及び断面実測図	38
第 38 図	10 号住居・貯蔵穴平面及び断面実測図	38

第 39 図	3 号住居出土遺物実測図	39
第 40 図	4 号住居出土遺物実測及び拓影図	39
第 41 図	10 号住居出土遺物実測図	39
第 42 図	古墳時代遺構外出土遺物実測図	39
第 43 図	2 号住居平面及び断面実測図	42
第 44 図	5 号住居平面及び断面実測図	42
第 45 図	6 号住居平面及び断面実測図	42
第 46 図	2 号住居出土遺物実測及び拓影図	42
第 47 図	5 号住居出土遺物実測及び拓影図	43
第 48 図	6 号住居出土遺物実測図	44
第 49 図	平安時代遺構外出土遺物実測及び拓影図	44
第 50 図	1 ~ 3 号ムロ平面及び断面実測図	47
第 51 図	1 ~ 3 号井戸平面及び断面実測図	47
第 52 図	1 号溝平面及び断面実測図	47
第 53 図	近世 1 号ムロ出土遺物実測及び拓影図	48
第 54 図	近世 2 号井戸出土遺物実測図	48
第 55 図	近世 3 号井戸出土遺物実測図	48
第 56 図	近世遺構外出土遺物実測及び拓影図	48
第 57 図	かみつけの里博物館に寄贈された遺物実測図	50

表目次

第 1 表	周辺遺跡一覧表	3
第 2 表	縄文時代土坑・ピット一覧表	17
第 3 表	縄文時代出土石器一覧表	33
第 4 表	古墳時代出土遺物一覧表	40
第 5 表	平安時代出土遺物一覧表	45
第 6 表	近世出土遺物一覧表	49

第1章 発掘調査と遺跡の概要

第1節 調査に至る経緯

平成30年10月、土地所有者と開発業者から、高崎市棟高町において計画している宅地造成工事に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課（以下、市教委と略）にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である棟高西弥三郎街道遺跡内に所在するため、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。同年10月12日には、市教委へ埋蔵文化財試掘（確認）調査依頼書が提出され、同年11月29日に試掘（確認）調査を実施した。その結果、縄文時代中期の堅穴建物跡と古墳時代から平安時代の堅穴建物跡を確認した。この結果をもとに開発者と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。なお遺跡名については「棟高西弥三郎街道遺跡」とした。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要項」に順じ、平成31年1月11日に開発業者と、民間調査機関株式会社 測研との間で契約を締結、また同日に開発業者・株式会社 測研・市教委での三者協定も締結し、調査の実施にあたって市教委が指導・監督することとなった。

棟高西弥三郎街道遺跡の埋蔵文化財発掘調査及び報告書作成費については、土地所有者である志村洋子氏と株式会社 測研が発掘調査委託契約書を平成31年1月17日に締結した。契約期間は平成31年1月28日から平成31年8月31日で、発掘調査は平成31年1月28日から開始した。

（高崎市教育委員会文化財保護課）



第1図 遺跡位置図（群馬都市計画区域図 1/10,000 を使用）

第2節 遺跡の立地と周辺の環境（第2図）

「棟高西弥三郎街道遺跡」は、群馬県高崎市棟高町（旧群馬町）字西弥三郎街道 2221-1・2222-1・2222-2・2222-3 番地に所在する。

榛名山東南麓に形成された相馬ヶ原扇状地の先端付近が遺跡地で、「棟高西弥三郎街道遺跡」は中島川と天王川とに挟まれた帯状微高地に位置している。西側は、三ツ寺公園から堤下公園にかけての谷筋が微高地と明瞭に接する所である。(PL.1) 標高は、126.8 mを測る。周辺は発掘調査の実施がない地域であった。この近くで最近発掘調査が行われた所は、当遺跡から北側に「棟高南八幡街道遺跡」(2)、「棟高南八幡街道遺跡 2」(3)、「棟高南八幡街道遺跡 3」(4)などがあるが、どれもが小範囲の調査である。

土地所有者の先代志村繁夫氏が、今回発掘調査をした土地から出土したものを「かみつけの里博物館」に寄贈している。(第 57 図) その中の石製鋤車に「車」と刻書された資料が含まれており、榛名山東南麓一帯が「くるま」と呼ばれていたことから、この「車」との関係が注目されている。

縄文時代は、「上野国分僧寺・国分尼寺中間地域」(71) で竪穴住居 34 軒の縄文中期加曾利 E 2～3 式期の集落を調査している。また、「棟高東新堀遺跡 1」(10) では中期加曾利 E 4 式敷石住居が調査されている。この地域では、縄文中期加曾利 E 式期に集落が定着したものと考えるが、遺跡の数は極めて少ない。

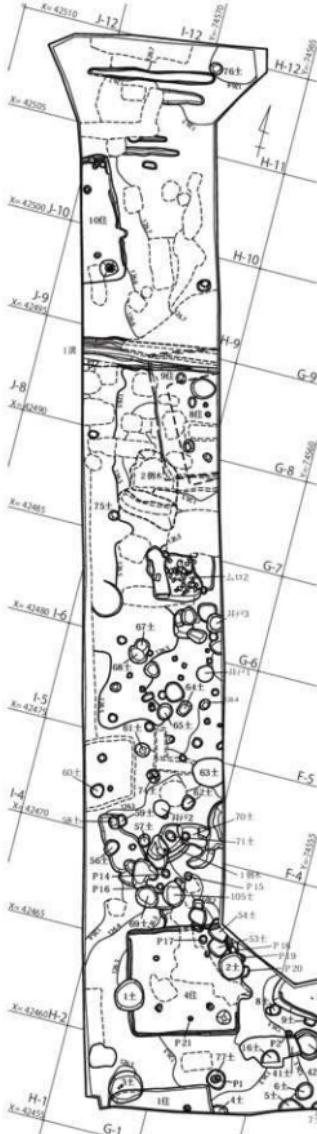
弥生時代は、5 遺跡と少なく、一番近い「三ツ寺 II 遺跡」(41) で西 1 km に位置している。

古墳時代は、「二子山古墳」(22)・「八幡塚古墳」(23)・「薬師塚古墳」(24) の前方後円墳 3 基が所在する「保渡田古墳群」が西 1.5 km に位置している。豪族居館跡である「三ツ寺 I 遺跡」(40) は、南西 1 km に、「北谷遺跡」は、北北東 2.2 km に位置している。この様に豪族の所在する地域の中にあって、「三ツ寺 I 遺跡」の時期の 5 世



第2図 周辺の遺跡図 (国土地理院 1/25000)

第3節 遺跡の概要（第3図）



試掘調査は、遺構の有無を確認するため、高崎市教育委員会文化財保護課が平成 30 年 11 月 29 日に道路部分等を重機により幅 70 cm の試掘調査を 3 力所で行った。

その結果、1・2 トレンチで古墳から平安の竪穴住居跡・土坑・ピット・溝の他、縄文中期の竪穴住居跡・土坑・ピットを検出した。

本調査は幅 6 m の道路部分を重機により、関東ローム層まで表土の剥ぎ取りを行った。東西道路についてはローム層より上部の褐色土層に縄文の遺物包含層が存在していた為、そこまで重機により表土剥ぎを行い、残りは人力により関東ローム層まで確認し、その後各遺構調査を行った。

遺跡の概要是、縄文時代の竪穴住居が 2 軒と土坑 107 基・ピット 29 本が検出された。古墳時代は、竪穴住居を 6 軒検出する。平安時代は、竪穴住居を 3 軒検出する。近世は、ムロ施設 3 基、井戸 3 基、溝 1 条を検出した。その他、近代の穴が無数に確認された。

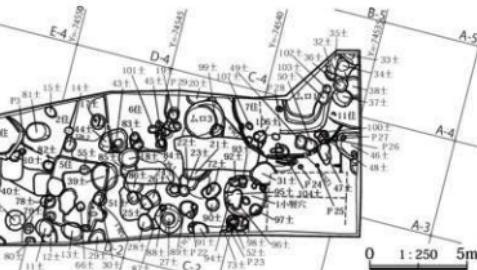
第4節 基本土層（第4図）

本遺跡の基本土層は、試掘調査時の下記土層を使用する。

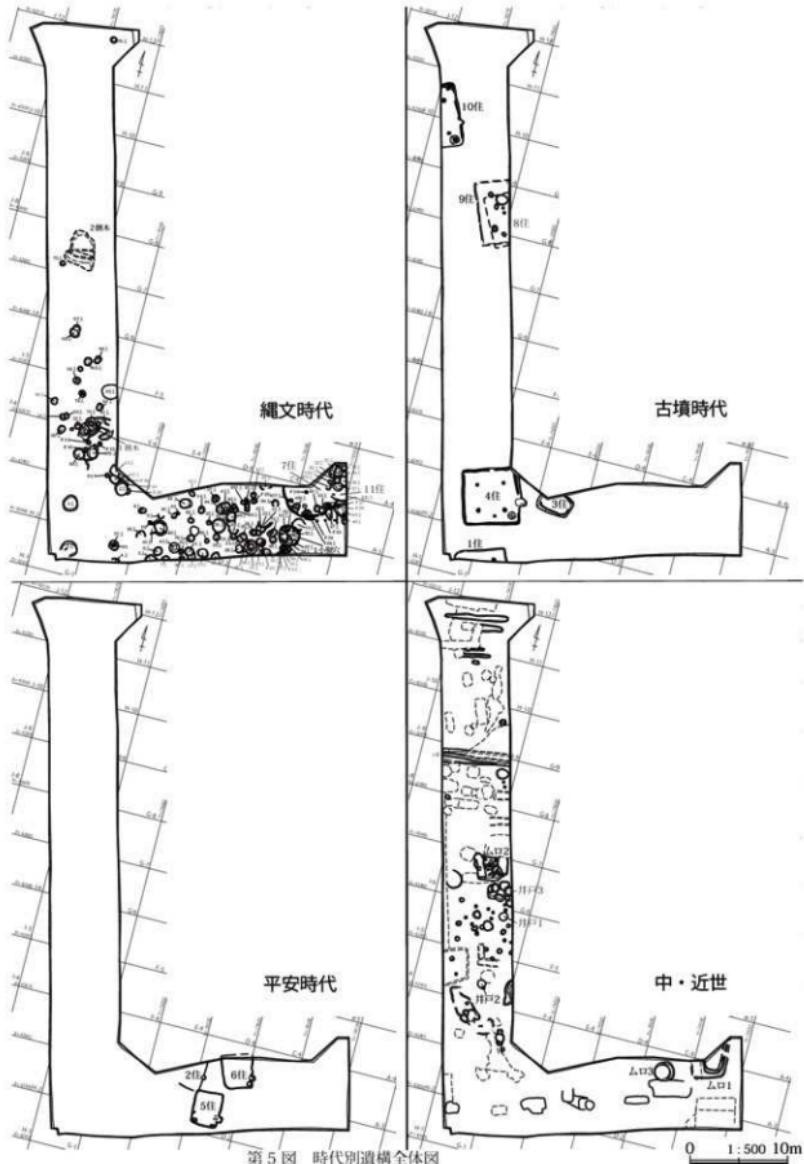
GL = 0	V	V	V
- 45	I		
- 60	II		
BM - 60	III		
0 - 78	IV		
- 100	V		
- 138	VI		

基本土層
 I 層 褐灰色砂質土(10YR4/1)
 表層上 層厚45cm
 II 層 灰黃褐色土(10YR4/2)
 白色軽石・ローム粒を多く含む
 層厚 15cm
 GL-45~70cmで遺構検出
 III 層 黄褐色砂質土(10YR5/6)
 層厚 18cm ローム層
 IV 層 黄褐色シルト層(10YR5/8)
 ややしまる 層厚22cm
 V 層 にいぶ黄褐色砂質土(10YR5/3)
 層厚38cm
 VI 層 褐色砂質土(YR5/1)
 固くしまる

第4図 基本土層



第3図 遺跡全体図及びグリッド配置図



第5図 時代別遺構全体図

第2章 繩文時代の遺構と遺物

繩文時代は、遺構として竪穴住居2軒・土坑107基・小豎穴1基・ピット29本を検出した。(第5図)

7号住居(第6・7・32図 PL 3・10・17)

本住居は、B・C-3グリッドに位置する。住居の中央は、近世の1号ムロに大きく掘削され、がは完全になくなっている。住居床面の直上まで重機の爪痕が残されており、覆土はほとんどなかった。11号住居と重複する。壁溝は半円に巡り、直径約6mを測るほぼ円形の住居と考えられる。壁溝は、幅約10cm深さ、10cmで、断面形は、「U」字状である。床面は、ハードローム面で平坦である。

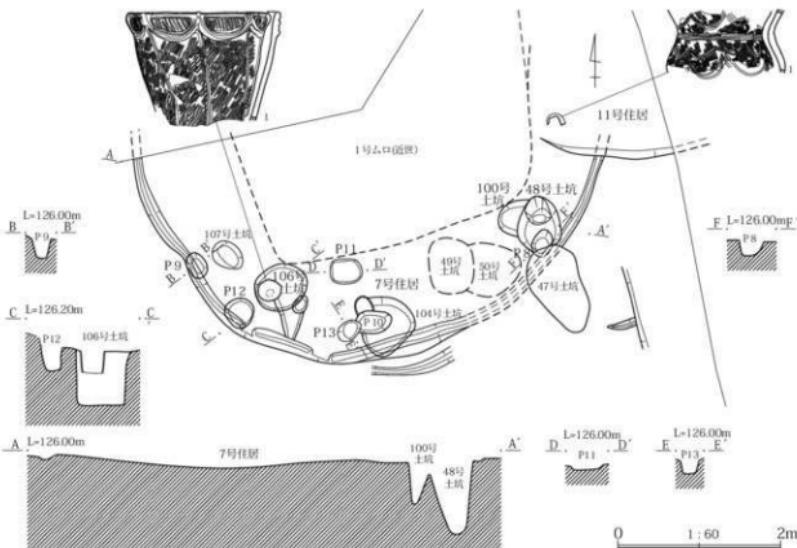
南西側壁寄りで壁から住居内側に50cm入った所に埋甕(第6・7図)があり、深鉢形土器の口縁から胴部までの残存高23cmの個体で、胴下半が打ち欠かれたものが埋設されている。埋甕は口縁部が床面より若干下がる状態で発見された。なお、この埋甕の埋設力所は土坑あるいは、柱穴があったところを利用し、南西の壁に接した状態で設置してあった。埋甕以外の力所は貼床している。

また、住居の床がくぼんだ場所が他にもあり、49・50号土坑も貼床されており、床面が5cm程陥没した状況で南北65cm、東西115cmが重複した状態で存在した。埋甕の下の土坑(106号土坑)と49・50号土坑はほぼ同じような時代のものと考える。ピットは7本確認されているが、みな小さいものである。

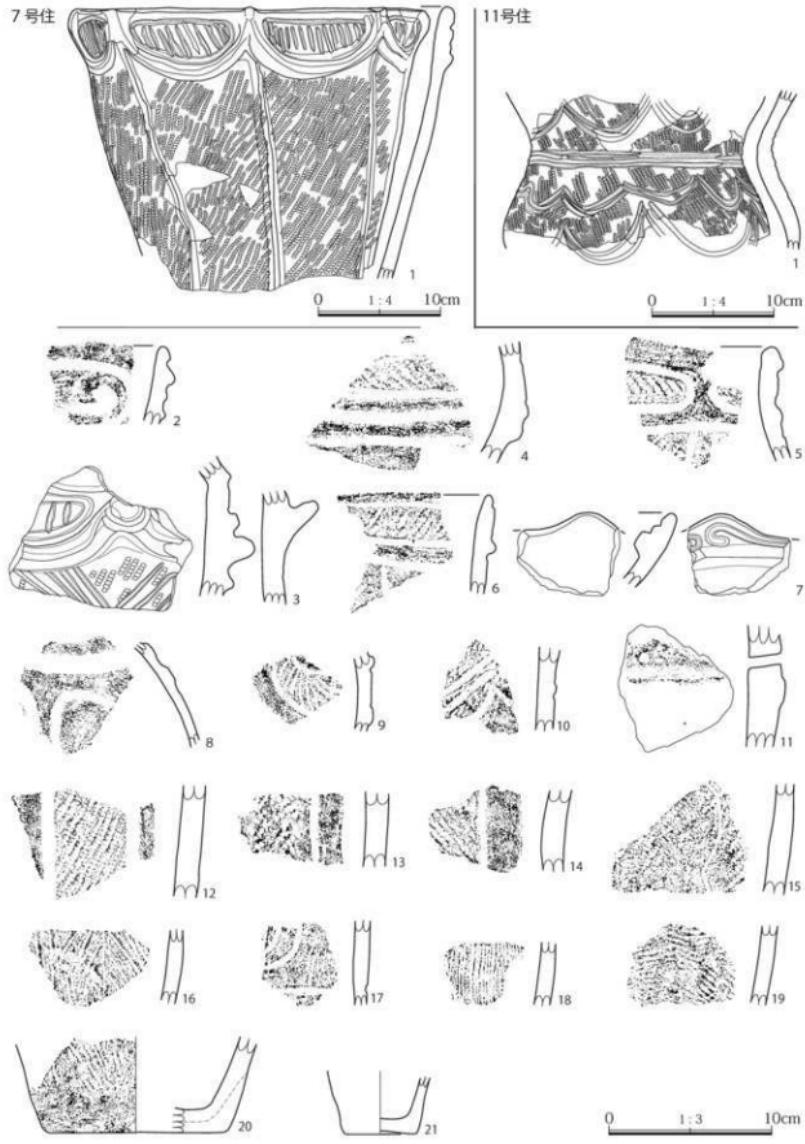
7号住居の南側には壁溝と考えられる溝が部分的に幾つか観察できるが、住居と認定できるものはなかった。
出土遺物(第7図・第32図1)

縄文土器と棒状石製品がある。

1は、埋甕である。口径は29cm、残存高は23cmである。口縁は半円形の隆帯が8単位で構成され、口唇部には隆帯の接点に小突起を外部に向けて8カ所付けている。口縁部の8単位の文様内は沈線区画され内部を斜方



第6図 7・11号住居平面及び断面実測図



第7図 7・11号住出土土器実測及び拓影図

向の沈線で充填している。突起部の下には垂下する隆帯が8カ所ある。LR縄文で垂下する隆帯上にまで施している。

2~7は、口縁部破片である。2~6は、深鉢形土器で沈線による楕円形区画文である。2・3は隆帯の溝巻文、3は、楕円区画内を縦方向の沈線で充填している。4は、口縁部下に頸部無文帯を持つ加曾利E式である。RL縄文。5・6は、2本の沈線が垂下し、地文に擦り消しを行っている。3・5・6は、LR縄文である。7は、波状口縁をもつ浅鉢形土器である。内面に口縁部文様帶を肉厚に作り、歯手状の沈線が巡る。

8~19は、胴部破片である。8は、両耳壺形土器で地文ではなく、沈線文である。9は、沈線区画に斜沈線が充填され、10は、沈線による連弧文が施されている。11は、横位隆帯上に直径6mmの円孔がある。12~14は、垂下する沈線で、擦り消し縄文である。12・13は、LR縄文。14は、RL縄文である。15は、LR縄文に垂下する蛇行する沈線がある。16は、半裁竹管で綾杉文を施文している。17・18は、地文に櫛描文がある。19は、縄文単位の短いLR縄文である。

20・21は底部片である。20は、底径11cmで体部にLR縄文が施文されている。21は、底径4.4cmで若干底部中央が上げて底で、体部無文である。

7・9・10・16・17などは、綾杉文や沈線文が施文され「曾利系」の土器群と考えられる。

本住居は、縄文時代中期加曾利E式期に比定される。

11号住居（第6・7、PL 3・10図）

本住居はB-C-3グリッドに位置する。7号住居と重複関係にあり、本住居の方が新しい。

弧状の南壁が1.65m確認されており、壁高は15cmを測る。壁溝は確認されていない。柱穴についても検出されていない。床面はローム層で平坦である。

出土遺物（第6・7図）

1は、南壁より25cmの位置から連弧文のある深鉢形土器の一括個体として出土した。頸部に2本の横位半裁竹管文を描き、地文にRL縄文を施文している。口縁部も胴部も2本の半裁竹管で連弧文を8単位施している。残存部分での口縁部の連弧文は1段、胴部は2段の連弧文が下段が8単位、上段は16単位である。

本住居は、縄文時代中期加曾利E式期に比定される。

1号小竪穴（第8・9、PL 3・10図）

本遺構は、B-C-2・3グリッドに位置する。

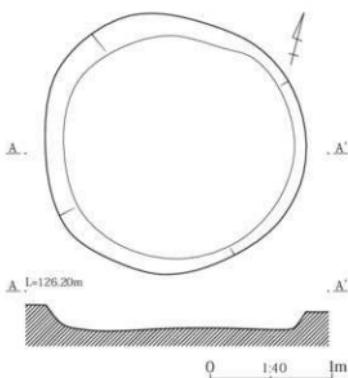
小竪穴で平面形は円形。規模は直径2.12m、壁高20cmである。床面は、ローム層で平坦である。この小竪穴に隣接する柱穴などは検出されていない。この遺構の下に多くの中期加曾利E式土器を伴う土坑群やピットなども検出されているが、小竪穴に伴うものではない。

覆土については、黒色土なのは住居・土坑等を含めて唯一、本遺構だけである。

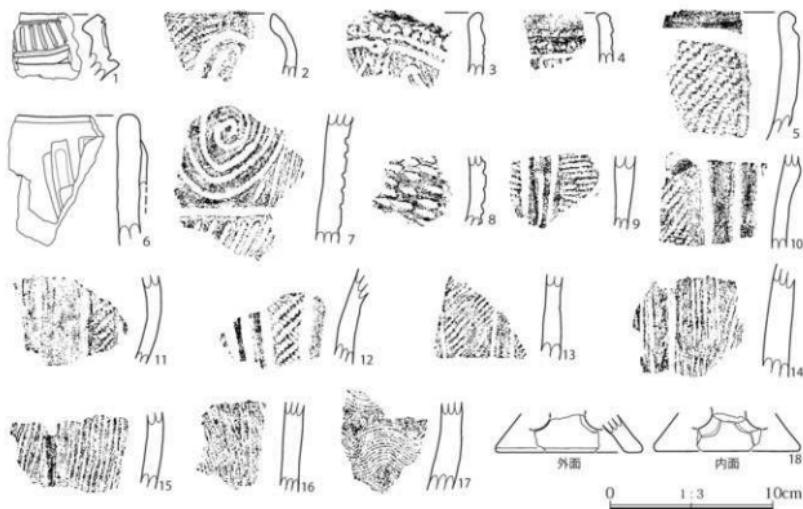
出土遺物（第9・29~32図）

大きな遺物の出土はなかったが、加曾利E式から堀之内II式の土器片と打製石斧・棒状石製品が認められた。

1~6は、口縁部破片である。1は、楕円形区画内に斜方向の沈線を充填している。2~5は、口縁部片で3は波状



第8図 1号小竪穴遺構平面及び断面実測図



第9図 1号小豎穴遺構出土土器実測及び拓影

口縁である。2は、2本の沈線を逆U字文を施している。地文はR L繩文。3・4は、口縁部に横位連続刺突文を、3は円形竹管文で1例、4は棒状工具で2列施している。3は、波頂部の円形竹管の刺突文を中心に沈線を横・斜・縦位に施している。地文はL R繩文。

6～8は、曾利式系の土器と考えられる。6は、無文に棒状の貼付文を2本縦方向に施している。7は、横位沈線の上部は沈線による渦巻き文や縦方向の沈線が施され、下部は斜方向の沈線を充填している。8は、刺突文で充填している。

9～13は、垂下する沈線間を擦り消し繩文しており、地文はL R繩文である。14・15は、垂下する沈線や隆帯に縦方向の沈線を充填している。16も同様な縦方向の沈線をもつ。17は、13本の櫛状工具でループ文を横位に描く。

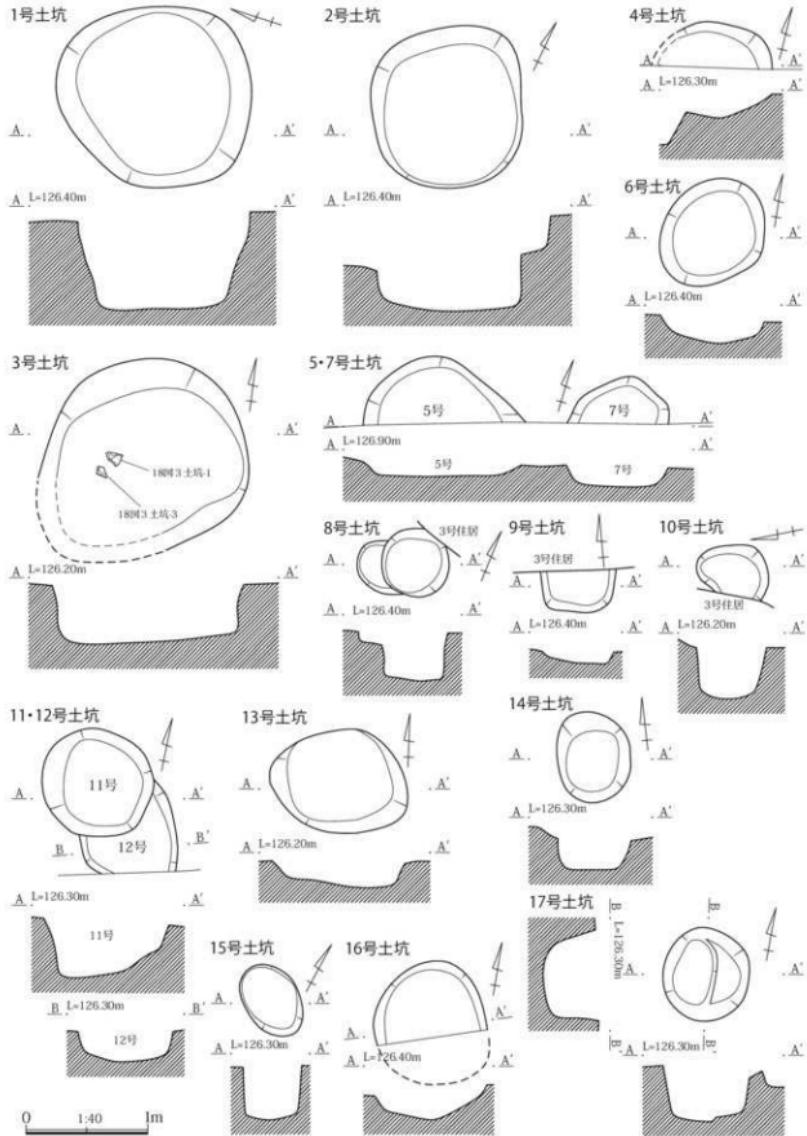
18は、台付深鉢の台部分で底径は9cm、残存高1.1cmで直徑約1cmの円孔が2カ所穿たれている。円孔は4カ所あったものと考える。この台付深鉢は希少資料である。

この小豎穴の時期は、ここでは加曾利E式の資料を取り上げているが、遺構外出土資料として称名寺式（第29図2・3・6・8）から堀之内II式（第30図8、第31図31・45）の時期の土器があり、繩文後期の遺構に比定される可能性が高い。

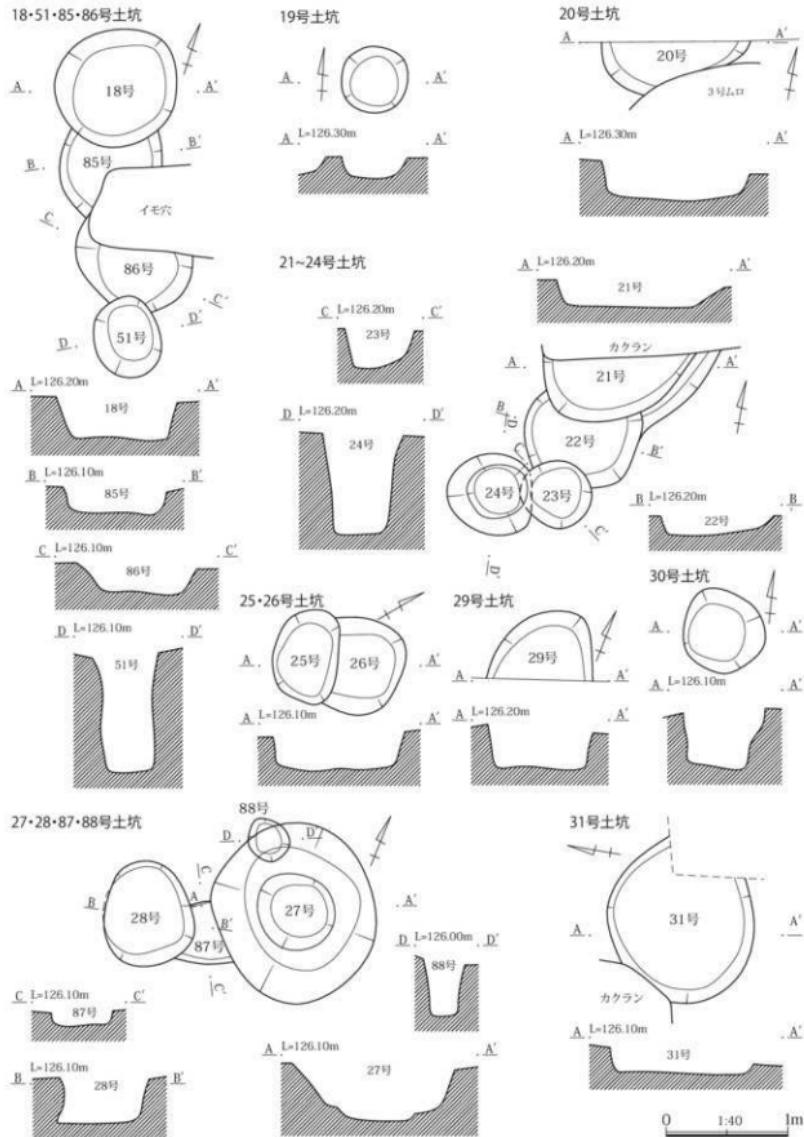
土坑・ピット（第10～16・18～22図、PL 4～6・11～13）

土坑は107基、ピットは29本が存在しており、一覧表（第2表）で報告する。なお、その中でも土坑として特徴的なものや、遺物が特徴的であるものを記述でも報告する。

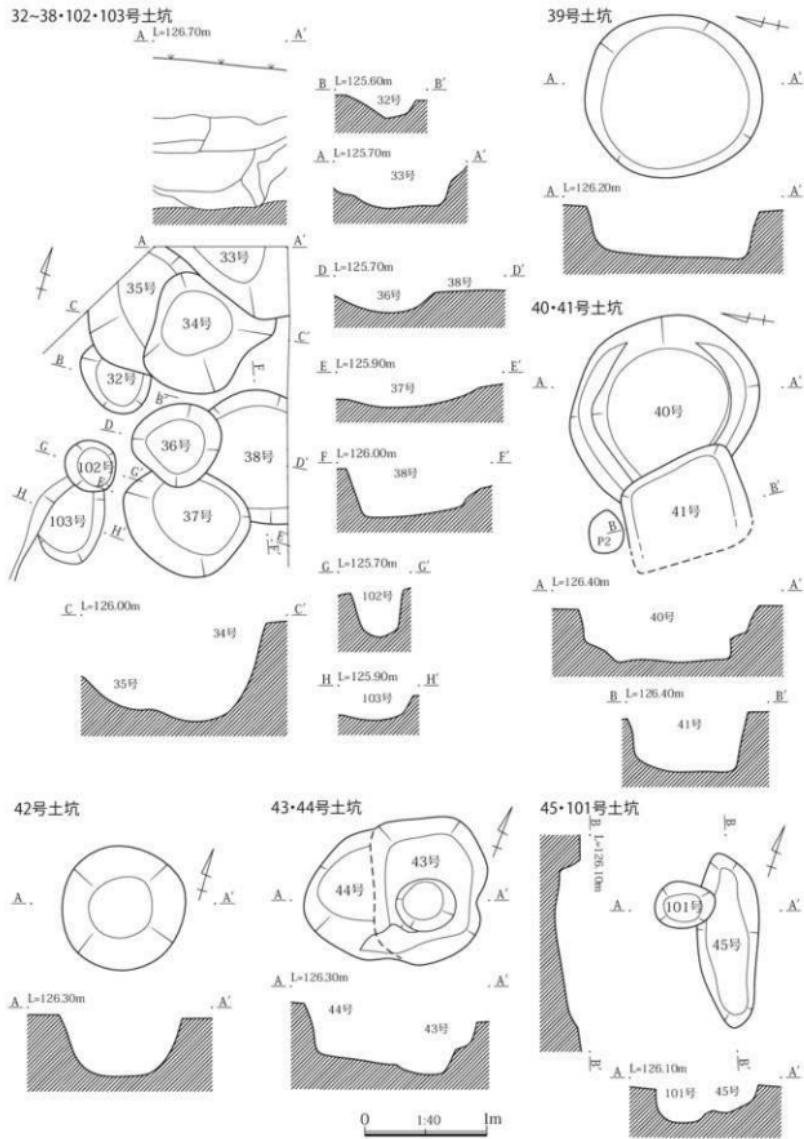
1・2・3号土坑（第10図）は、集落の西端に位置している。この3基の土坑の規模は、径が120～160cmで深さが46～76cmと大きくて深い。遺跡の西端でこのような大型土坑がまとまって存在することは一つの特徴である。覆土の上層で2号土坑（第18図）のように繩文後期堀之内II式の破片が出土しているが。土坑の



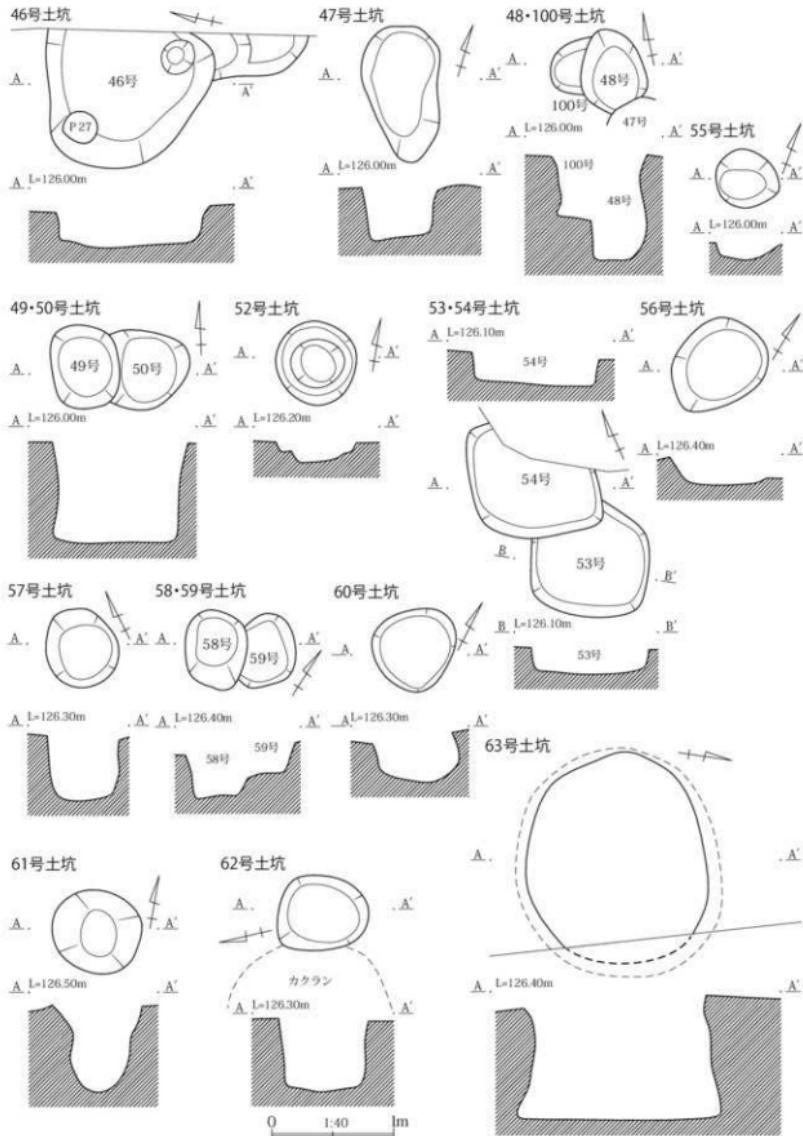
第10図 1～17号土坑平面及び断面実測図



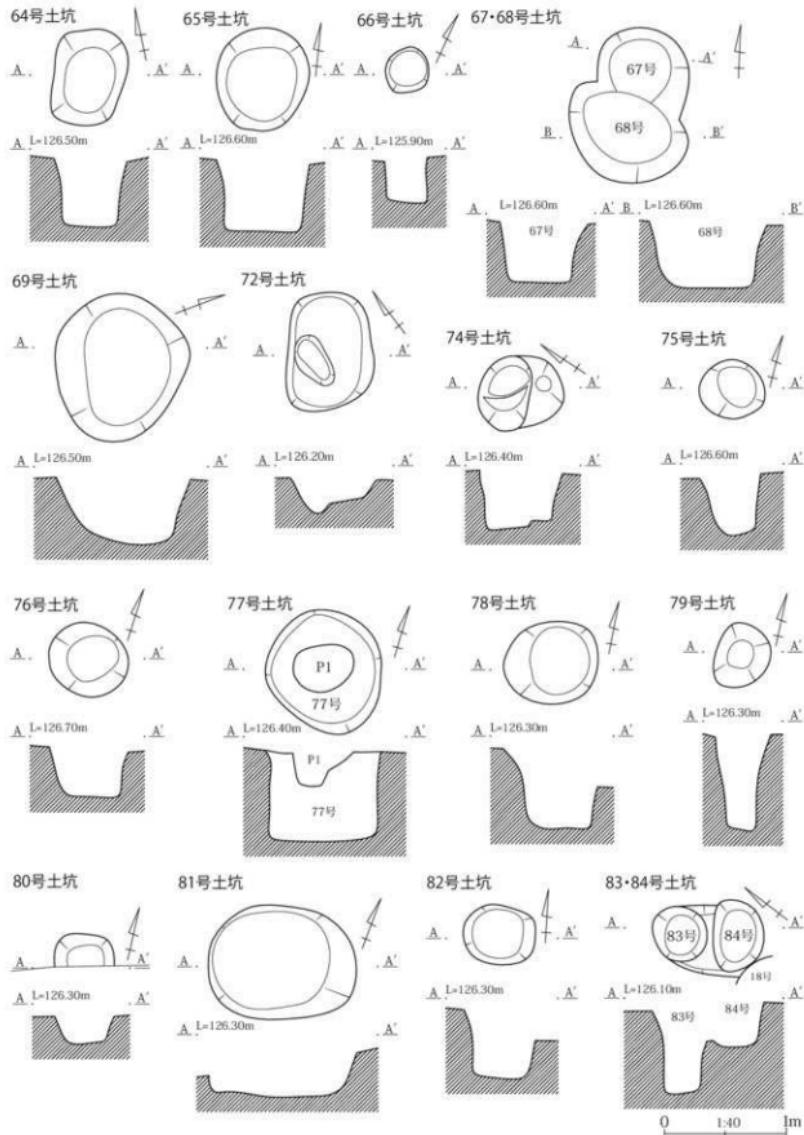
第11図 18～31・51・85～88号土坑平面及び断面実測図



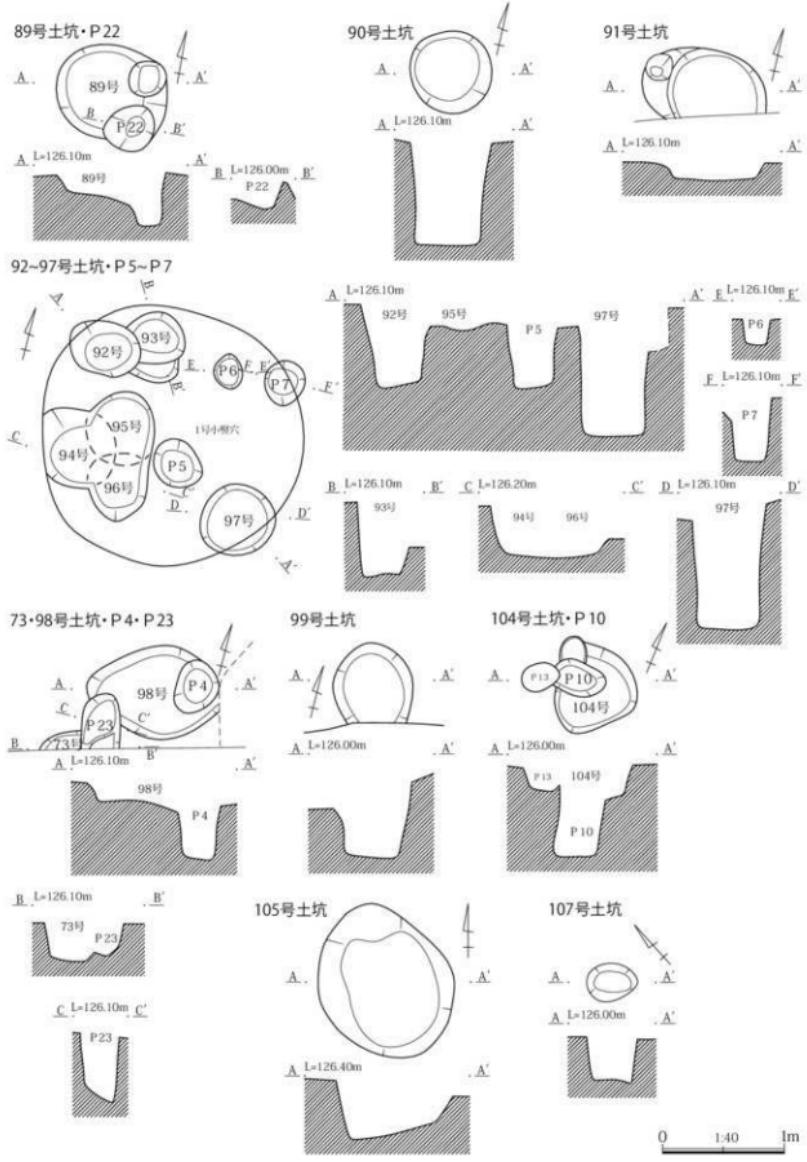
第12図 32～45・101～103号土坑平面及び断面実測図



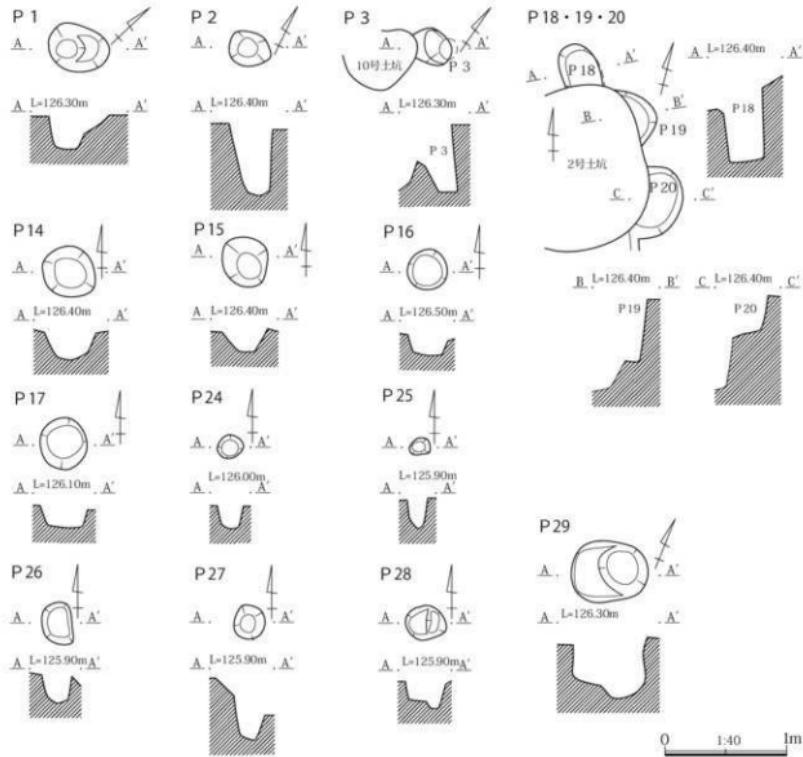
第13図 46～50・52～63号土坑平面及び断面実測図



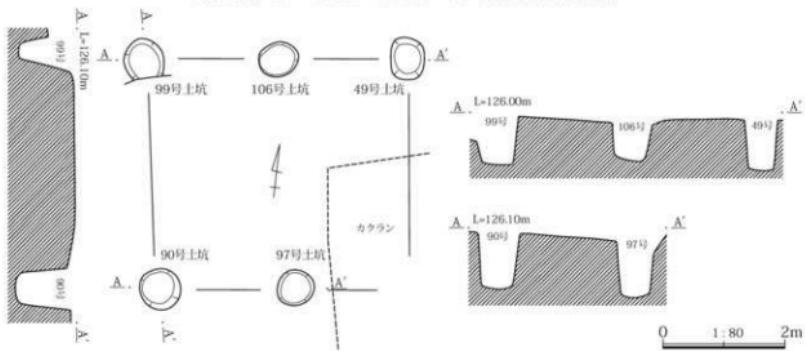
第14図 64～69・72・74～84号土坑平面及び断面実測図



第15図 73・89~99・104・105・107号土坑・P4~7・10・22・23平面及び断面実測図



第16図 P1～3・14～20・24～29 平面及び断面実測図



第17図 1号長方形柱穴列平面及び断面実測図

第2表 漢文時代土坑・ピット一覧表

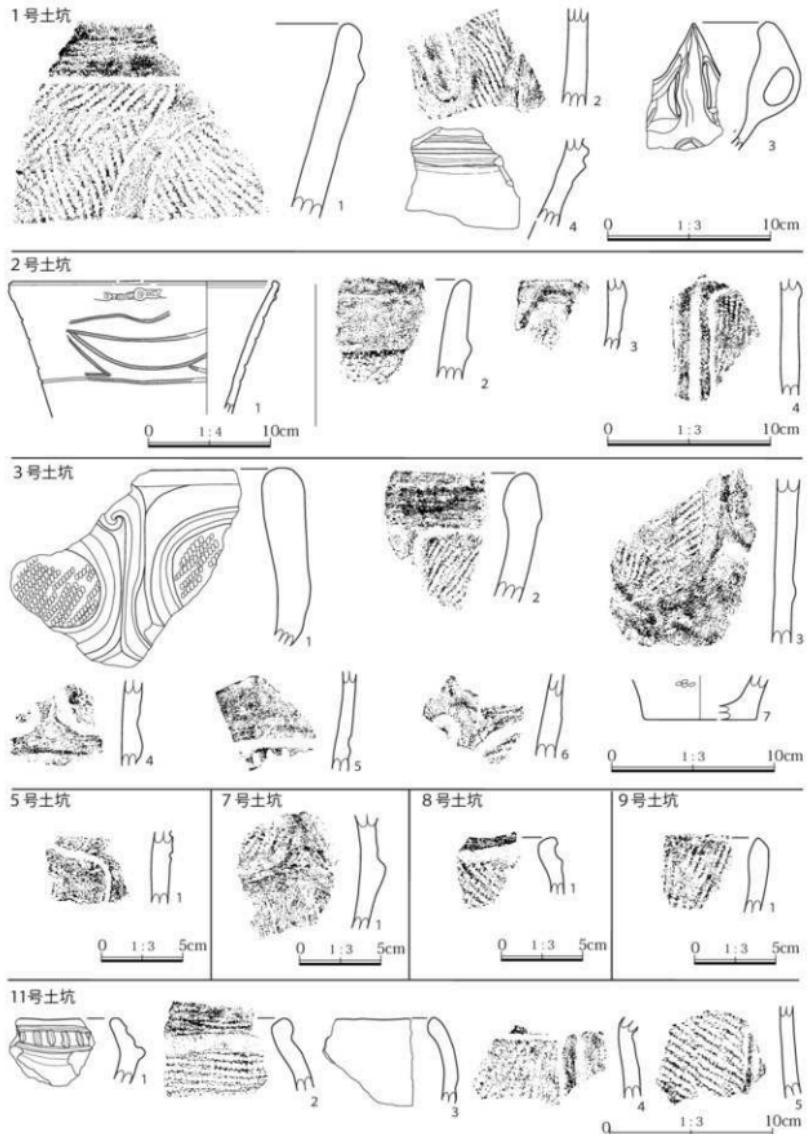
測量番号	位置	形状	直徑 (m)	時代	出土遺物			その他
					縦・中	縦・後	心部	
10回 18-32回	4 11-17	1土坑 G-2	円形 160×150×72	加賀利E	○	○	○	打製石斧1
10回 18回	4 11	2土坑 F-2・3	円形 124×122×76	加賀利E	○	○	○	打製石斧1
10回 18回	4 11	3土坑 G-1	円形 165×160×46	加賀利E	○	○	○	打製石斧片1
10回 —	4	4土坑 F-1	円形 —×100×22	—	—	—	—	—
10回 18回	4 11	5土坑 E-1	円形 —×134×14	加賀利E	○	○	○	ピット1
10回 —	4	6土坑 E-1・2	楕円形 92×84×16	加賀利E	—	—	—	—
10回 18回	4 11	7土坑 E-1	円形 —×82×16	加賀利E	○	○	○	—
10回 18回	4 11	8土坑 E-F-2	円形 56×56×40	加賀利E	—	—	—	—
10回 18回	—	9土坑 E-2	圓丸形 —×62×10	加賀利E	—	—	—	—
10回 —	4	10土坑 E-2	不整円形 60×—×54	加賀利E	—	—	—	—
10回 18-32回	4-5 11-17	11土坑 D-2	円形 90×88×46	加賀利E	○	○	○	打製石斧3
10回 18-32回	4 11-17	12土坑 D-1・2	楕円形 —×80×24	加賀利E	○	○	○	打製式土器 打製石斧2 積石石製品1 ピット1
10回 19回	4 11	13土坑 D-2	円形 110×86×16	加賀利E	○	○	○	—
10回 —	—	14土坑 D-2・3	楕円形 74×60×36	—	—	—	—	—
10回 19回	4 11	15土坑 E-3	楕円形 64×44×44	加賀利E	○	○	○	—
10回 19-32回	—	16土坑 E-2	円形 94×94×26	加賀利E	○	○	○	打製石斧3
10回 —	4	17土坑 D-3	円形 76×70×40	加賀利E	—	—	—	—
11回 —	—	18土坑 D-2・3	円形 100×98×34	加賀利E	—	—	—	—
11回 19回	4 11	19土坑 C-3	円形 56×56×16	加賀利E	○	○	○	ピット1
11回 19回	4 11	20土坑 C-3	円形 —×122×30	加賀利E	○	○	○	ピット1
11回 19回	4 11	21土坑 C-2・3	楕円形 —×124×20	加賀利E	○	○	○	腹之内土器付着物あり 打製石斧先端破片1 裂片1
11回 —	4	— 22土坑 C-2	円形 —×94×14	—	—	—	—	—
11回 19回	4 11	23土坑 C-2	円形 60×56×32	加賀利E	—	—	—	—
11回 19回	4 12	24土坑 C-2	円形 66×66×84	加賀利E	○	○	○	柱穴
11回 20回	4 12	25土坑 C-2	楕円形 76×54×26	加賀利E	○	○	○	ピット1
11回 —	4	— 26土坑 C-2	円形 —×78×26	—	—	—	—	—
11回 20-32回	5 12-17	27土坑 C-2	円形 142×138×48	加賀利E	○	○	○	2段階・底面中央に直径 60 深さ 8cm の孔み 称名寺式土器 石(軽石) 1 雲母片岩1
11回 20回	—	28土坑 C-2	円形 84×76×36	加賀利E	—	—	—	打製石斧1
11回 20回	—	29土坑 D-2	楕円形 —×80×34	称名寺	—	—	—	腹之内B式土器 裂片1
11回 —	—	30土坑 D-2	円形 72×67×59	—	—	—	—	—
12回 —	—	31土坑 B-3	円形 134×120×20	—	—	—	—	—
12回 —	5	— 32土坑 B-4	円形 63×53×14	—	—	—	—	—
12回 —	3	— 33土坑 B-4	不整円形 —×96×71	—	—	—	—	—
12回 —	—	— 34土坑 B-4	不整円形 98×96×76	—	—	—	—	—
12回 —	—	— 35土坑 B-4	不整円形 104×—×70	—	—	—	—	—
12回 —	—	— 36土坑 B-4	円形 72×68×14	—	—	—	—	—
12回 —	—	— 37土坑 B-4	円形 106×86×16	—	—	—	—	—
12回 —	—	— 38土坑 B-4	円形 106×—×39	—	—	—	—	—
12回 20回	5 12	39土坑 D-2	円形 146×136×38	加賀利E	○	○	○	腹之内B式土器
12回 20-32回	5 12-17	40土坑 E-2	円形 156×150×44	加賀利E	○	○	○	打製式土器 打製石斧2 裂片2
12回 21-32回	5 12-17	41土坑 E-2	方壺 106×—×48	加賀利E	○	○	○	腹之内B式土器 打製石斧3 裂片3
12回 21回	5 12	42土坑 E-2	円形 102×98×48	加賀利E	—	—	—	中心に直径 44cm×18cm の穴
12回 —	5	— 43土坑 D-3	円形 120×96×42	—	—	—	—	—
12回 —	—	— 44土坑 D-3	不整形 106×—×42	—	—	—	—	—
12回 —	—	— 45土坑 C-3	長円壺 144×52×22	—	—	—	—	—
13回 —	—	— 46土坑 A-B-3	不整円形 140×—×32	—	—	—	—	柱穴2
13回 —	—	— 47土坑 B-3	長円壺 110×64×44	—	—	—	—	—
13回 —	—	— 48土坑 B-3	楕円形 68×54×85	—	—	—	—	—
13回 —	—	— 49土坑 B-3	円形 68×56×86	—	—	—	—	柱穴・孤立 106+99+90+97+
13回 —	—	— 50土坑 B-3	円形 74×64×84	—	—	—	—	—
13回 21回	4 12	51土坑 D-2	円形 66×54×96	加賀利E	○	○	○	柱穴1
13回 21-32回	— 12-17	52土坑 B-C-2	円形 68×68×12	加賀利E	—	—	—	打製石斧1
13回 —	—	— 53土坑 F-3	圓丸形 98×94×20	—	—	—	—	—
13回 —	—	— 54土坑 F-3	圓丸形 102×99×22	—	—	—	—	—
13回 —	—	— 55土坑 D-2	円形 52×47×16	—	—	—	—	—
13回 —	—	— 56土坑 G-H-3	不整円形 84×68×24	—	—	—	—	—
13回 —	—	— 57土坑 G-3・4	円形 66×60×54	—	—	—	—	—
13回 —	—	— 58土坑 H-4	不整円形 60×52×36	—	—	—	—	—
13回 21回	— 12	59土坑 G-H-4	不整円形 60×50×26	加賀利E	—	—	—	積石石製品1 裂片3
13回 —	—	— 60土坑 H-4	円形 68×64×40	—	—	—	—	—
13回 21回	6 13	61土坑 G-H-4	円形 74×68×68	腹之内B式	—	—	—	—
13回 —	—	— 62土坑 G-4	円形 74×64×55	—	—	—	—	—
13回 21-32回	6 13-17	63土坑 G-4・5	円形 126×98×100 190×170	加賀利E	○	○	○	曾利式土器 圖面プラスコ型 打製石斧2
14回 21回	6 13	64土坑 G-5	円形 80×60×58	加賀利E	○	○	○	柱穴
14回 21回	6 13	65土坑 G-5	円形 86×75×56	加賀利E	—	—	—	柱穴
14回 —	—	— 66土坑 D-2	円形 36×36×38	—	—	—	—	—
14回 —	—	— 67土坑 H-5・6	円形 —×74×48	—	—	—	—	柱穴
14回 —	—	— 68土坑 H-5	円形 100×80×56	—	—	—	—	—
14回 —	—	— 69土坑 G-3	不整円形 118×112×54	—	—	—	—	—
23回 —	—	— 70土坑 G-4	円形 42×40×74	—	—	—	—	—
23回 25回	2 13	71土坑 G-4	楕円形 58×46×80	—	○	○	—	—
14回 —	—	— 72土坑 G-4	圓丸形 98×72×28	—	—	—	—	—
15回 —	—	— 73土坑 C-2	楕円形 —×—×32	—	—	—	—	打製石斧1 積石石製品1
14回 —	—	— 74土坑 G-4	円形 68×64×48	—	—	—	—	—

回収番号	PL	遺物	遺構	位置	形状	範囲(cm)		時代	出土遺物	その他の
						横幅	奥行×幅×深さ			
14回	—	6	—	75 土坑	H-7	円形	54×50×50	—	—	—
14回	—	6	—	76 土坑	H-11	円形	66×58×42	—	—	—
14回	21-32回	6	13-17	77 土坑	F-1	円形	98×96×76	加賀利E	○ ○ ○	ミニチュア土器 打製石斧
14回	—	6	—	78 土坑	D-2	円形	74×66×66	—	—	—
14回	21回	5	13	79 土坑	E-D-2	楕円形	54×44×78	加賀利E	○ ○ ○	打製石斧 2 破片 2
14回	32回	—	13-17	80 土坑	D-1	円形	50×22	加賀利E	○ ○ ○	青利式土器
14回	22回	6	13	81 土坑	E-2+3	楕円形	123×94×34	加賀利E	○ ○ ○	破片 2
14回	—	—	82 土坑	E-D-2	円形	58×49×56	加賀利E	○ ○ ○	打製石斧 2 破片 2	
14回	22-32回	—	13-17	83 土坑	D-3	円形	47×45×68	加賀利E	○ ○ ○	打製石斧 2 破片 2
14回	—	—	84 土坑	D-3	楕円形	58×40×36	—	—	—	—
11回	22回	—	13	85 土坑	D-2	円形	—×82×25	加賀利E	○ ○ ○	—
11回	—	—	86 土坑	D-2	円形	—×96×24	—	—	—	—
11回	—	—	87 土坑	C-2	円形	52×—×12	—	—	—	—
11回	22回	—	13	88 土坑	C-2	円形	34×34×46	加賀利E	○ ○ ○	柱穴 破片 1
15回	—	6	—	89 土坑	C-2	円形	92×76×22	遺物無	—	柱穴 1 直径 30×深さ 44cm
15回	22回	6	13	90 土坑	C-2	円形	68×68×83	加賀利E	○ ○ ○	柱穴・圓筒 106+99+90+97+
15回	—	—	91 土坑	C-2	円形	106×82×15	—	—	—	柱穴・輪郭に小穴 22×22×深さ?
15回	—	—	92 土坑	C-2+3	楕円形	60×42×66	—	—	—	—
15回	—	—	93 土坑	B+C-3	円形	48×43×60	—	—	—	—
15回	—	—	94 土坑	C-2	円形	68×64×40	—	—	—	—
15回	—	—	95 土坑	B+C-2	円形	62×56×21	—	—	—	—
15回	—	—	96 土坑	B+C-2	円形	56×50×—	—	—	—	—
15回	22回	6	13	97 土坑	B-2	円形	58×58×101	加賀利E	○ ○ ○	土製瓦飾り 瓦面:3.4厚×2.3幅 壁:31.2g 文様は弧文と刺文文 粒六・瓶立 106+99+90+49+
15回	—	—	98 土坑	B-2	楕円形	112×80×18	—	—	—	—
15回	—	—	99 土坑	C-3	円形	70×68×62	—	—	—	—
13回	—	—	100 土坑	B-3	楕円形	44×—×54	—	—	—	柱穴
12回	—	—	101 土坑	D-3	楕円形	50×38×27	—	—	—	—
12回	—	—	102 土坑	B-4	円形	41×40×37	—	—	—	—
12回	—	—	103 土坑	B-4	楕円形	—×56×18	—	—	—	—
15回	—	—	104 土坑	B-3	楕円形	72×69×28	—	—	—	—
15回	—	—	105 土坑	C-3	楕円形	130×110×50	—	—	—	—
16回	—	—	106 土坑	B-3	楕円形	65×55×70	—	—	—	柱穴・圓筒 49+99+90+97+
15回	—	6	107 土坑	C-3	楕円形	41×32×38	—	—	—	7仕埋甕
16回	22回	—	13	P1	F-1	楕円形	51×38×28	加賀利E	○ ○ ○	—
16回	—	6	—	P2	B-2	円形	36×28×58	加賀利E	○ ○ ○	—
16回	—	6	—	P3	B-2	円形	32×35×53	—	—	—
15回	—	—	—	P4	B-2	楕円形	43×35×44	—	—	—
15回	—	—	—	P5	B-2	楕円形	53×38×39	—	—	—
15回	—	—	—	P6	B-3	楕円形	14×11×11	—	—	—
15回	—	—	—	P7	B-3	円形	16×16×26	—	—	—
16回	—	—	—	P8	B-3	楕円形	30×25×20	—	—	7仕内
16回	—	—	—	P9	C-3	楕円形	31×25×30	—	—	7仕内
15回	—	—	—	P10	B-3	楕円形	45×28×74	—	—	—
16回	—	—	—	P11	B-3	礫丸長方形	40×20×7	—	—	7仕内
16回	—	—	—	P12	C-3	円形	37×36×43	—	—	7仕内
16回	—	—	—	P13	B-3	楕円形	32×20×18	—	—	7仕内
16回	—	—	—	P14	C-3	円形	44×41×23	—	—	—
16回	—	—	—	P15	C-3	円形	43×40×20	—	—	—
16回	—	—	—	P16	G-3	円形	32×32×20	—	—	—
16回	—	—	—	P17	F-3	円形	42×38×18	—	—	—
16回	—	—	—	P18	F-3	楕円形?	—×32×60	—	—	—
16回	—	—	—	P19	F-3	楕円形	—×—×50	—	—	—
16回	—	—	—	P20	F-2+3	楕円形	63×—×35	—	—	—
16回	—	—	—	P21	F-2	円形	24×21×13	—	—	—
16回	—	—	—	P22	F-2	楕円形	40×38×22	—	—	—
16回	—	—	—	P23	C-B-2	錐方形	—×31×26	—	—	—
16回	—	—	—	P24	B-3	円形	21×18×18	—	—	—
16回	—	—	—	P25	B-3	楕円形	16×12×26	—	—	—
16回	—	—	—	P26	B-3	楕円形	34×25×23	—	—	—
16回	—	—	—	P27	B-3	円形	27×24×50	—	—	—
16回	—	—	—	P28	C-3	楕円形	36×28×24	—	—	—
16回	—	—	—	P29	C-3	楕円形	62×51×50	—	—	—

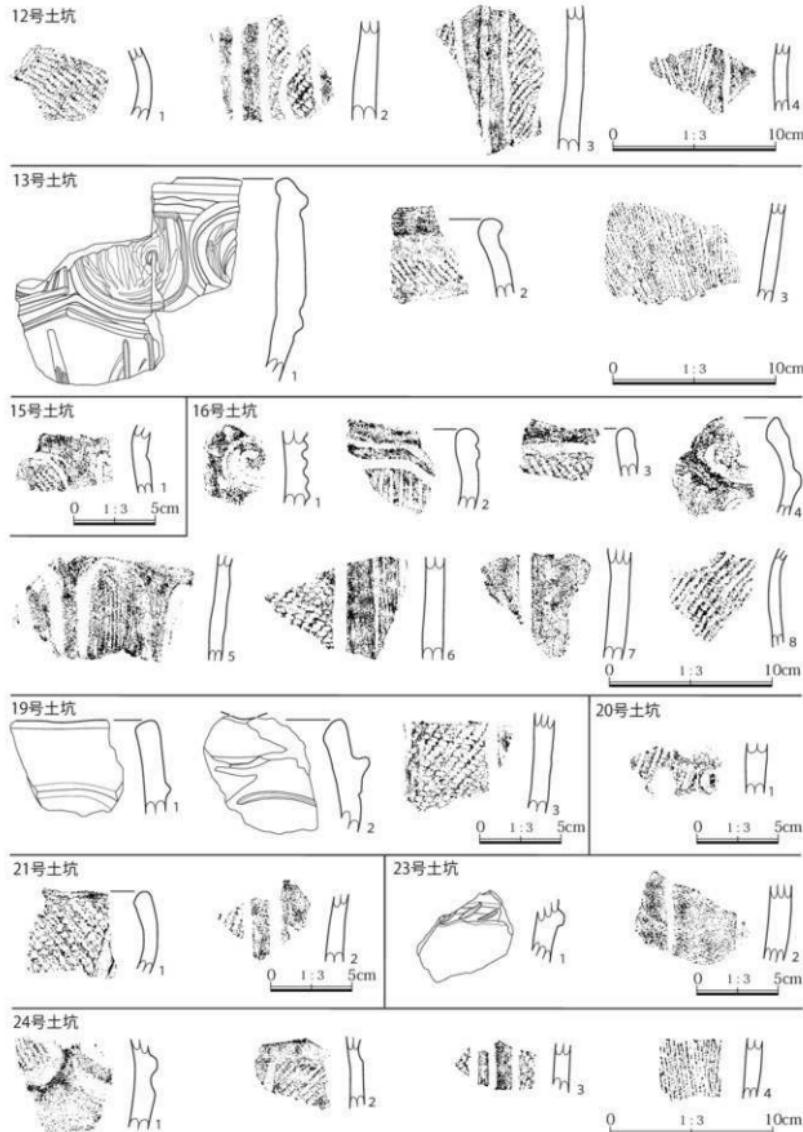
時期は、縄文中期加賀利E 3～4式期である。

29号土坑(第11図)は、平面形は楕円形である。規模は、短径86cm深さ36cmで、北側半分のみの調査である。出土遺物(第20図)は、称名寺式と堀之内式の深鉢破片である。

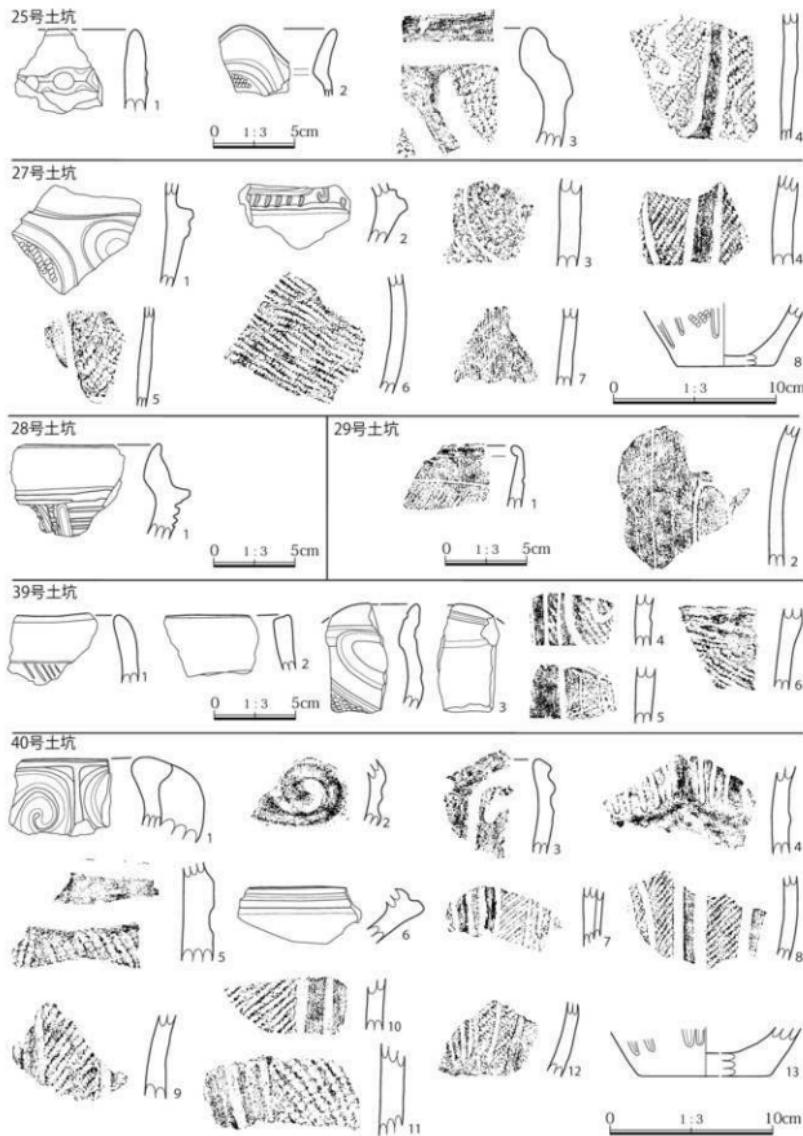
63号土坑(第13図)は、当遺跡唯一の三角フラスコ型土坑である。底面は平坦で南北1.7m、東西1.9mで、確認面の大きさは、南北1.45m、東西1.75mの楕円形で、深さは1mである。出土遺物(第21図)は、1が口縁部に隆帯による渦巻き文と区画文をセットで文様構成しており、地文はRL縄文である。2は、口縁部楕円区画内に斜方向の沈線を充填している。3は、5重の弧状沈線文を施文している。4・5は、沈線区画間に斜方



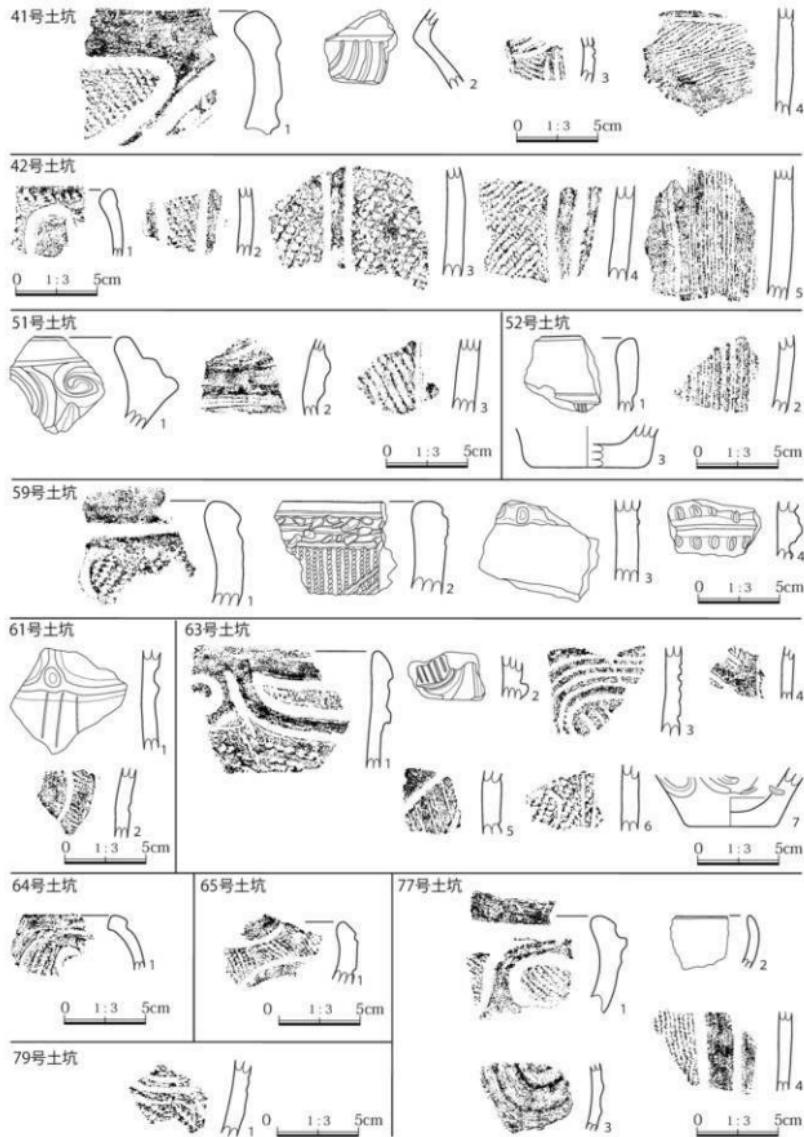
第18図 1~3・5・7~9・11号土坑出土土器実測及び拓影図



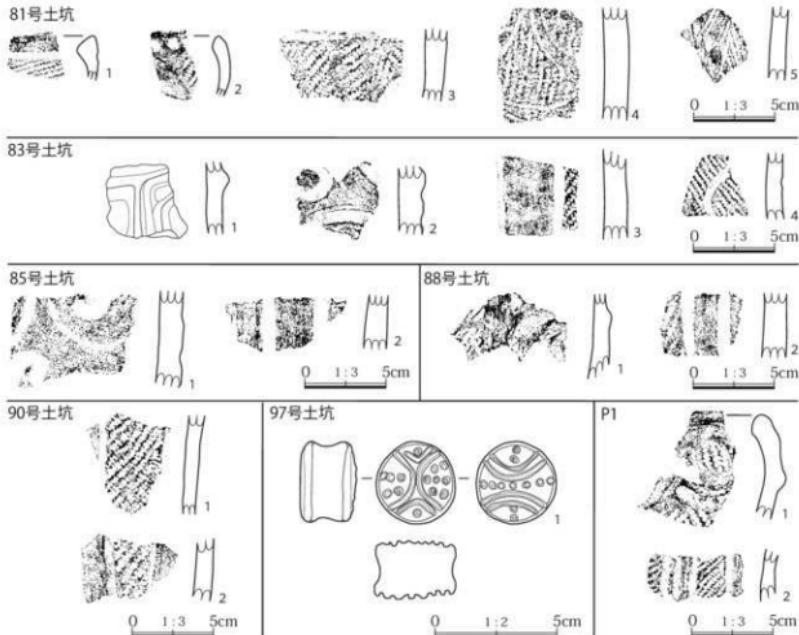
第19図 12・13・15・16・19～21・23・24号土坑出土土器実測及び拓影図



第20図 25・27～29・39・40号土坑出土土器実測及び拓影図



第21図 41・42・51・52・59・61・62～65・77・79号土坑出土土器実測及び拓影図



第22図 81・83・85・88・90・97号土坑・P1出土土器実測及び拓影図

向の沈線を充填している。曾利式系土器。6は、地文にL R縦文を施した上に2本沈線と1本の蛇行沈線を垂下させている。7は、床面からの出土で底部片で底径5.8cm、残存高3.8cmである。文様はU字状文を指で撫で描いている。

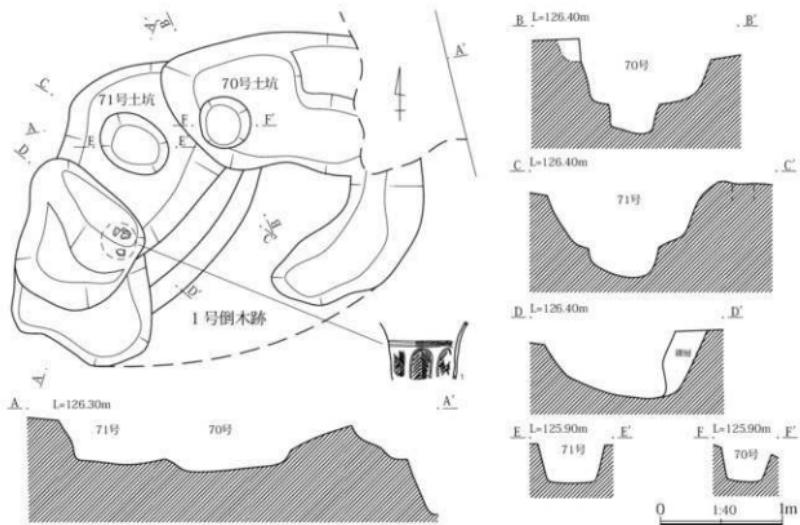
75・76号土坑(第14図)は、他の土坑群から離れてH-7・H-11グリッドから検出された。

97号土坑(第15図)からは、土製耳飾り(第22図)が1点完形品で出土している。形は円形で側面にくぼみを持つ滑車状になっている。大きさは、直径3.4cm厚さ2.3cm重量は31.2gである。表面は、U字を背合わせに四方から区画し、狭い上下区画には1力所、左区画には5点、右区画には7点の細い円形竹管で刺突、裏面は、2本の弧状沈線を背合わせにして中央を横並びに7点上部・下部区画に2点ずつ刺突文を施している。

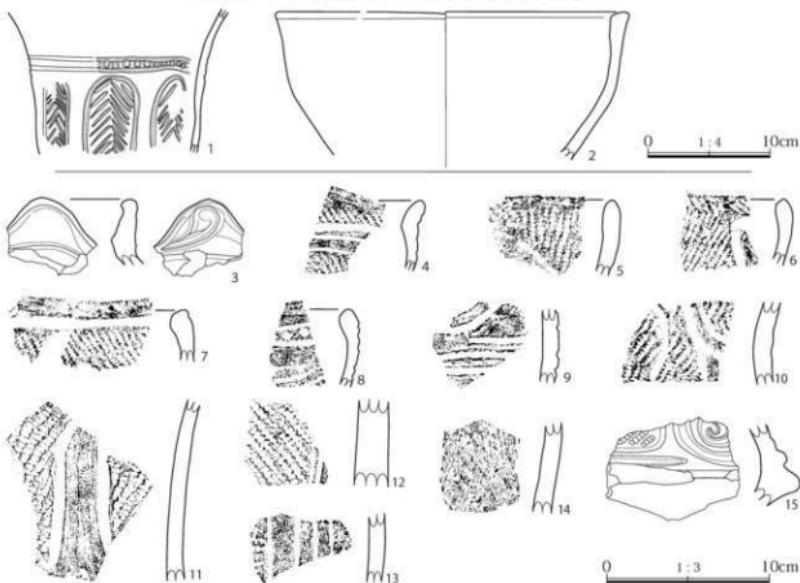
1号長方形柱穴列(第17図)

土坑の中には、円形柱穴列・長方形柱穴列が考えられる、土坑の直径が58~70cmのもので、垂直に壁を持つ深さ62~101cmの一群が存在している。99号土坑・106号土坑・49号土坑・90号土坑・97号土坑の5基で長方形柱穴列となる。土坑の規模がほぼ同じで深さも95cmと深いものである。99号土坑・106号土坑・49号土坑は、1.6m間隔で直線的に並ぶ。さらに3.2m南に90号土坑・97号土坑が平行に並んでいる。49号土坑の対となる土坑の位置が近世の擾乱で確認できなかった。

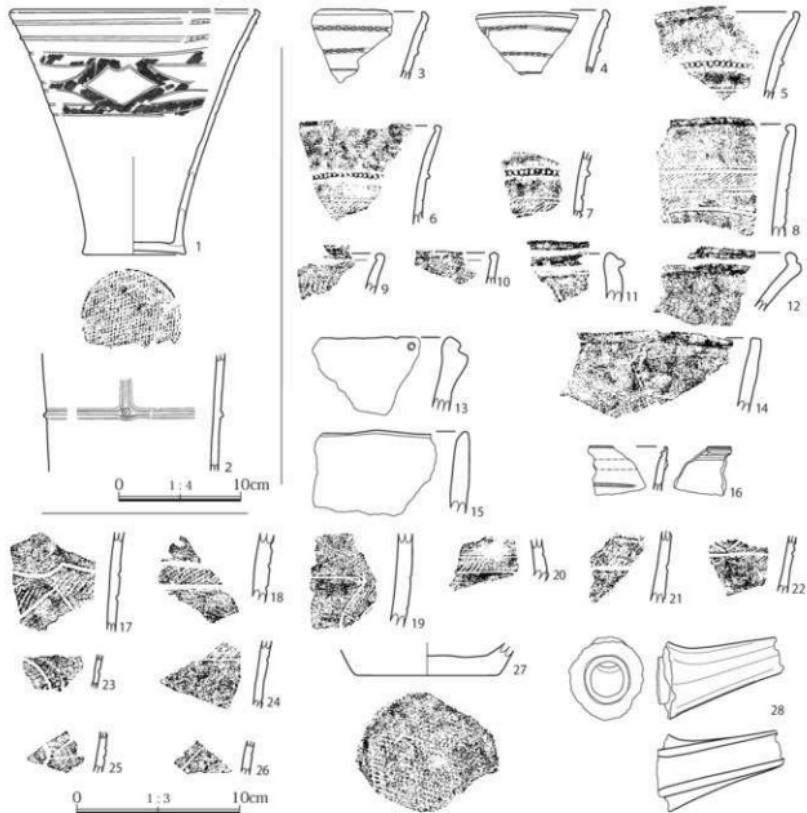
その他にも78・79・51・24・83・50号土坑は同様な深さを持つが、弧状や直線的に並ぶなどの施設に伴う配置を考えることは出来なかった。



第23図 1号倒木跡、70・71号土坑平面及び断面実測図



第24図 1号倒木跡出土土器実測及び拓影図(1)



第25図 1号倒木跡出土土器実測及び拓影図（2）

1号倒木跡（第23～25図、PL 2・13～14）

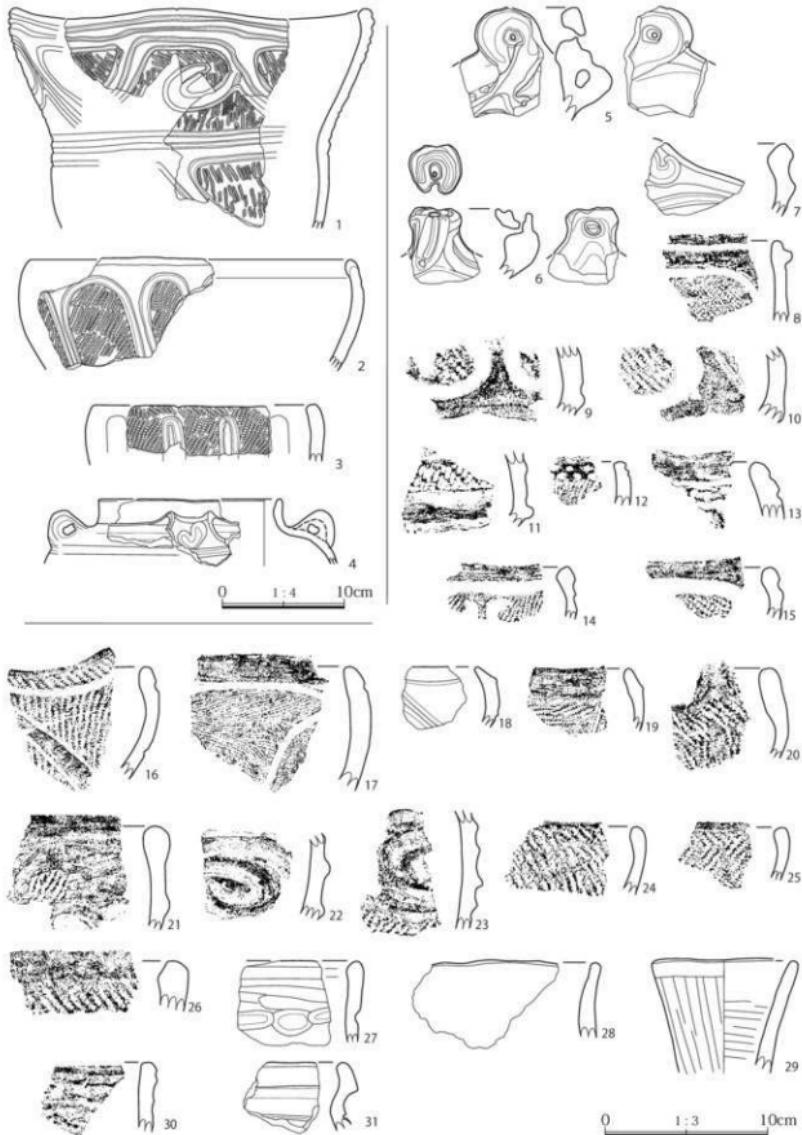
本倒木跡は、G-3・4グリッドに位置する。不定形な三日月状の黒色土が確認されていたため調査した。黒色土の中から、縄文時代中期加曾利E式土器、後期掘之内式土器などの一括出土の土器があった。そのため当初は遺構と考えていたが、壁が検出できず、南側に礫層が面で立ち上がっており、倒木であることが判明した。木は北西側に倒木している。倒木範囲は3.6m×2.5mである。2号倒木跡と同じ時期に、強烈な南風により倒木したものと考えられる。倒木跡内に70・71号土坑の存在があり、土坑底面30cm上で木が根を滑らせている。

出土遺物は、縄文中期加曾利E式・曾利式と同後期掘之内式土器の2つの時期が出土している。

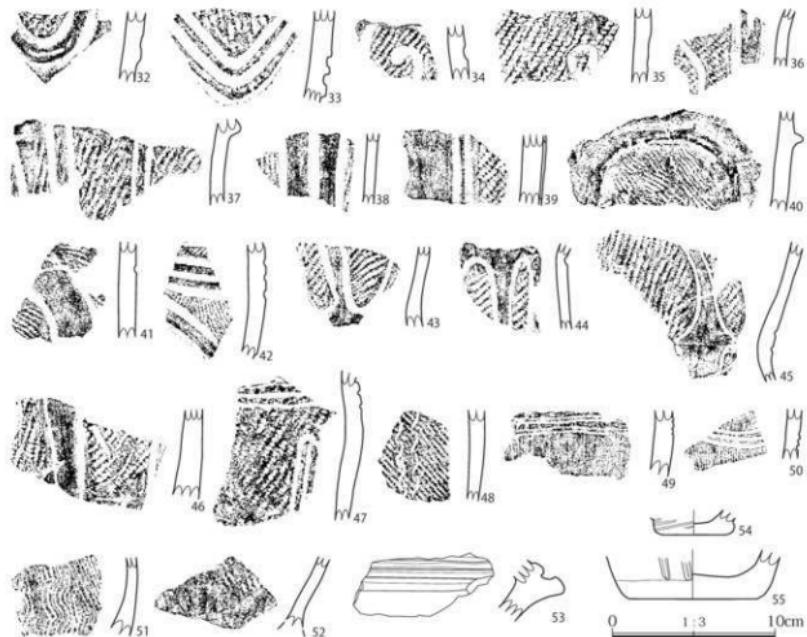
縄文中期加曾利E式・曾利式土器（第24図）

1・2は、復元実測したものである。1は、曾利II式の土器で頸部無文帯、頸部下端に2本の横位沈線で区画されその下にU字に区画された中に綾文を施している。大きさは最大径18cm、残存高11.8cmである。

2は、鉢形土器で口径28.8cm、残存高12.2cmで内外面とも無文である。



第26図 遺構出土土器実測及び拓影図(1)



第27図 遺構外出土土器実測及び拓影図（2）

3～8は、口縁部片で3・4・6は波状口縁である。3は、波頂部の内面に組状粘土を添付後調整して文様を作出している。6は、口唇部と口縁部の縄文が羽状繩文になっている。4～6は、口縁部からLR縄文を施している。8は、2本の沈線間に連続刺突文を施している。11～13は、垂下する沈線間を擦り消している。14は、4本の櫛状工具で櫛描きされている。15は、浅鉢形土器である。口縁と下部に分かれ口縁は渦巻き文と梢円文が1対となり施文され、区画内にはLR縄文が施文されている。

縄文後期掘之内Ⅱ式土器（第25図）

1・2は復元土器である。1は、口径20.0cm、底径8.4cm、器高20.1cmである。口縁部に細い隆帯上に連続刺突文を施し、2本の横位・斜位沈線間に縄文を充填している。口唇部を内側に曲げ内面に沈線が明瞭につくられている。器面は丁寧に磨かれている。底部は若干上げ底になっており、底面に網代痕が認められる。

2は、胴部直径15cmで、地文を丁寧に磨いた器面に幅3mmの隆帯で「T」字面を貼り付けており交点に竹管の刺突文を施している。

3～16は、口縁部破片である。3・4は、1と同一個体の口縁部破片である。5～7は、口縁部破片で口縁部に細い隆帯上に連続刺突文を施し、2本の横位沈線間に縄文を充填している。1・3～10は、口唇部を内側に曲げ内面に沈線が明瞭につくられている。8は、沈線で区画された中に縄文を充填施文している。9・10は、口唇部から縄文が施文されている。11・12は、沈線・隆帯が横位に施されている。

13～15は、無文である。13は、口唇部に直径4mm、深さ4mmの刺突文を施している。16は、精製土器で口唇下部内面に2条の沈線を巡らせている。17～26は、平行沈線文間・幾何学沈線間に縄文を施文している。

27は、底部で底径8.8cm。底面に網代痕が認められる。

28は、注口上器の注口部分が剥落したものである。先端口径2.3cm・内径1.6cm、基部口径2.9cm・内径1.7cm、長さ7.8cmの管を作り、本体に取り付けた後本体側に内付けをした様子が確認できる。

2号倒木跡（第5図、PL 2）

本倒木跡は、H-7グリッドに位置する。9号住居と重複しているが、倒木跡の方が古く9号住居の方が新しい。南側に東西方向の砂礫層が直立している。木は北側に倒木している。倒木範囲は3.5m×3.0mである。

1号倒木跡と同じ時期に、強烈な南風により倒木したものと考えられる。

出土遺物は認められなかった。

遺構外出土土器（第26～31図、PL 14～17）

縄文時代中期（第26～28図）

加曾利E式土器（第26・27図）

1～31が口縁部破片である。

1～4は、復元実測である。1は、口径29.0cm、残存高18cmの加曾利E3式の深鉢である。2・3は、逆「U」字の沈線文で区画された加曾利E4式の深鉢である。2は、口径27.0cm、残存高9.0cm、3は口径18.0cm、残存高4.2cmである。

4は、両耳壺である。口縁が直立しており、口径14.8cm、胴残存部最大径は24.0cm、残存高5.5cmである。把手は幅3.5cmで孔径の最小は1.0cm×0.7cmである。

5～7は、波状突起で溝巻きの沈線を基調としている。8～11・14・15は、楕円形の沈線文を持つ一群である。12・13は、口縁部に横位連続刺突文を施している。16・17は、口唇部下に1条の沈線が巡る。18・19は、口唇部下に横位隆帯が巡る。22・23は、溝巻文で隆帯は低い。24～26は、口縁部から縄文を施したものである。25は、羽状縄文である。28～30は、無文である。29は、小鉢で口径が8.6cm、残存高は7.0cmである。外面は、口縁部が横ナデ調整で体部は縦ヘラナデ調整、内面は、横ナデ調整である。31は、口縁部が一旦強く括れ内側に屈曲する。

32～52は、胴部破片である。

32・33は、沈線と隆帯文が深い。34・35・36は、蔽手文を垂下させている。36～39・41～46は、2本の沈線間を掠り消し縄文をしている。40は、U字隆帯文が高く、短い単位の縄文を充填施文している。48は、「S」字が縦に連結したものが2条垂下施文されている。49～51は、櫛描文である。49・50は、横位沈線に縦方向櫛描文である。51は、縦方向のループ文である。

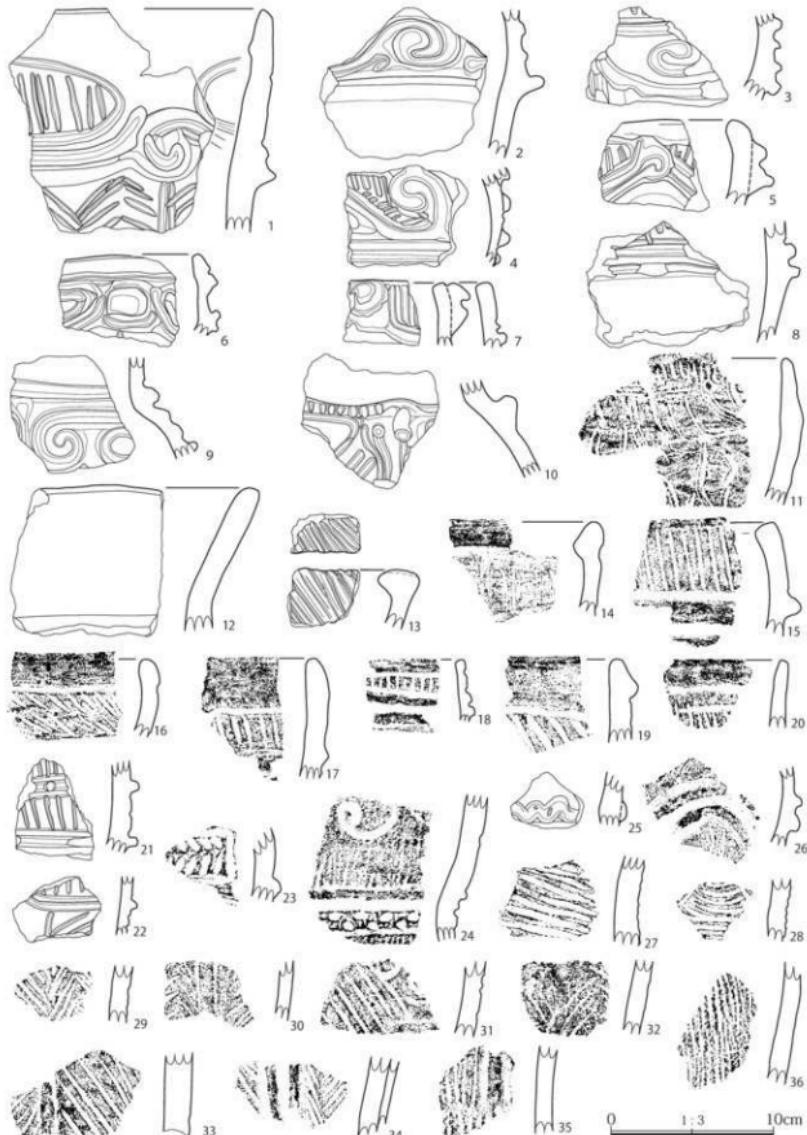
52は、底部近くの破片である。下方向の外形が外側に反り返っており、台付の土器が考えられる。縄文はしR縄文が施文されている。内面赤色塗彩。

53は、浅鉢形土器である。

54・55は、底部片である。54は、底径5cmで斜沈線。55は、底径8cmで2本の重下する沈線が施文されている。曾利式土器（第28図）

1～23は、口縁部破片である。

1～9は、口縁部に溝巻き文及び楕円形文を持つ一群で、区画内には斜め沈線や羽状沈線文を充填する。2・8は、明瞭に頭部無文帯を持つもので加曾利E2式と平行関係の資料である。9・10は、球形の胴体部が頭部で一旦括れたものである。11は、口縁部に短い刻み文を連続させ下部は半截竹管で下方向に縦2段連続施文している。12は、頭部上に幅広の無文帯をもつ。13は、口唇部は平らで幅広であり、口唇から口縁にかけて斜沈



第28図 遺構出土土器実測及び拓影図（3）

線により充填している。14～23は、口縁部沈線楕円区画内に縦線・斜線・綾杉文の沈線により充填施文されている。

24～35は、胴部破片である。

24は、胴部括れ部に横位沈線間に交互刺突文を施している。上部は撚糸文で、縦方向の縄文が施文され、沈線によるループ文が描かれている。25は、頸部に蛇行隆帯文が施文されている。26は、2本の平行する「U」字隆帯文の上下に縦・斜方向の沈線で充填されている。27・28は、横方向の沈線で充填している。29～35は、縦方向の綾杉文が施文されている。36は縦方向の撚糸文が施文されている。

縄文時代後期（第29～31図）

称名寺式土器（第29図）

1・2は、口縁部片である。1は、波状口縁で波頂部に丸い「の」字状の突起がある。口縁は1・2とも内側に屈曲している。

3～14は、胴部破片である。

すべての文様は、2本の線に挟まれた中に列点文が描かれている。14は、渦巻状の2本の平行沈線間に列点文が施されている。

堀之内II式土器（第30・31図）

1～23は、口縁部破片である。

1～4は、ミニチュアの浅鉢形土器である。1は、沈線による楕円文を施文している。2は、1条の沈線を施文している。3は、波状口縁で波頂部に「∞」字状の文様を施文している。4は、外面無文、内面口縁部に横位沈線・口唇部に連続刻み文を施している。

5～9は、口唇部から下がって1条微隆起線上に刺突文を施している。その下部に横位沈線を2条施し間に縄文を施文している。10は、4条の横位沈線間に細かい縄文を施文し、縦に円形刺突を3点施している。11～13は、横位平行沈線間に細かな縄文を施文している。14は、曲線の沈線を施文している。15は、横位沈線を施文している。16は、無文である。5・8～10・12～15は、口唇部を内屈させている。17・18は、横位沈線を施している。19は、断面がキャリバー状の形状である。19・20は、「8」の字状の貼付文がある。21は、口縁部に隆帯を1条巡らせ隆帯上に連続刺突文を施している。22は、口唇部に連続刺突文を施している。23は、口唇部内面に横位沈線と隆帯を伴うもので浅鉢形土器と考えられる。

24～59は、胴部破片である。

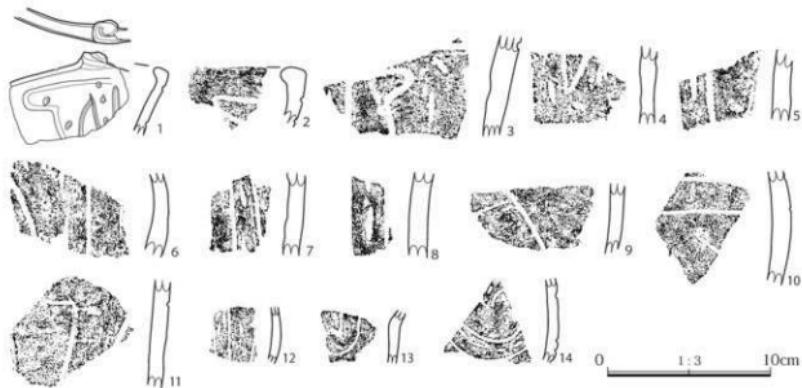
24～30は、幾何学的な文様である。24～28は、三角形の多重文。29・30は、「T」地文及び楕円文を描き、細かな縄文を施文している。31～52は、横向向・斜め方向・縦方向・楕円形・三角形の平行沈線間に細かな縄文を施文している。53は、2重線による「の」字文。54は2・3重の曲線による沈線文で53・54とも縄文の施文は認められない。55は、撚糸の深い縄文が縦方向に施文されている。

56～59は、内面が丁寧に磨かれており、注口土器の破片と考えられる。56は、○を中心とする雲形状の文様間に細かな縄文を施文している。

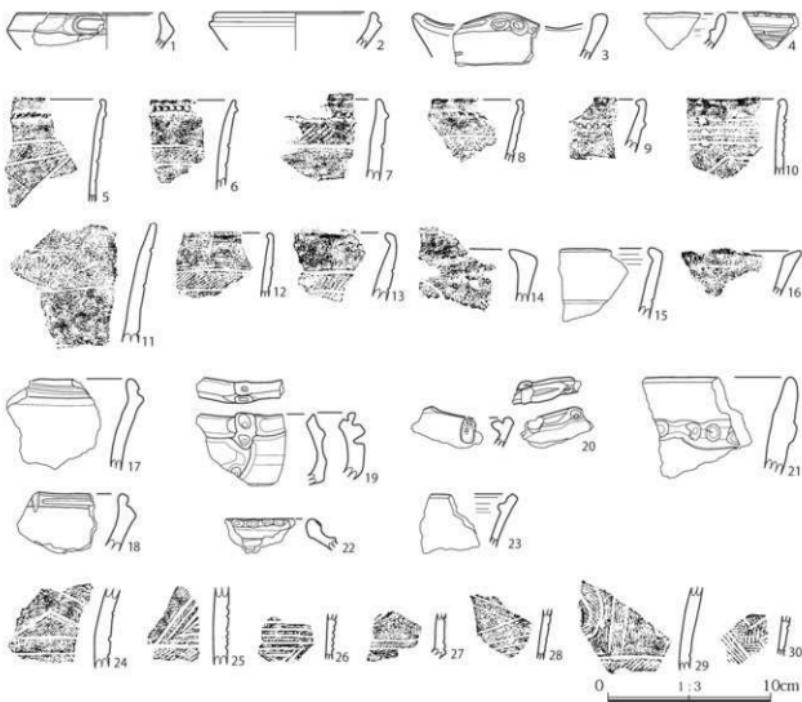
60～73は、底部破片で側面はすべて無文である。

60～67は、底部から一旦内側に括れて直立気味に立ち上がる深鉢の底部である。68は、底部から直立気味に立ち上がる。69・71～73は、底部から「ハ」の字に広がる器形である。60は、底部が無文であるが、61～73は底面に網代痕が認められる。

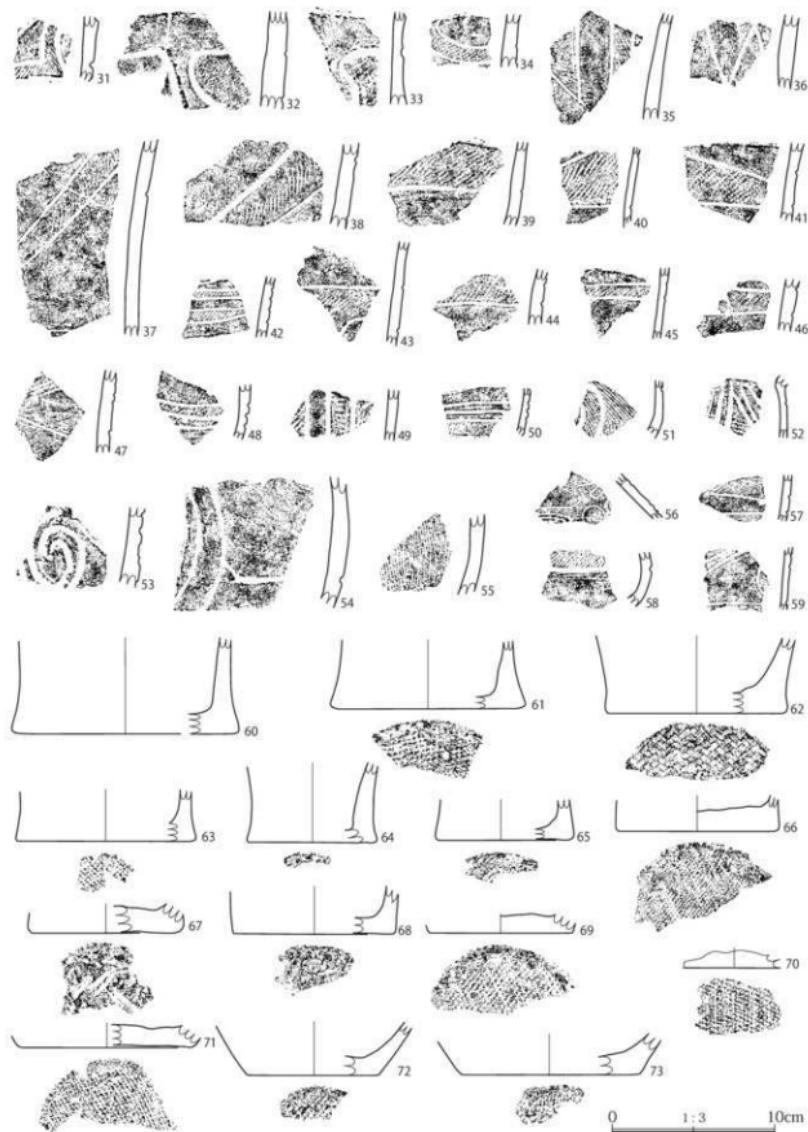
底径は、60は14cm。61は12cm。62は11.2cm。63は11cm。64は8cm。65は8.5cm。66は10cm。67は9.6cm。68は10cm。69は8.8cm。70は不明。71は10.8cm。72は7.2cm。73は10.8cmである。



第29図 遺構外出土土器実測及び拓影図(4)



第30図 遺構外出土土器実測及び拓影図(5)



第31図 遺構外出土土器実測及び拓影図（6）

出土石器（第32・33図、PL 17・18）

本遺跡の出土石器について、個々の遺物については第3表に記した。ここでは石器・石材組成を見てみたい。

石器の組成は礫石器と打製石器がある。

本遺跡出土の礫石器は、石皿・擦り石・凹面は皆無であるが、棒状石製品3点・石棒1点・破片9点・軽石製品2点の合計15点が出土した。打製石器は、石鏃2点・石錐1点・打製石斧37点・削器1点・石核1点・加工痕のある石器1点・剥片116点で合計151点が出土した。

礫石器15点、打製石器151点で出土石器の総合計は166点である。

礫石器の石材は、片岩系の石器だけで破片を含めると石材は緑色片岩8点・泥質片岩2点・雲母片岩3点である。その他角閃石安山岩の軽石製品2点がある。

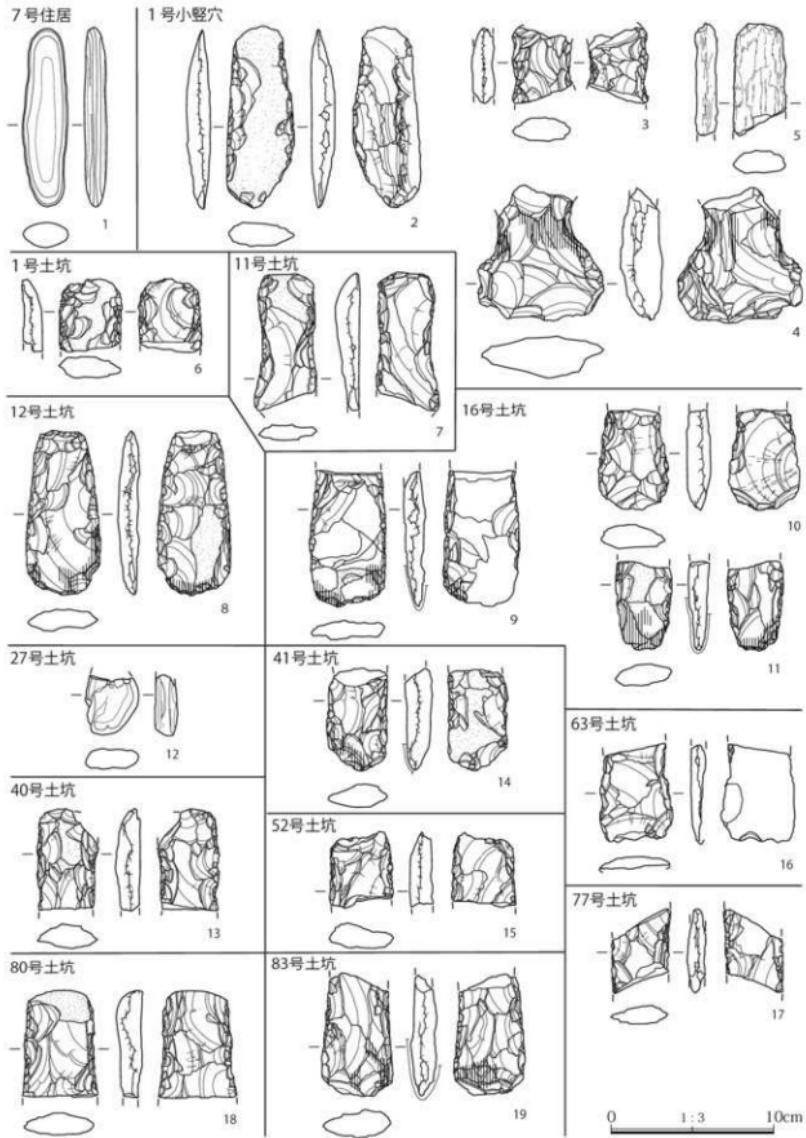
打製石器151点の石材組成は、頁岩94点・安山岩28点・黒曜石25点・緑色岩2点・流紋岩1点・泥岩1点である。

打製石器石材の内容は、頁岩が62%と最も多く、次に安山岩が18.5%、黒曜石16.5%と続く。

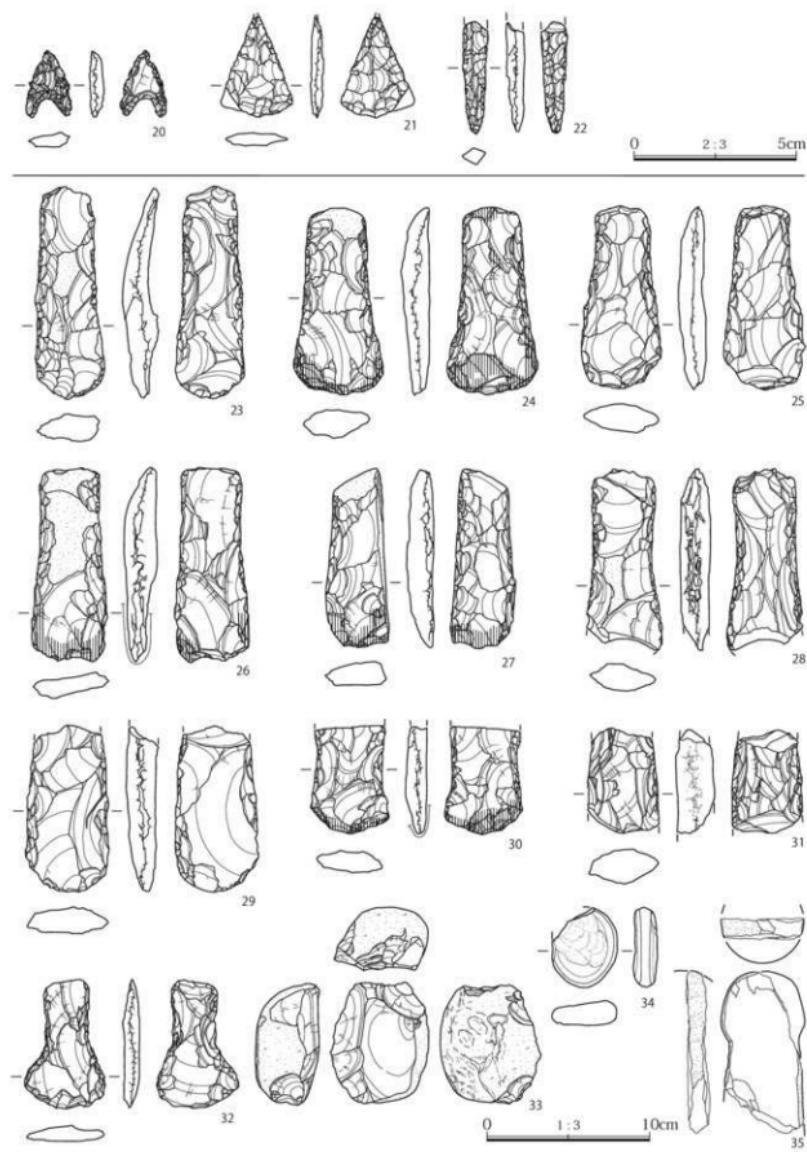
打製石斧は、打製石器151点中、37点で約25%という高比率である。打製石斧の完形品は5点で、完存率が13%であり、87%は破損品である。その破損力所・形状については様々なケースが認められ、今後調査研究が必要と考える。

第3表 縄文時代出土石器一覧表

博 国 号	PL	出土位置	種別	法 量 (1) : 推定 (1) : 遺存 長さ (cm) 幅 (cm) 厚さ (mm)	石質	器形、成・整形等の特徴	遺存状況
32_1 17	7住(近世廻穴)	棒状石製品	11.0	2.8 1.5 70.2	緑色片岩	横・縱断面が波浪形を呈す。	完形
32_2 17	小型穴	打製石斧 短細柄	11.2 4.1 1.4 81.4	安山岩	一面に縦面を大きく残す。	完形	
32_3 17	小噴穴(内)	打製石斧 短細柄	(4.6) 3.6 1.4 C32.2	頁岩	先端側に刃を削ぎ、基部一部欠損。	1/3	
32_4 17	小噴穴	打製石斧 分銅柄	(8.4) 7.7 2.7 (169.1)	頁岩	挖り出に伴い削痕がある。	2/3	
32_5 17	小噴穴	棒状石製品	65.8 2.3 1.4 (44.4)	雲母片岩	側面は直裏両面からの削離加工で直線的となる。	1/2	
32_6 17	1土坑	打製石斧 短細柄	(4.5) 3.8 1.3 (27.4)	頁岩	一面に縦面を残す。先端部半分以上欠損。	2/5	
32_7 17	11土坑	打製石斧 短細柄	(8.4) 2.8 1.5 (53.9)	安山岩	一面に縦面を残す。先端部欠損。	一部欠損	
32_8 17	12土坑	打製石斧 短細柄	10.2 4.6 1.3 72.2	頁岩	一面に縦面を残す。先端部削離。	完形	
32_9 17	16土坑	打製石斧 短細柄	(8.4) 4.7 1.4 (80.6)	頁岩	尖受けによる削落跡多数。先端部削離。基部欠損。	3/4	
32_10 17	16土坑	打製石斧 短細柄	(6.2) 4.3 1.4 (55.5)	頁岩	直線削離を基準にする。基部欠損。	1/2	
32_11 17	16土坑	打製石斧 短細柄	(5.4) 3.4 1.2 (29.1)	頁岩	一面に縦面を残す。先端部甚だ削離。	1/2	
32_12 17	27土坑	軽石製品	(3.7) 2.3 1.3 (6.9)	閃開石安山岩	先端部削離。浮石として使用か?	輕石	
32_13 17	40土坑	打製石斧 短細柄	(6.0) 3.2 1.5 (45.5)	頁岩	一面に縦面を残す。基部はシヤープな削離。刃上にかけた所から削離。	1/2	
32_14 17	41土坑	打製石斧 短細柄	(6.0) 3.7 1.7 (50.4)	頁岩	一面に縦面を大きく残す。	1/2	
32_15 17	52土坑	打製石斧 短細柄	(4.7) 3.9 1.4 (32.0)	頁岩	先端部半分欠損。基部一部欠損。	1/3	
32_16 17	63土坑	打製石斧 短細柄	(6.1) 4.5 0.9 (24.9)	頁岩	先端部半分欠損。さらに裏方に削離された珍しい欠損。	1/4	
32_17 17	77土坑	打製石斧 短細柄	(6.1) 3.7 1.1 (20.5)	頁岩	先端・基部削離。斜め削れ。	1/3	
32_18 17	80土坑	打製石斧 短細柄	(6.0) 4.9 1.7 (65.7)	安山岩	一面の側面に縦面を残す。先端部半分欠損。	1/2	
32_19 17	83土坑	打製石斧 短細柄	(7.0) 4.3 1.6 (65.1)	頁岩	基部欠損。先端部削離。	2/3	
32_20 18	道構外(表塚)	石錐	2.0 1.4 0.4 0.99	黒曜石	基部無し。	完形	
32_21 18	道構外(表塚)	石錐	(3.1) (2.0) 0.35 (0.99)	安山岩	左翼端部欠損。	2/3	
32_22 18	道構外(表塚)	石錐	(3.0) 0.8 0.5 (1.47)	頁岩	基部欠損。	2/3?	
32_23 18	道構外(東端)	打製石斧 短細柄	12.0 4.3 2.5 106.2	安山岩	一面の中央に縦面を一部残す。	完形	
32_24 18	道構外(表塚)	打製石斧 短細柄	11.5 5.6 1.7 113.8	頁岩	一面の基部に縦面を残す。先端部削離。	完形	
32_25 18	道構外(東端)	打製石斧 短細柄	11.3 4.9 1.7 115.1	頁岩	一面に縦面を残す。縦面は基部に残す。	完形	
32_26 18	道構外(東端)	打製石斧 短細柄	11.9 4.7 2.0 130.1	安山岩	一面の基部に縦面を残す。先端部削離。	完形	
32_27 18	道構外(東端)	打製石斧 短細柄	11.0 3.9 1.7 92.3	頁岩	一面の基部に縦面を残す。先端部削離。	完形	
32_28 18	道構外(東端)	打製石斧 短細柄	(11.2) 4.6 1.9 (114.3)	綠色岩	一面の中央に縦面を一部残す。先端部欠損。	一部欠損	
32_29 18	道構外(東端) (4住)	打製石斧 短細柄	(10.3) 7.2 1.8 (138.9)	頁岩	基部欠損。先端部削離。	一部欠損	
32_30 18	道構外(5住)	打製石斧 短細柄	(6.7) 4.8 1.3 (54.6)	頁岩	基部欠損。先端部削離。	1/2	
32_31 18	道構外(6住) (4住)	打製石斧 短細柄	(6.0) 4.4 3.3 (98.4)	頁岩	先端部・基部欠損。	1/2	
32_32 18	道構外(5住)	打製石斧 短細柄	8.0 3.0 1.0 28.6	頁岩	削形。	完形	
32_33 18	道構外(表塚)	石核	7.5 6.0 4.0 239.5	頁岩	縦面の平田面から直接削片削離。半分縦面を残す。	完形	
32_34 18	道構外(6住)	軽石製品	4.9 4.0 1.5 (15.0)	閃開石安山岩	浮石として使用か?	一部欠損	
32_35 18	道構外(東土坑群)	石棒	(0.9) (5.1) (1.3) (84.7)	緑色片岩	敲き石として転用→削離	道構片	



第32図 繩文時代遺構内出土石製品実測図



第33図 繩文時代遺構外出土石製品実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構として、竪穴住居6軒（1・3・4・8・9・10号住居）を検出した。（第5図）

1号住居（第34図、PL7）

調査区の南西端F・G-1グリッドに位置する。

南側が調査区域外になることから、住居の平面形は方形であるが、20%ほどの調査で、北西・北東コーナーと4本柱穴の北東ピット（P1）を検出したのみである。ピットは、北壁・東壁から約1.3mに位置している。規模は、南北は残存部最大1.5m、東西は5.22m、壁高は44cmである。床は平坦である。壁溝は無かった。北西コーナーは縦文の3号土坑との重複のため、コーナーの形が丸く緩やかになってしまった。

ピット1（北東）は、平面形が円形で、規模は直径36cm、深さ44cmである。

出土遺物は認められなかった。

この住居の覆土には、一方所榛名山噴火による火山灰の堆積が存在している。火山灰はユニットを形成しており、5世紀末のいわゆるFA層である。この遺構は断面で確認できただけのため、土坑・溝・畑など考えられるが確定することはできなかった。

3号住居（第35図・39、PL7・19）

調査区の「L」字に折れ曲がった部分のE・F-2・3グリッドに位置する。

平面形は東西に長い隅丸長方形で、北東部約4分の1が未調査である。規模は、東西3.42m、南北2.12m、壁高78cmである。

調査区域内では、カマド施設は無く、貯蔵穴もなかった。床は平坦であり、壁は70°の角度で立ち上がる。壁溝は幅15cm、深さ10cmで南西コーナーから北東コーナーまで存在する。

出土遺物（第39図）は、須恵器表の破片、滑石製の白玉1点、鉄製品（刀子、釘状品）2点が出土している。刀子については、住居中央から床直で折れ曲がった状態で出土している。滑石製白玉については、住居上層で検出している。

4号住居（第36・40図、PL7・19）

F・G-2・3グリッドに位置する。

平面形はほぼ正方形である。規模は、東西5.85m、南北5.70m、壁高30cmである。床面は、重機により傷められている。

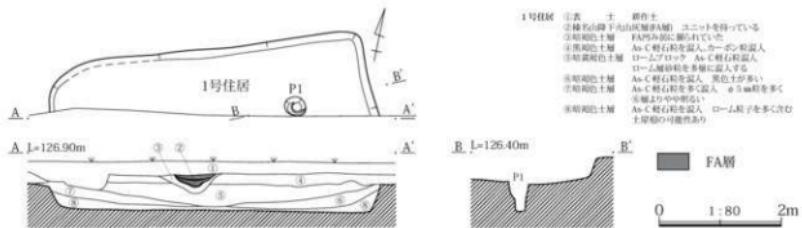
カマドは、東壁中央南寄りに付設されていたが、重機により破壊されている。

壁溝は、カマド部分以外は全周しており、幅は15cm前後で深さは10cmである。

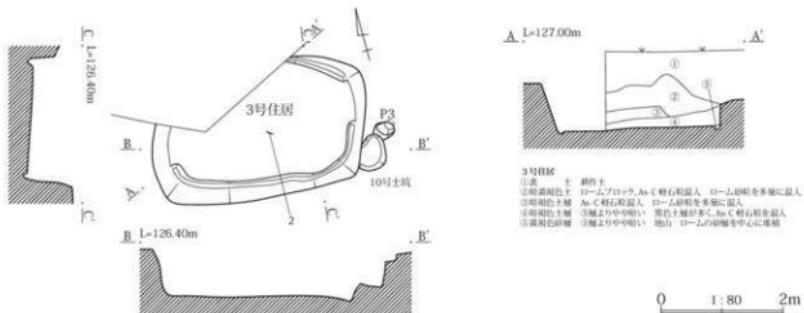
貯蔵穴は、南東コーナーに位置する。平面形が円形で中央が細くなる漏斗状の形状で、規模は直径70cm、深さ74cmのものである。底部から30cmはほぼ垂直に立ち上がり、径38cmの円形のプランが認められそれより上部はハの字に開く漏斗状の形状であり、貯蔵穴としては珍しい。

主柱穴は、4本で平面形は円形である。ピット1は、直径38cm深さ58cm。ピット2は、直径38cm深さ42cm。ピット3は、直径24cm深さ34cm。ピット4は、直径24cm深さ30cmである。その他、南壁中央の壁から62cm離れた所に直径21cm、深さ20cmの小穴（ピット5）が存在する。

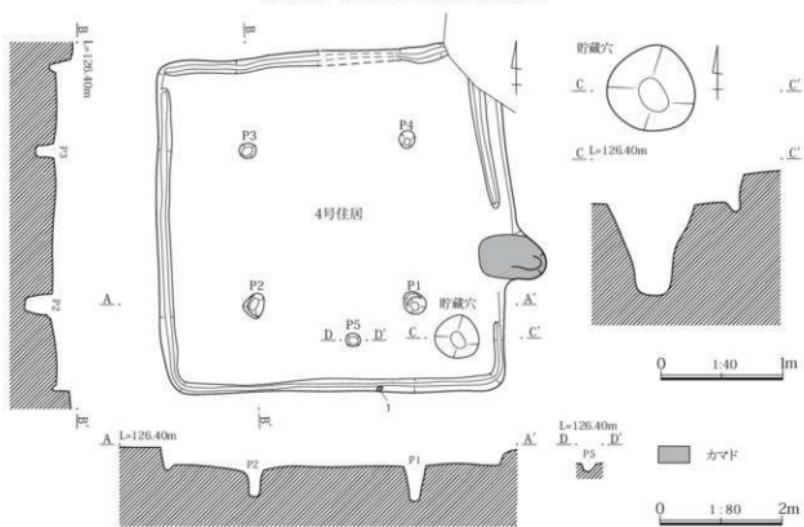
出土遺物（第40図）は、土師器壺3点・壇1点・甑1点、須恵器表片等が出土している。1の土師器壺は南壁際で出土、4の土師器壇は北西側で出土している。



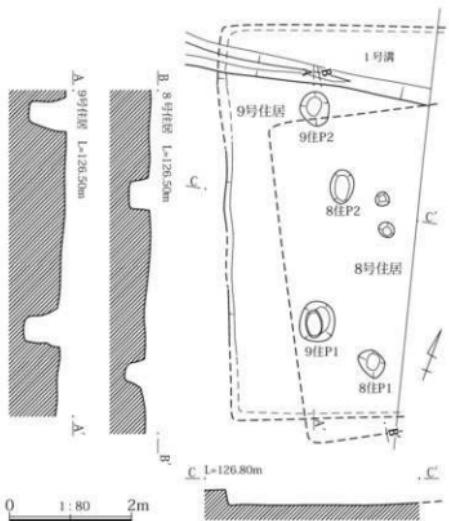
第34図 1号住居平面及び断面実測図



第35図 3号住居平面及び断面実測図



第36図 4号住居平面及び断面実測図



第37図 8・9号住居平面及び断面実測図

8・9号住居 (第37図、PL 8)

8・9号住居は、G・H-7・8グリッドに位置する。

8号住居と9号住居は重複関係にあり、8号住居が古く9号住居が新しい。さらに中・近世の1号溝に北壁を、現代の擾乱で壁・床を破壊されている。

8号住居の形状はほぼ方形で、規模については一辺推定5.22mと考えられる。但し、9号住居により北壁・西壁・床面は破壊され、南壁は新しい擾乱で壊されている。

住居と確認できるのは、4本主柱穴のみである。P1は、平面形が不正円形で南北42cm、東西42cm、深さ30cmの平面形は楕円形である。P2は、平面形は楕円形で南北56cm、東西40cm、深さ35cmである。

ピット間の距離は、芯々で2.8mである。

9号住居は、近世の擾乱に破壊されており、西壁1辺が確認でき、壁高は30cmである。この部分で壁溝を確認することができなかった。床面についても擾乱がひどく状態は良くなかった。

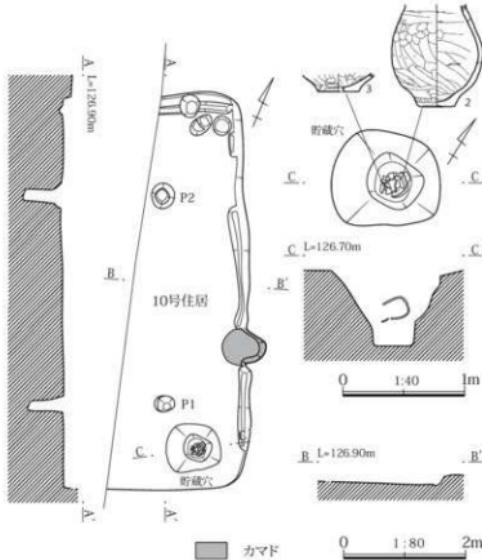
確認できるのは、4本主柱穴のうち、南西(P1)と北西(P2)の2本の柱穴のみである。P1は、平面形はほぼ円形で南北62cm、東西58cm、深さ60cmである。P2は、平面形は楕円形で南北55cm、東西48cm、深さ62cmである。

ピット間の距離は、芯々で3.5mである。

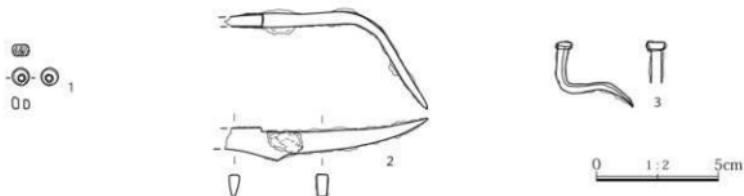
2本の柱穴と西壁までの距離は1.3mであり、北・南壁の推定にも柱穴から1.3mの数値を参考にして復元した。

その結果、南北方向1辺の規模は6.42mと推定した。これは4号住居・10号住居も柱穴から1.3mで壁が存在しており、企画性が非常に高い住居群と考える。

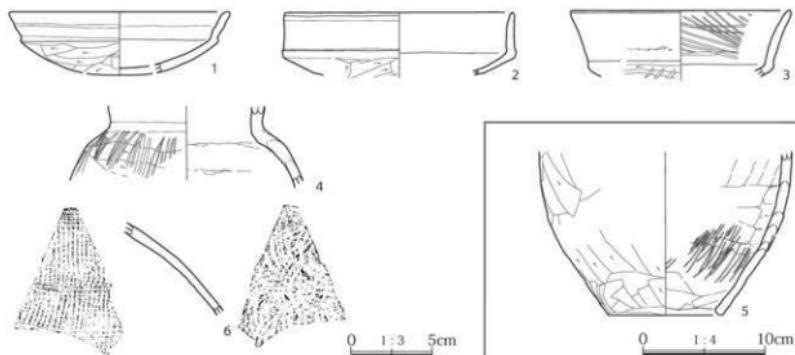
出土遺物は8号住・9号住共に確認できなかった。



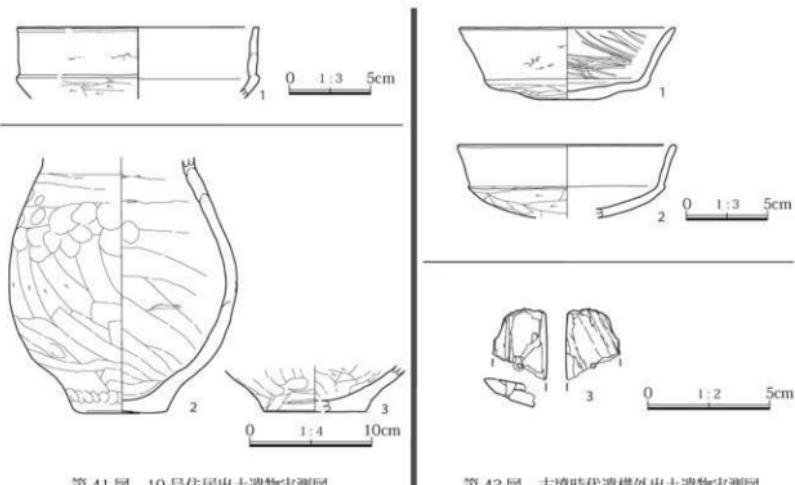
第38図 10号住居・貯蔵穴平面及び断面実測図



第39図 3号住居出土遺物実測図



第40図 4号住居出土遺物実測及び拓影図



第41図 10号住居出土遺物実測図

第42図 古墳時代遺構外出土遺物実測図

10号住居（第38・41図、PL 8・19）

I・J-9・10 グリッドに位置する。

本住居は、遺構確認面がほぼ床面であったため、北壁溝・東壁溝の存在が確認できたが、南壁は壁溝の存在は確認できなかった。

カマドは、東壁中央南寄りに付設されていた。燃焼部底だけの残存で、南北72cm、東西58cmの梢円形で、深さは5cmほどで浅い皿状である。覆土は、焼土が多く含まれる暗褐色土であった。

主柱穴は、4本のうち2本が確認できた。ピット1（南東）は、平面形は梢円形で南北23cm、東西38cm、深さ58cmである。ピット2（北東）は、平面形がほぼ円形で南北42cm、東西40cm、深さ62cmである。

ピット1とピット2間の距離は芯々で3.5mである。2本の柱穴と壁までの距離は1.3mであり、南壁の推定にも柱穴から1.3mの数値を参考にして復元した。住居の南北1辺の長さは6.40mであり、東西についても同じ規模の正方形住居が予想できる。

貯蔵穴は、南東コーナーに位置する。平面形が不整円形で中央が細くなる漏斗状の形状で、規模は80cm×92cm、深さ62cmである。底部から上に20cmはほぼ垂直に立ち上がり、径38×44cmの隅丸方形状のプランが認められ、それから上部はハの字に開く漏斗状の形状であり、貯蔵穴としては珍しい形状である。

なお、貯蔵穴の底から20cmの所で土師器裏の口縁部分を欠損した一括個体（第41図2）が、頭部を西に、底部を東に向けた横になった状況で、さらに裏の下側に裏底部片（第41図3）が接して出土した。

その他の出土遺物は、土師器环片がある。

遺構外出土遺物（第42図、PL 19）

遺構に伴わない遺物として、土師器环破片2点、滑石製剣形模造品の欠損品の出土があった。

第4表 古墳時代出土遺物一覧表

編 目 回 号 L	P	出土位置	種別・器種	法量(cm)		断土 石材	被成	色調	器形、文様等の特徴	遺物状況
				(上)推定	(下)遺存					
39	1	19	3往表揮 臼王	滑石製 臼王	縦0.6 横0.6 厚0.45	滑石	—	灰	孔径0.2mm 重0.26kg	一部欠損
39	2	19	3往塗	鉢形製品 万子	[10.0] 1.4	0.5	灰	—	刀削先端は削れて欠損。底部残存良好。峠部削は2mm角尖に下かる。刀削は1mmで削っている。刀削は肉垂で使用の為かべりしている。重11.6g	2/3 残存
39	3	19	3往塗土	鉢形製品 釘	4.8 0.4	0.5	灰	—	重1.9g	完形
40	1	19	4往塗1	土師器 坪	[13.4] [12.2]	[3.7]	砂粒 無化粧	内：黒縁 外：黒縁	口縁部、中程に段を持ち、ナデ調整で2進口縁となる。口縁と身部の接合部は口縁に仕上げ、底部・外縁へハケズリ形成、内底立上りと口縁下間に内縁のみ立みが認められる。口削部：ハケズリで平らに仕上げ。	2/3
40	2	19	4往塗土	土師器 坪	[14.0] [14.2]	[3.8]	小崩 粘土	無化粧 外：黒縁	底部：ハケズリ。口縁部：直立気味に立上る。身部と口縁の接合部は段を設けている。	残片
40	3	19	4往塗土	土師器 坪	[13.4] [11.4]	[4.0]	砂粒 無化粧	内：明赤系 外：黒縁	底部：ハケズリ。側部：鋸歯状ヘラミガキ。口縁部：ナデ調整後、内面斜面部に凹みが認められる。	破片
40	4	19	4往塗土	土師器 坪	—	[5.0]	砂粒 無化粧 外：白	内：白 外：白	口縁部及び斜面から下平傾斜。口縁部接合部に削痕。斜部：内面口縁接合部に凹みが認められる。外縁に直角の端突部が認められる。底部：ヘラケズリ形成。	一部欠損
40	5	19	4往塗土	土師器 垂	—	[9.0] [13.3]	石英 片岩	無化粧 外：白	下斜部：外縁へハケズリ、内面輪幅縮痕が明顯に残存。底部：ヘラケズリ形成。	底部 1/4
40	6	19	4往塗土	滑石器 甕	—	[5.7]	滑 滑元端	外：灰	内面折子タキギ目・3条の平行力手目。内面青面波アテ貝具。	口部破片
41	1	19	10往若破穴	土師器 坪	[14.8] [15.0]	[4.4]	水滴 無化粧	内：黒縁 外：黒縁	口縁部：直立。コナデ調整。口削部：平田に仕上げ、中央に1条沈鉢を施す。底部：ヘラケズリ調整。側部：可搬な被をもつ。	破片
41	2	19	10往若破穴 第1	土師器 甕	—	7.5 [21.0]	滑 無化粧	内：黒縁 外：白	側部：外縁上部ヨコナデ調整・中央は粗いナデ調整、下サナデ調整。内面下部ヨコナデ調整。下半斜ナデ調整。	側～底部
41	3	19	10往若破穴	土師器 甕	—	[8.0] [3.8]	軽石 無化粧	内：白 外：明赤系 内：白	底部分：底部：底部未調査、外縁：ヘラケズリ。内面：ヘラナデ。	底部 1/4
42	1	19	遺構外	土師器 坪	[13.1] [10.2]	4.4	砂粒 無化粧	内：明赤系 外：白	口縁部：ハラナデ調整、内面に斜面文状ヘラミガキ。底部：ヘラケズリ施す。	1/3
42	2	19	遺構外	土師器 坪	[13.2] [12.1]	[4.5]	砂粒 無化粧	内：赤系 外：明赤系	口縁部：ヨコナデ調整。口削部：平田で中央に1条沈鉢あり。底部：ヘラケズリ。	1/4
42	3	19	遺構外	滑石製品 劍形石製品	[2.0] [2.2]	0.85	滑石	—	孔上径0.45cm、下径0.20cm 重6.1g 穿孔破損。	破片

第4章 平安時代の遺構と遺物

平安時代は、遺構として、竪穴住居を3軒（2・5・6号住居）検出した。C・D・E-2・3グリッドに集中しており。東西9m、南北8mと狭い範囲に位置している。（第5図）

2号住居（第43・46図、PL 7・19）

2号住居は、D・E-2・3グリッドに位置している。5号住居とは南東に30cm、6号住居とは東1.5mと隣接している。

近世の搅乱が周囲にあり、貼床床面が遺構確認面と同一であったため、住居と確認できた。貼床面に焼土面が南北18cm、東西24cmの楕円形にあり、東壁南寄りカマドの痕跡と考えられる。カマドの南側には、カーポン層が一面（東西1m×南北70cm）に分布している。南東コーナーは、近世に搅乱されていたため、本来はカーポン分布はもっと広がっていたと考えられる。

また、南壁については80cmの長さで壁高5cmの壁が存在しているだけである。東壁・南壁には壁溝は存在していない。

貼床は、厚さ最大5cmでロームブロックを版築している。西壁は近世の搅乱で破壊されている。

貼床を剥がすと、埋め土にはロームブロックやカマド用材である凝灰岩質の石が火受けして破片になったものが混入していた。

出土遺物（第46図）は、須恵器壺・高台付塊・甕がある。

5号住居（第44・47図、PL 7・8・19・20）

5号住居D-2グリッドに位置している。6号住居とは北東70cmと隣接している。

平面形は長方形である。規模は、東西2.9m、南北3.6m、壁高は22cmである。カマドは東壁南寄りに付設され、床は平坦で壁溝は認められない。カマドは楕円形で大きさは東西98cm、南北62cmである。カマド内には、焼成を受けた粘土塊が東西50cm、南北20cmの範囲で密集していた。

貯蔵穴を南東コーナー、南西コーナーの2カ所で検出した。南東コーナーの貯蔵穴は、平面形は楕円形で東西50cm、南北32cm、深さは58cmである。北側には扁平な河原石が窓に据えられていた。南西コーナーの貯蔵穴は、平面形が円形で東西52cm、南北48cm、深さ32cmである。

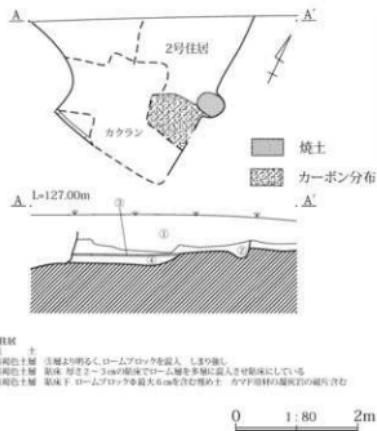
出土遺物（第47図）は、須恵器壺・高台付壺・蓋・甕、灰釉陶器高台付碗・高台付皿、土師器甕、羽釜、鉄製刀子がある。西壁南寄りから灰釉陶器皿（第47図8）が2つに割れて出土、南西コーナー貯蔵穴内から灰釉陶器皿（第47図9）が2つに割れて出土、東壁中央直下から鉄製刀子（第47図19）1点が壁に沿って検出された。

須恵器壺の墨書き器「竹一」（第47図1）があるが、遺構内覆土に現代の搅乱が多く所在していたため、出土位置は不明である。

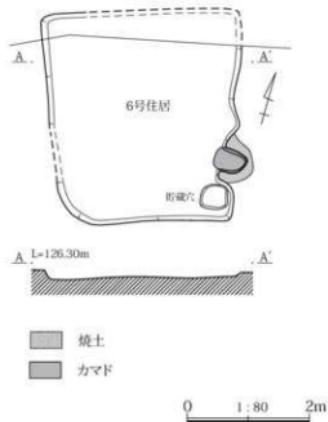
掘り方は、住居全体的に掘られているのではなく、床面の段階で平面プランが不定形に確認できるものであった。掘り方は、南北3.04m、東西最大2.0m、最小1.38mで深さは10cmである。直径3cmのロームブロックを斑状に埋め戻している。床下土坑は1カ所あり、形状は不定形で南北1.38m、東西84cm、深さは18cmで底面は平らである。

6号住居（第45・48図、PL 8・20）

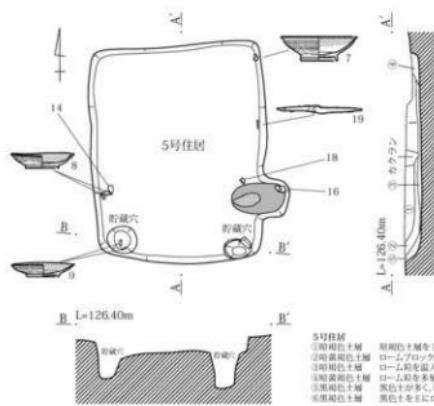
6号住居はC・D-3グリッドに位置している。



第43図 2号住居平面及び断面実測図



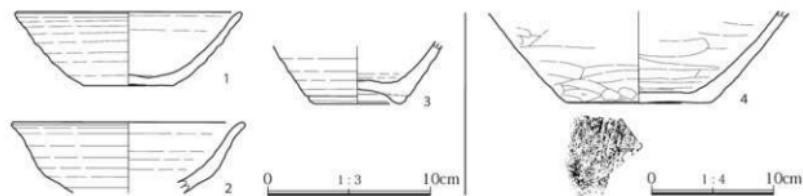
第45図 6号住居平面及び断面実測図

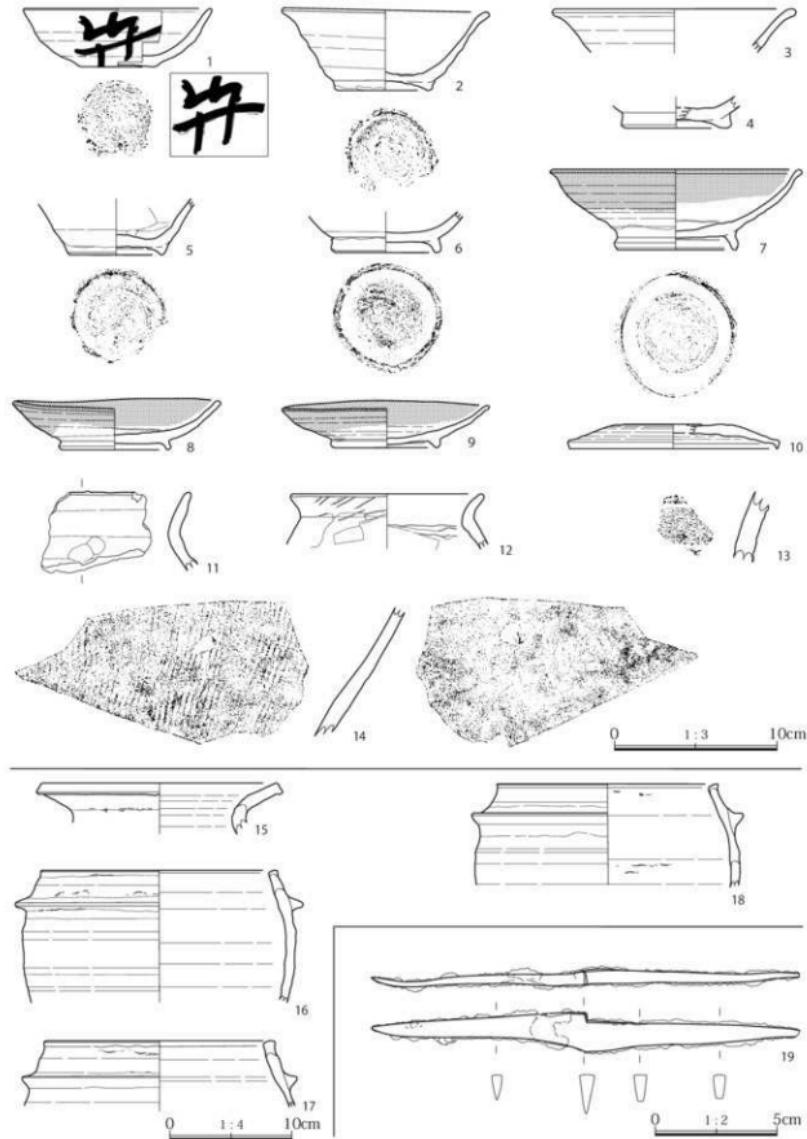


第44図 5号住居平面及び断面実測図

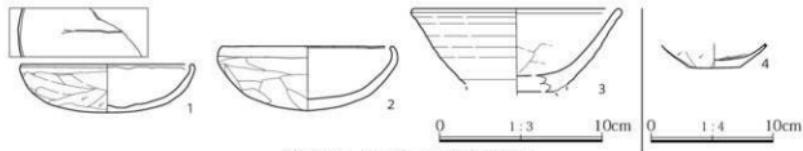


第46図 2号住居出土遺物実測及び拓影図

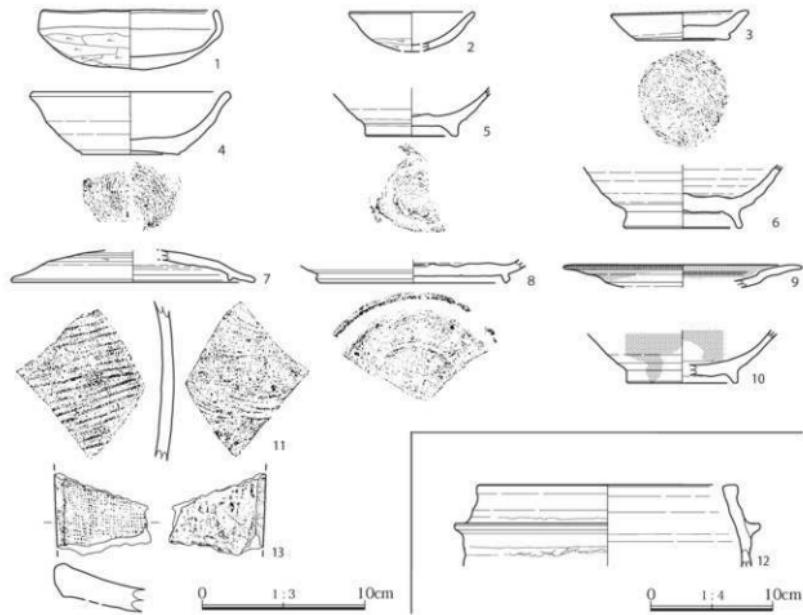




第47図 5号住居出土遺物実測及び拓影図



第48図 6号住居出土遺物実測図



第49図 平安時代遺構外出土遺物実測及び拓影図

平面形は北側がやや広い長方形である。規模は東西3.22m、南北3.45m、壁高18cmである。カマドは、東壁南寄りに付設され、規模は東西52cm、南北32cmで、東側にはその外側に火受けによる赤色化した帯が10cm程ある。南東コーナーには、貯蔵穴と考えられる不整圓角方形の、規模は東西45cm、南北38cm、深さ5cmと浅いくぼみがある。壁溝は、認められなかった。床下土坑については、検出できなかった。

出土遺物（第48図）は土師器环2点・甕底部片1点・須恵器台付碗1点の合計4点である。

遺構外出土遺物（第49図、PL. 20）

遺構外出土遺物として実測できたものを一括掲載する。

器種としては、土師器环、須恵器环、高台付环、高台付块、蓋、盤、甕、灰釉陶器皿、碗、羽釜、カワラケ、古代瓦（平瓦 布目）などが出土した。

第5表 平安時代出土遺物一覧表

番 号	P L	出土位置	種別・器種	法量 (cm)	推定丁口	道高 内面	重土	焼成	色調	或・整形、文様等の特徴	遺存状況
46 1 19		5丁床下	須恵器 壺	[13.7]	[5.0]	4.5	砂輪 壺	還元焰	内・外: 灰白 内: 黄褐色	クロロ成形。底部: 回転系切り。側面・底部: 縦かい刻離痕多数。	1/3
46 2 19	(15土坑)	2住	須恵器 壺	[14.1]	—	14.2	砂輪 壺	還元焰	内: 黄褐色 内: 黄褐色	クロロ成形。	口～体部 1/4
46 3 19	(3住)	須恵器 壺	—	(5.2)	[3.8]	砂輪 壺	還元焰	内: 黄褐色 内: 黄褐色	クロロ成形。底部: 回転系切り後。側面高台。内面クロロ成形可辨。	体下～底部 1/3	
46 4 19	(3住)	須恵器 筋	—	[12.0]	[7.5]	砂輪 筋	還元焰	内・外: 灰	体部・外面下端へラケズリ。内面ナデ調整。底部: 銀目庄瓶。	体下～底部 破片	
47 1 19	5丁甕上	須恵器 壺	[11.9]	4.5	3.6	砂輪 壺	還元焰	内・外: 灰 内: 黄褐色	回転系切り後付高台。内面ナデ調整。底部: 銀目庄瓶。	1/3	
47 2 19	5住甕上	須恵器 壺	—	(5.5)	5.1	砂輪 壺	還元焰	内: 黄褐色 内: 黄褐色	クロロ成形。底部: 回転系切り後付高台。内面上半が黒色。下半が褐色で重ね焼きの痕跡。見込みにクロロ成形の済み痕。	3/5	
47 3 19	5住甕上	須恵器 壺	[14.0]	—	[2.7]	砂輪 壺	還元焰	内: 黄褐色 内: 黄褐色	クロロ成形。	口～体部 1/4	
47 4 19	5住甕上	須恵器 壺	—	(6.4)	[1.9]	砂輪 壺	還元焰	内: 黄褐色 内: 黄褐色	クロロ成形。底部: 回転系切り後付高台。縫付きに植物灰痕。	底部 1/2	
47 5 19	5住甕上	須恵器 壺	—	5.7	[3.4]	砂輪 壺	還元焰	内: 黄褐色 内: 黄褐色	クロロ成形。底部: 回転系切り後付高台。	体下～底部	
47 6 19	5住甕上	須恵器 壺	—	6.2	[2.5]	砂輪 壺	還元焰	内: 黄褐色 内: 黄褐色	クロロ成形。底部: 回転系切り後付高台。内面折損圧痕。成形は錐である。	体下～底部	
47 7 19	5住 第6	灰釉陶器 壺	[15.0]	7.1	4.9	繪畫	還元焰	内・外: 灰 内: 黄褐色	クロロ成形。底部: 回転系切り後付高台。灰釉陶器はハサ焼き。見込みに重ね焼きの痕跡。	2/3	
47 8 19	5住 第6+7	灰釉陶器 壺	12.4	6.6	3.2	繪畫	還元焰	内・外: 灰 内: 黄褐色	クロロ成形。回転施釉はハサ焼き。見込みに重ね焼きの痕跡。	完形	
47 9 19	5住 第6+7	灰釉陶器 壺	12.5	6.3	2.9	繪畫	還元焰	内・外: 灰・白 内: 黄褐色	クロロ成形。底部: 回転系付け跡。	一部欠損	
47 10 20	5丁甕上	須恵器 箱	[12.9]	—	[1.5]	砂輪 箱	還元焰	内・外: 灰	クロロ成形。天井部: 回転へラケズリ。口押溝: 矢く折曲る。	1/5	
47 11 20	5住甕上	土師器 瓶	—	—	[4.8]	砂輪 瓶	還元焰	内: 黄褐色 内: 黄褐色	口縁部・口脣部: 丸く仕上げている。外面横ナデ。内面横ナデ。	口～一部 破片	
47 12 20	5住甕上	土師器 瓶	—	[11.5]	[3.4]	水磨 瓶	還元焰	内: 黄褐色 内: 黄褐色	口縁～瓶部: 外面細いナメ彫み。体部: 外面継へラケズリ。内面ナデ調整。	口～瓶部 1/6	
47 13 20	5住甕上	須恵器 瓶	—	—	[4.3]	繪畫	還元焰	内・外: 灰	口縁～瓶部間に擦損状況。	口縁～瓶部 破片	
47 14 20	5住 第3	須恵器 瓶	—	—	[7.9]	繪畫	還元焰	内: 黄褐色 外: 黑褐色	外縁: 平行タキ目。内面: ナデ調整。	体下部破片	
47 15 20	5住甕上	須恵器 瓶	[19.2]	—	[4.4]	砂輪 瓶	還元焰	内: 黄褐色 内: 黄褐色	クロロ成形。口縁部: 平坦仕上げで外面に若干削られみがみられる。	口～一部 破片	
47 16 20	5住 第6+7	羽垂	[19.2]	—	[10.0]	砂輪 羽	還元焰	内: 黄褐色 内: 黄褐色	口縁部: 平坦で外側に張り出します。鶴嘴: 丁寧に貼り付け。内外曲共に横ナデ。羽子部: 羽子。	口～体部 1/5	
47 17 20	5住甕上	羽垂	[18.7]	—	[5.4]	砂輪 羽	還元焰	内: 黄・白 内: 黄褐色	口縁部: 平坦で外側に張り出します。鶴嘴: 丁寧な仕上げ。内外曲共に横ナデ。	口～一部 破片	
47 18 20	5住 第7	羽垂	[18.0]	—	[8.5]	砂輪 羽	還元焰	内: 暗・黑 外: 暗・黑	口縁部: 平坦で外側に張り出します。鶴嘴: 丁寧な仕上げ。内外曲共に横ナデ。	口～体上部 破片	
47 19 20	5住30.10	辰	[17.6]	1.7	0.7	砂輪 辰	還元焰	—	重25.7g 口対: 頭部で削ぎ落し、面部: 剥離に残る。棘部がはっきりしている。隼尾: 口対より大きい。	完形	
48 1 20	6住甕上	土師器 瓶	[10.5]	—	2.9	水磨 瓶	還元焰	内: 灰 内: 黄褐色	口縁部: 織目テ。瓶底: 滅底。底部: 外面へラケズリ後ナデ調整。内面ナデ。	1/2	
48 2 20	6住 土師器 瓶	[10.5]	—	4.0	水磨 瓶	還元焰	内: 灰 内: 黄褐色	口縁部: 織目テ。瓶底: 滅底。底部: 外面へラケズリ後ナデ調整。内面ナデ。見込みに「一」の断面。	2/5		
48 3 20	6住甕下 (45土坑)	須恵器 瓶	[12.9]	—	[5.1]	砂輪 瓶	還元焰	内: 黄褐色 内: 小や粗	口ロクロ成形。底部: 回転系切り。高台部: 滅底。胎土: 白色粘土と5mmを多く含むに模式に混入する。	1/6	
48 4 20	6住甕下	土師器 瓶	—	(4.4)	[2.0]	水磨 瓶	還元焰	内: 黄褐色 内: 黄褐色	口ロクロ成形。底部: 回転系切り。高台部: 滅底。胎土: 白色粘土と5mmを多く含むに模式に混入する。	底部	
49 1 20	道轄外	土師器 瓶	[10.7]	11.4	3.7	水磨 瓶	還元焰	内: 黄褐色 内: 黄褐色	口縁部: 織目テ。底部: 滅底。胎土: 白色粘土と5mmを多く含むに模式に混入する。	ほぼ完形	
49 2 20	道轄外	土師器 瓶	[7.7]	—	[2.4]	水磨 瓶	還元焰	内: 明赤褐色 内: 明赤褐色	小型の手。口縁部: 外面横ナデ～調整。底部: 外面へラケズリ。	1/4	
49 3 20	道轄外	カワラケ	8.3	5.8	1.8	石質 瓶	還元焰	内: 相 内: 明赤褐色	ロクロ成形。底部: 回転系切り。切り離し時に厚くなってしまっている。	ほぼ完形	
49 4 20	道轄外	須恵器 瓶	[12.0]	6.0	3.8	砂輪 瓶	還元焰	内: 相 内: 黄褐色	ロクロ成形。底部: 回転系切り。	1/3	
49 5 20	道轄外	須恵器 瓶	—	(5.5)	[2.9]	砂輪 瓶	還元焰	内: 黄褐色 内: 黄褐色	ロクロ成形。底部: 回転系切り後付高台。高台接合部は崩し底堅。見込み中央に突出あり。	体下～底部 1/2	
49 6 20	道轄外	須恵器 瓶	—	(7.0)	[3.9]	砂輪 瓶	還元焰	内: 黄褐色 内: 黄褐色	ロクロ成形。底部: 回転系切り後付高台。見込み中央に突出あり。	体下～底部	
49 7 20	道轄外	須恵器 箱	[14.8]	—	[2.9]	繪畫	還元焰	内: 黄・白 内: 黄褐色	ロクロ成形。天井部: ヘラケズリ。表面自然糊付着。	1/5	
49 8 20	道轄外	須恵器 瓶	—	[11.4]	[1.4]	密	還元焰	内・外: 灰	底部: 粘土でラケグリ後付高台。見込みは摩耗が認められる為使用の可能性あり。	底部 1/4	
49 9 20	道轄外	灰釉陶器 瓶	[14.6]	—	[1.4]	繪畫	還元焰	内: 黄褐色 内: 黄褐色	ロクロ成形。段階、明確な段階が1段ある。口縁部: 内外面施釉。	口～体部 破片	
49 10 20	道轄外	灰釉陶器 瓶	—	(6.7)	[3.3]	繪畫	還元焰	内: 黄褐色 内: 黄褐色	ロクロ成形。底部: 回転系切り後付高台。外縁施釉。見込みに重ね焼きの痕跡。	体下～底部 1/3	
49 11 20	道轄外	須恵器 瓶	—	—	—	繪畫	還元焰	内: 黄褐色 内: 黄褐色	口縁部: 平底。口縁部: 滅底。ロクロ成形。底部: 中央直線2cmの縫がある。	体内部	
49 12 20	道轄外	羽垂	[20.5]	—	[6.8]	砂輪 羽	還元焰	内: 黄褐色 内: 黄褐色	口縁部: 平底。口縁部: 滅底。ロクロ成形。底部: 中央直線2cmの縫がある。	口～一部 破片	
49 13 20	道轄外	古代瓦 平瓦	[15.0]	[6.0]	[3.0]	砂輪 瓦	還元焰	内: 黄褐色 内: 黄褐色	口縁部: 平底。凸面: 相・網・目タキ目。凹面: 相・目タキ目。	端部破片	

第5章 近世の遺構と遺物

近世の遺構として、ムロ施設3基・井戸3基・溝1条を検出した。(第5図)

1号ムロ(第50・53図、PL9・21)

本ムロはB-3・4グリッドに位置している。

平面形は隅丸長方形である。規模は、南北最長4.2m(北側に続いている)、東西3.6m(西側は搅乱のため正確な範囲は確定できない)である。西側・南側の残存が良い所では、3段の掘り込みが確認されている。

最上部は、南北4.2m、東西3.6m、深さが20cmであり、この床はハードローム面である。中間部は、南北3.64m、東西2.04m、深さが40cmである。最下部は、南北2.8m、東西1.6m、深さが60cmである。

覆土は、第3層が浅間A軽石(A-s-A)で、天明3年(1783年)の降下軽石が純堆積している。堆積は西側から流れ込んだ状態である。ムロが機能していたのは1783年以前であるが、噴火直前にはこのムロは使用されていなかったと考えられる。

出土遺物(53図)は、1~10が軽石層下からの出土であり、天明3年以前の遺物として、11~18は軽石層上からの出土であるので、天明3年以後と考えられる遺物群である。

2号ムロ(第50図、PL9)

本ムロはG-H-7グリッドに位置している。3基の土坑が主軸を南北にして掘り方が連結している。中央は南北2.56m、東西1.64m、西側は南北2.8m、東西0.8m、東側は南北1.94m、東西1.2mで、連結した東西は3.4mである。礫が大量に投げ込まれており、礫には円礫・亜角礫・角礫が認められる。角礫は完形の物ではなく、破損品である。この多くの礫と一緒に陶磁器が含まれていたが、近世以後から近現代の陶磁器であった。その他、中央の土坑からは床面が赤色化している力所があり、この中で火を焚いた痕跡が認められた。

3号ムロ(第50図、PL9)

本ムロはC-3グリッドに位置している。

平面形は、円形で2段掘りとなっている。大きい円形は直径2.04mで深さ24cmである。小さい円形は西壁を共有しており、直径1.64m、深さは62cmである。覆土は表土と同じでその他、ロームブロックが斑状に認められる。

遺物は、縄文時代の包含層並びに遺構と重複・破壊しているため、縄文時代の中期加曾利E式の土器片が碎片で出土している。陶磁器破片も出土した。

1号井戸(第51図、PL9)

1号井戸はG-5グリッドに位置している。

井戸の平面形は円形である。直径は約84cmであり、壁はほぼ垂直で全体的にオーバーハングする力所がある。狭く深い井戸調査は危険であり、約70cmで井戸と確認できたのでここまで調査となった。

出土遺物はない。

2号井戸(第51・54図、PL9・21)

2号井戸はG-4グリッドに位置している。

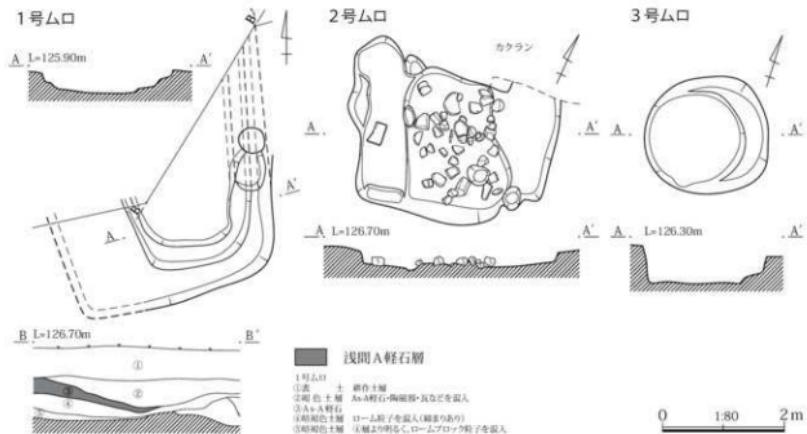
井戸の平面形は円形である。直径は約84cmであり、壁はほぼ垂直である。狭く深い井戸調査は危険であり、約60cmで井戸と確認できたのでここまで調査となった。

出土遺物(第54図)は陶器がある。高台の高い碗2点、縁軸の高台壺皿の1点が出土した。

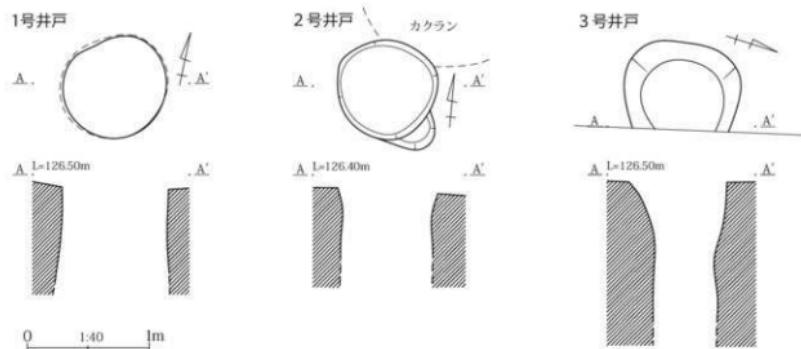
3号井戸(第51・55図、PL9・21)

3号井戸はG-6グリッドに位置している。

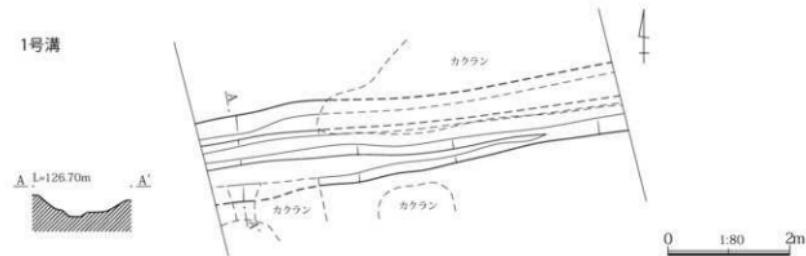
井戸の平面形は円形である。直径は約96cmで、40cm下がったあたりで直径74cmと狭くなり、その下の壁は



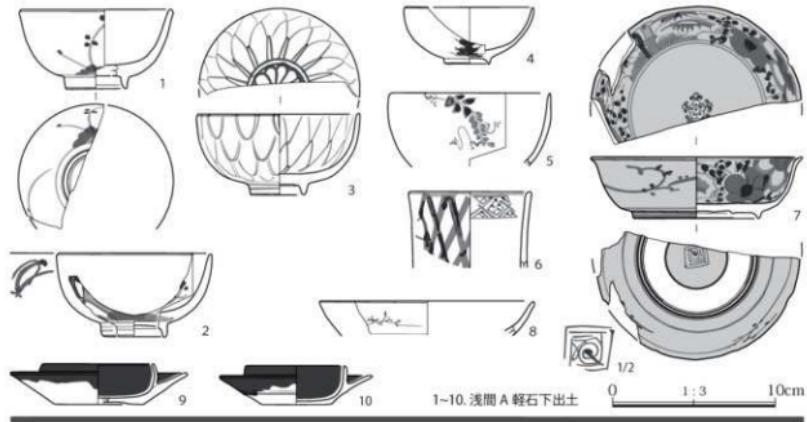
第50図 1～3号ムロ平面及び断面実測図



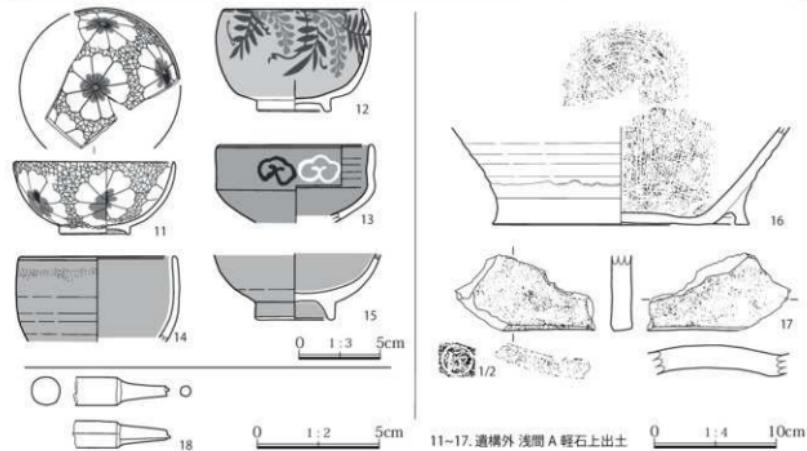
第51図 1～3号井戸平面及び断面実測図



第52図 1号溝平面及び断面実測図



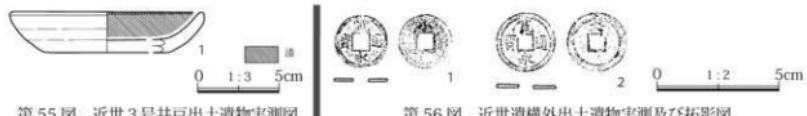
11-10. 浅間 A 軽石下出土



11-17. 遺構外 浅間 A 軽石上出土

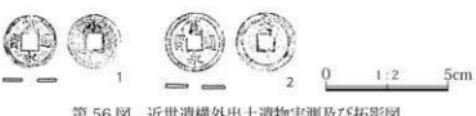


第54図 近世2号井戸出土遺物実測図



第55図 近世3号井戸出土遺物実測図

第56図 近世遺構外出土遺物実測及び拓影図



ほぼ垂直である。狭く深い井戸調査は危険であり、約 120cmで井戸と確認できたのでここまで調査となつた。

出土遺物は、カワラケ（第 55 図）がある。内面全面に漆が付着している。

1 号溝（第 52 図、P.L.9）

1 号溝は、I・H-8 グリッドに位置している。

東西方向に走行する 2 段堀りになっている溝である。遺構確認面では、上場幅 1.4m、中間下場 80cm、2 段目は上場幅 40 ~ 44cm、底面幅 22cm、深さは全体で 38cm、2 段目の深さは 5cm である。長さは 7m で西側及び東側にさらに延びている。古墳時代の 9 号住居と重複しているが、溝の南壁はすべて確認されている。溝の北東部は大きく重機により掘削されており、底面まで破壊されている。

地表面からこの溝が掘られていたと考えれば、溝の傾斜角度で推定すると幅は 2.6 ~ 3.0m 以上、深さは約 1m 以上となり、更に掘った土を南北どちらかに土塁として盛っていたとすれば、大きな地割が存在したことになる。東西方向ということから、本遺跡北側に所在する棟高館跡の関連溝遺構として注目されるところである。

出土遺物は認められなかつたため、時代を特定することはできない。

遺構外出土遺物（第 56 図、P.L.21）

古銭（銅銭）2 枚が出土している。共に「寛永通宝」で裏面に各々「小」「文」がある。

第 6 表 近世出土遺物一覧表

番 號 No.	P. L.	出土位置 出土地點	種別・器種 Category	法量 (kg) 重量 (kg)	寸標定 (mm) 寸法 (mm)	地盤 地盤	地成 地成	色調 色調	器形、成・整形、文様等の特徴 器形、成・整形、文様等の特徴		遺存状況 遺存狀況	
									口径 口径	底径 底徑		
53. 1 21	1号ムロ	磁器 瓢	(9.4)	3.36	4.9	磁泥	良好	灰須染付	外縁:細い蔓に小さな花を手描き。内面:無文。腹部に 1 条・高台部に 2 条の網目模様。	口~底溝 1/3		
53. 2 21	1号ムロ	磁器 瓢	(9.4)	4.08	5.3	磁泥	良好	灰須染付	外縁:植物を描く。腹部に 1 条・高台部外縁に 2 条の網目模様。内面:無文。	口~底溝 1/3		
53. 3 21	1号ムロ	磁器 瓢	(0.0)	(3.3)	5.0	磁泥	良好	灰須染付	外縁:二重輪手文。底部に 1 条の網目模様。高台部に 2 条の網目模様。内面:見込み中央に花文。その外側に 2 条の網目模様。さらに網手文。	口~底溝 1/2		
53. 4 21	1号ムロ	磁器 小瓶	(8.0)	(2.8)	3.5	磁泥	良好	灰須染付	外縁:松枝が籠に描かれる。内面:無文。	口~底溝 1/4		
53. 5 21	1号ムロ	磁器 瓶	(0.0)	—	[4.5]	磁泥	良好	灰須染付	外縁:藤花文。内面:無文。	口~底溝 1/4		
53. 6 21	1号ムロ	磁器 瓶	(7.6)	—	[4.7]	磁泥	良好	灰須染付	外縁:太線で斜め格子目。内面:上部に連續する要形文。	口~体下部 罐六		
53. 7 21	1号ムロ	磁器 輪花瓶	13.0	7.6	3.7	磁泥	良好	灰須染付	外縁:蔓状の植物文。縁に 1 条・高台部に 2 条の網目模様。内面:見込み中央に「五瓣花」。縁輪花輪内に竹・草花文を描く。高台部:蛇の目模様。	口~底溝 1/2		
53. 8 21	1号ムロ	磁器 瓶	(3.2)	—	[2.2]	磁泥	良好	灰須染付	外縁:梅の枝。腹部に輪輪。内面:無文。	口~体下部 罐七		
53. 9 21	1号ムロ	陶器 明治期 内 (6.8) 外 (10.8)	(5.4)	2.5	磁泥	良好	黄褐	素地の部:内面は全周・外は上部 1/4 に鉄錆施釉。内側の油ために 2 ヶ所の心出部位を切り込みで取出。灯心部は煤が付着。	口~底溝 1/2			
53. 10 21	1号ムロ	陶器 有明期 内 6.2 外 9.4	4.4	2.4	磁泥	良好	褐	素地の部:内面は全周・外は上部 1/4 に鉄錆施釉。油のための残存部分には切込みが認められない。外縁:垂ね絞き底。底温で焼成。A + B 軒柱上料の特徴的。	口~底溝 1/2			
53. 11 21	1号ムロ	陶器 瓶	(10.0)	4.4	4.4	磁泥	良好	染付	外縁:花形を 5 重に。内面:見込みに 1 位筋・側面に 5 位筋。計 6 位筋を施す。左・右各 2 位筋で細かく・斜めに手描き。	口~底溝 2/5		
53. 12 21	1号ムロ	陶器 瓶	(8.8)	4.6	6.3	磁泥	良好	淡黄	透明度で焼成。藤の葉を青・紫・翠の緑色で施文。再度低温で焼成。	口~底溝 2/5		
53. 13 21	1号ムロ	陶器 瓶	(9.5)	—	[4.8]	磁泥	良好	灰白	瓶底で一回強く盛り、口縁は直立する。我柿・白色釉で 2 位を施文化。	口~体下部 罐八		
53. 14 21	1号ムロ	陶器 瓶	(9.6)	—	[5.2]	磁泥	良好	明黄	外縁下部にペイズリ文。内面はぎに鉄錆+基礎釉。口縁下部に黄色の輪錆が上部。	口~体下部 罐九		
53. 15 21	1号ムロ	陶器 瓶	—	4.8	[4.0]	磁泥	良好	浅黄	内面は約 1.1cm、底付で以外透明釉で施釉。貯入あり。	体下~底溝 1/3		
53. 16 21	1号ムロ	陶器 —	(20.8)	[8.0]	乍・乍 粗	良好	明白	素地は木質又は竹材付着。下部に溶接板。全体を研磨が覆っている。	体~底溝 1/3			
53. 17 21	1号ムロ	近世瓦	蘿(6.2) 壁(11.5) 厚1.8	—	—	良好	純黄	高台高 1.3cm。耐水性に弱く内外透明釉で施釉。貯入あり。	端溝瓶 1/3			
53. 18 21	1号ムロ	耐候性 耐候性	長(4.0) 径(1.5)	吸口 直 0.4	4.0	陶	—	暗緑灰	内面に木質又は竹材付着。下部に溶接板。全体を研磨が覆っている。	一部火候 1/3		
54. 1 21	2井戸	陶器 瓶	—	5.0	14.0	磁泥	良好	純黄	高台高 1.3cm。耐水性に弱く内外透明釉で施釉。貯入あり。	体下~底溝 1/3		
54. 2 21	2井戸	陶器 瓶	—	(5.0)	[4.0]	磁泥	良好	オリーブ 黄	セリーブ黄	高台高 1.2cm。耐水性に弱く内外透明釉で施釉。貯入あり。	体下~底溝 1/3	
54. 3 21	2井戸	陶器 瓶	(11.6)	4.8	3.2	磁泥	良好	灰	セリーブ 施釉後込みに灰の目狂に輪はぎ。	口~底溝 2/5		
55. 1 21	3井戸	カワラケ	(11.6)	(7.8)	2.5	陶	良好	黑泥	織籠底。耐水性。内面:黒墨が一面に付着。	口~底溝 1/3		
56. 1 21	道標跡	陶残	径 2.26	—	0.11	陶	—	—	内:「寛永通寶」裏:「小」	完形		
56. 2 21	道標跡	陶残	径 2.50	—	0.14	陶	—	—	内:「寛永通寶」裏:「文」	一部火候		

第6章 棟高西弥三郎街道遺跡出土の寄贈遺物

「かみつけの里博物館」収蔵遺物（第57図、PL 20）

ここで紹介するのは、当遺跡地の先代の所有者であった志村繁夫氏が、遺跡地内から出土したとして「かみつけの里博物館」に寄贈した遺物の一部である。

遺物は、石製紡錘車1点、翡翠製の勾玉1点、軽石製浮石1点、打製石斧2点、古銭4枚、石鐵7点、土師器坏、須恵器高台付坏などである。特殊遺物として、先の3点の実測図を作成し紹介するものである。

1は、石製紡錘車の完形品である。大きさは、直径4.2cm、厚さ2.0cm、重量54.0gである。色調が黒色で、石材は滑石である。紡錘車の側面には、「車」の文字が刻書されている。「車」の大きさは、縦3.3cm、横1.6cmである。紡錘車は、上面には穴の周囲・中央・外側と幅3mm前後の帯状の隆帯が認められ、裏面の孔廻りと外側に3mm前後の隆帯が認められた。隆帯間は浅い溝が巡っている。

この石製紡錘車に「車」と刻書された資料は、榛名山東南麓一帯が「くるま」「車郡：くるまのかおり」と呼ばれていたことから、この「車」の地との関係が注目される資料である。

2は、翡翠製の勾玉である。この勾玉は、縦2.2cm、横1.8cm、厚さ1.2cm、重さ9.0gである。整形の仕上げとして勾玉の抉り部はツルツルに研磨されている。孔は表から裏側への一方向に穿孔している。孔の直径は表4mmで、裏2mmである。

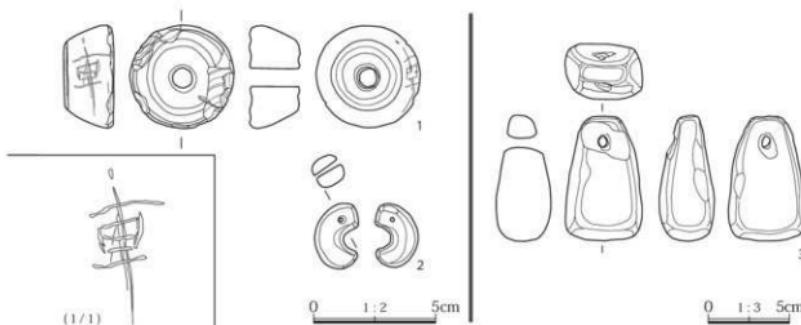
当遺跡地内には、副葬品として勾玉が出土しそうな埋葬施設である古墳は存在していないため、周辺の遺跡で拾われた可能性がある。ただし、翡翠製の勾玉は弥生時代の埋葬施設からも発見されているので、古墳にこだわらなくても良いかもしれない。

この勾玉と酷似した勾玉は、中村遺跡（渋川市）円形周溝墓内6号竪床墓からの出土品がある。

石材が翡翠の勾玉で、孔の穿孔状況も一方向からのものであり、大きさも2.5cm×1.4cm×1.2cmと、ほぼ同様の形状で、整形も四角く頭部分も角張っている。また、抉り部の「C」字は極端に磨かれておりその形状も似ている。以上のことから弥生時代の可能性も考えられる。

3は、浮石で軽石製の浮きである。平面形は長楕円形の下彫れ状のもので、大きさは縦7.6cm、横4.7cm、厚さ3.4cm、重さ66.0gである。上部に表裏両側からの直径6mmの孔が穿たれている。

※なお、この資料紹介に当たっては、「かみつけの里博物館」に資料使用許可申請書を提出して許可していただいたものであることを申し添える。



第57図 かみつけの里博物館に寄贈された遺物実測図

第7章　まとめ

縄文時代

縄文時代は、中期加曾利E 2・3式から後期堀之内II式にかけての遺構・遺物が検出された。

縄文中期加曾利E 3式期の竪穴住居2棟、土坑107基の調査が行われている。

縄文土器は、加曾利E 3式の土器が多いが、同E 4式・称名寺式・堀之内II式土器と各期が認められた。

加曾利E 3式には、長野県・山梨県エリアの曾利式が相当数混在している。

称名寺式土器については、土器の確認ができるものの遺構については確認されていない。

また、加曾利E 4式から称名寺式にかけては、敷石住居や配石が存在する可能性が高いが、今回は敷石住居は確認されていない。

土坑の中には、直径58～70cm、深さが62～101cmで壁が垂直に立ち上がる一群がある。

1間×2間で東西方向の長方形柱穴列が確認された。他にもいくつか同様な土坑があり、柱穴列が想定される。

土坑群内で唯一フラスコ型土坑（63号土坑）を確認できた。開口部は底面より狭く、床は平坦で断面が三角フランコ形状をしている。具体的な利用方法としては、貯蔵穴としての利用が多く、クリ・クルミ・ドングリなどの堅果類が見つかることが多いが本土坑では確認されなかった。

縄文時代に倒木跡が存在している。森林地帯を人が伐採し、集落を営むことにより森林開発され、強風を直接受けることがなかったエリアが、木が剥き出し状況となり、倒木したものと考える。

倒木については、1号倒木跡は南東から北西に、2号倒木跡は南から北側に倒れている。根張りの大きさとしては不定形であるが、直径3～4m前後をみるとできる。この倒木の直接の原因は台風による強烈な南風がその要因として挙げられる。今回の倒木の時期は、堀之内II式の土器が倒木の黒土内に含まれていることから、縄文時代後期堀之内II式期と考える。倒木の認められた力所は集落の西端に位置している。

縄文時代の石器は石鏃・打製石斧と加工痕のある石器・石核等で、多くは剥片での出土であった。

住居の検出はあったものの、石皿・凹石等の粉物文化に密着した資料の出土は、1点もなかった。

打製石斧は、短円形と分銅形と撥形の3種類が存在した。短円形石斧は先端が磨滅を受けており、土掘り具であったと思われる。分銅形石斧は木の伐採などに使われたと考えられる。

石材は、緑色片岩・雲母片岩・泥質片岩などの片岩系石器が認められる。この石材は篠川流域で採集することが出来る。縄文中期の遺跡にこのような棒状石製品や片岩系の石が持ち込まれていることが確認された。

棒状石製品そのものは敲き石として先端を使用している。石棒も折れた石棒の先端を縱に敲き石として使用し、縱方向に厚さ1cmで剥離したものである。

軽石の石器が出土しており、浮石の可能性がある。平面形は梢円形で厚みは1.3～1.5cm、の円盤状のものである。

黒曜石も群馬県では産しないため長野県の和田岬産等を持ち込んでいると考えられる。

縄文中期加曾利E式期の集落跡の西端を調査したもので、集落は東に広がり馬蹄形集落を営んでいたものと考える。

縄文後期堀之内II式期の土器を出土している土坑は、1・2・3・12・13・15・16・19・21・24・25・27・28・29・39・40・41・61・63・64・69・71号土坑と合計22土坑にも上り、広い範囲で縄文後期の人々の動きが認められるが、遺構としては1号小窓穴・29土坑の2遺構だけである。

縄文時代中期加曾利E式から後期堀之内II式まで確認している。称名寺式期から堀之内II式の間に断続した期間が認められる。

古墳時代

古墳時代の竪穴住居が6軒検出されている。3号住居を除いて5軒はほぼ方形で主軸はN-20°-Wと住居の傾きがほぼ同じであり、主柱穴と壁までの距離が1.3mと各住居がほぼ同じ規格性である。

4号住居と10号住居の財貯穴は他の遺跡と比べて特徴的で、形状が漏斗状で中央の穴が小さくなり、深さが70cmと深い点が共通している。

平安時代

「棟高西弥三郎街道遺跡」の周辺は、今まで発掘調査が行われていない地域であるが、今回発掘調査したところは、石製鍛錬車に「車」と刻書されたものが出土した場所である。

榛名山東南麓一帯が「車」と呼ばれており、古代豪族「車持氏」の勢力地だったためとする説があり、(前沢2001)「車持」→「車」に変化したとされる。

平安時代の竪穴住居が3軒検出された。遺物の分布は調査区全体に広がっており、未調査区内に集落が営まれていたものと考える。

古代瓦（布目瓦）が1点出土している。この瓦は、本遺跡の北東2.5kmに「史跡上野国分僧寺跡」があり、そこから持ち込まれたものと考えられる。

中世

中世の遺跡は、当該地の北側に隣接して「棟高館跡」(73)とされる中世の館がある。具体的に明確な曲輪は「西の丸」の位置（横山1998）だけで、本丸など他の施設は具体的ではなく館跡の全貌は語られていない。今回地図（第2図）に館を記入するにあたり、胸形神社を本丸位置と考え南北150m、東西220mの範囲を館跡と捉えた。今回調査した遺跡地の北側に東西方向に低くなっている道があり、館と直接関連のある地割と考えると、南北は250mと拡張することになる。ただし、この館には「棟高南八幡街道遺跡3」(4)の北側の川幅を広げた所（横山1998）があることから館の範囲とする説もある。

近世

本遺跡地の小字は、「棟高・西弥三郎街道」で、「弥三郎」という名主名と思われる（横山1998）名の付く小字である。南東隣には「東弥三郎街道」という小字名が連続している。

先の「車」に関連して、北西1kmには、棟高の中で東端に小字「車久保」という名称が残されている。これも「車郡」との関連を意味するものかもしれない。

1号ムロは、浅間のA軽石が純層で西から流れ込んでいるため、軽石層の下層の遺物は天明三年（1783）以前のものであり、呉須手の磁器は時代が確定する貴重な資料といえる。

参考文献

- 神谷佳明 2005 「棟高東弥三郎街道遺跡」『群馬県埋蔵文化財調査事業』 第354集
澤田福弘 2014 「棟高八幡街道遺跡」有限公司・高崎市教育委員会・高崎市教育委員会 第333集
三ツ橋勝 2018 「棟高南八幡街道遺跡2」山下工業株式会社・高崎市教育委員会 第399集
青木利文 2018 「棟高南八幡街道遺跡3」山下工業株式会社・高崎市教育委員会 第423集
前沢和之 2001 「原始古代 第4章 ヤマト王権と群馬 第2節「車」から「群馬」へ」『群馬町誌 通史編上 原始古代中世・近世』群馬町誌刊行委員会
1956 「堤ヶ岡村誌」群馬県群馬郡堤ヶ岡村誌編纂委員会
横山伊平 1998 「棟高館址」『群馬町誌 資料編I 原始古代中世』群馬町誌刊行委員会
阿久津宗二 2001 「近世第2章 第2節 棟高村」『群馬町誌 通史編上 原始古代中世・近世』群馬町誌刊行委員会
前沢和之 2001 「第9回特別展 グンマはクルマから始まった」かみつけの里博物館
五十嵐信 1986 「中村道路」渋川市教育委員会

棟高西弥三郎街道遺跡

写 真 図 版

写真図版 目次

PL 1	棟高西弥三郎街道遺跡北西側の俯瞰写真 (三ツ寺の谷筋と棟名山)	1 号井戸
	棟高西弥三郎街道遺跡全景 空中写真	2 号井戸
PL 2	東西調査地全景 東西調査地南側 東西調査地南側 南北調査地全景 南東端土坑群 1 号倒木跡、70・71号土坑 2 号倒木跡	3 号井戸
PL 3	7 号住居全景（南から） 7 号住居全景（北から） 7 号住居埋甕と周辺のピット 7 号住居埋甕埋設状況 7 号住居埋甕埋設以前の土坑 7 号住居以前の土坑調査後写真 11 号住居土器出土状況 1 号小豎穴	1 号溝
PL 4	各土坑	PL10 繩文時代 7 号住居出土土器
PL 5	各土坑	繩文時代 11 号住居出土土器
PL 6	各土坑・各ピット	繩文時代 1 号小豎穴出土土器
PL 7	1 号住居（北から） 1 号住居覆土内棟名山噴火に伴う降下火山灰（FA） 2 号住居（南から） 3 号住居（南西から） 4 号住居（西から） 4 号住居貯藏穴 5 号住居（西から） 5 号住居灰釉陶器皿出土状況	PL11 繩文時代 土坑出土土器（1）
PL 8	5 号住居カマド 5 号住居貯藏穴 5 号住居貯藏穴内灰釉陶器皿出土状況 6 号住居（西から） 8・9 号住居（西から） 10 号住居（北から） 10 号住居（東から） 10 号住居貯藏穴内土師器甕出土状況	PL12 繩文時代 土坑出土土器（2）
PL 9	1 号ムロ 1 号ムロ覆土内浅間A 軽石層堆積状況 2 号ムロ 3 号ムロ	PL13 繩文時代 土坑出土土器（3）
		繩文時代 1 号倒木跡出土土器（1）
		PL14 繩文時代 1 号倒木跡出土土器（2）
		繩文時代 遺構外出土土器一加曾利E式土器(1)
		PL15 繩文時代 遺構外出土土器一加曾利E式土器(2)
		繩文時代 遺構外出土土器一曾利式土器
		PL16 繩文時代 遺構外出土土器一称名寺式土器
		繩文時代 遺構外出土土器一堀之内II式土器(1)
		PL17 繩文時代 遺構外出土土器一堀之内II式土器(2)
		繩文時代 遺構内出土石器
		PL18 繩文時代 遺構外出土石器
		PL19 古墳時代 3 号住居出土遺物
		古墳時代 4 号住居出土遺物
		古墳時代 10 号住居出土遺物
		古墳時代 遺構外出土遺物
		平安時代 2 号住居出土遺物
		平安時代 5 号住居出土遺物（1）
		PL20 平安時代 5 号住居出土遺物（2）
		平安時代 6 号住居出土遺物
		平安時代 遺構外出土遺物
		当遺跡出土品「かみつけの里博物館」所蔵品
		PL21 近世 1 号ムロ出土遺物
		近世 2 号井戸出土遺物
		近世 3 号井戸出土遺物
		近世 遺構外出土古錢「寛永通宝」



棟高西弥三郎街道遺跡北西側の俯瞰写真（三ツ寺の谷筋と棟名山）



棟高西弥三郎街道遺跡全景 空中写真



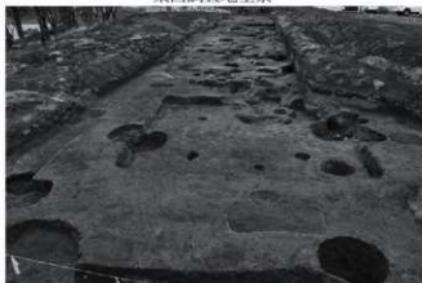
東西調查地全景



東西調查地南側



東西調查地南側



南北調查地全景



南東端土坑群



1号倒木跡、70・71号土坑



2号倒木跡



7号住居全景（南から）



7号住居全景（北から）



7号住居埋甕と周辺のピット



7号住居埋甕埋設状況（第7図7住-1）



7号住居埋甕埋設以前の土坑



7号住居以前の土坑調査後写真



11号住居土器出土状況（第7図11住-1）



1号小豗穴



1号土坑



2号土坑



3号土坑



4号土坑



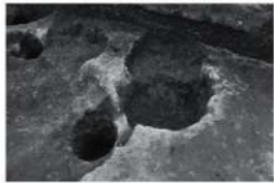
5·6·7号土坑



8号土坑



10号土坑



11·12·13号土坑



14号土坑



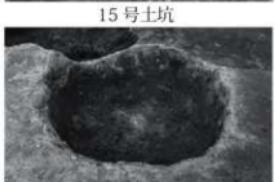
15号土坑



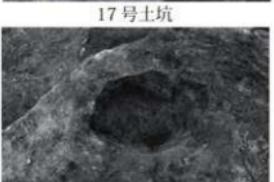
17号土坑



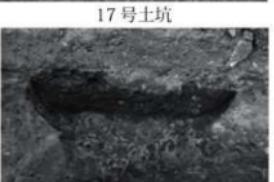
17号土坑



18号土坑



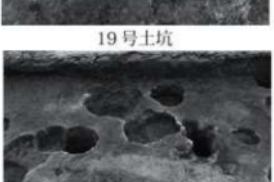
19号土坑



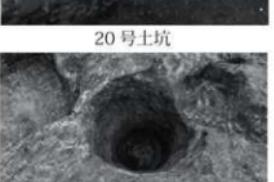
20号土坑



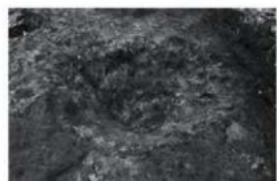
21·22·23号土坑



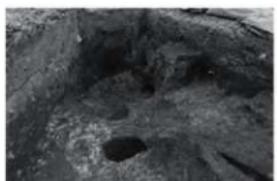
24·25·26·51号土坑



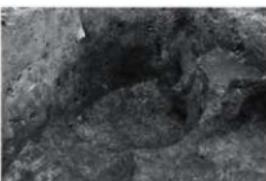
24号土坑



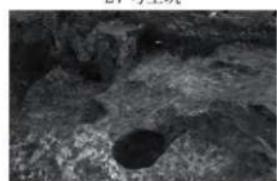
27号土坑



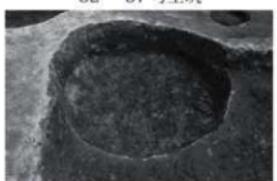
32~37号土坑



33·34·35号土坑



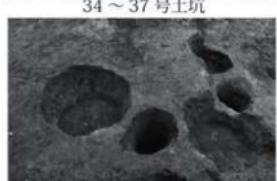
34~37号土坑



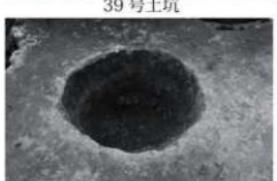
39号土坑



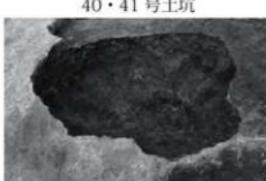
40·41号土坑



42·79·11号土坑



42号土坑



43·44号土坑



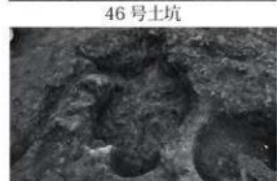
46号土坑



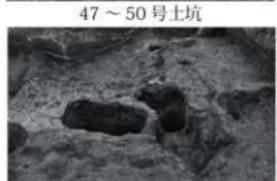
47~50号土坑



47·48号土坑



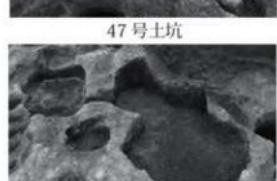
47号土坑



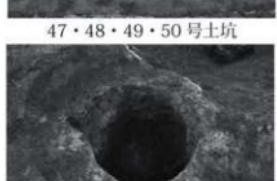
47·48·49·50号土坑



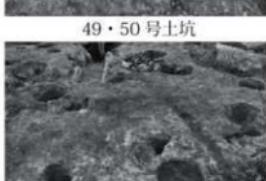
49·50号土坑



53·54号土坑



57号土坑



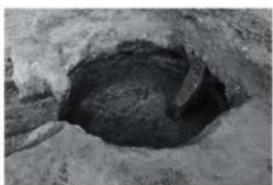
60号土坑



61号土坑



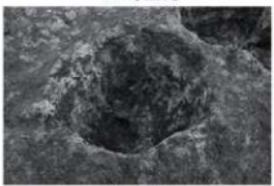
62号土坑



63号土坑



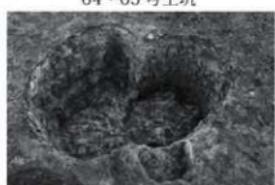
64·65号土坑



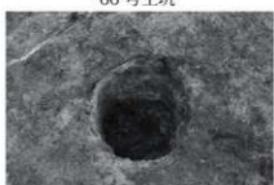
66号土坑



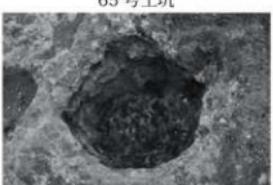
65号土坑



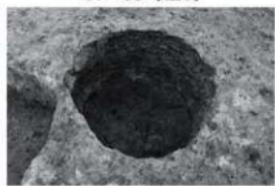
67·68号土坑



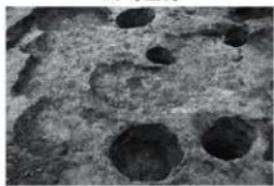
75号土坑



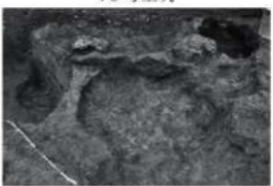
76号土坑



77号土坑



78号土坑



81号土坑



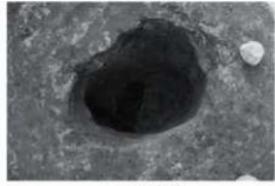
89号土坑



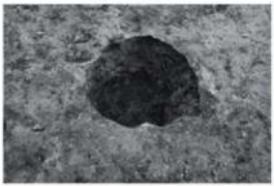
90号土坑



97号土坑



107号土坑



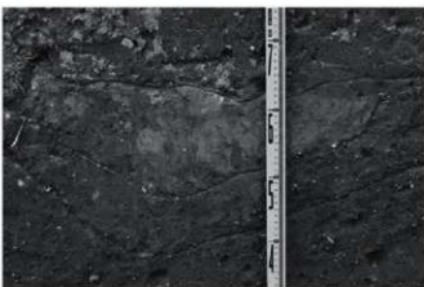
P 2



P 3



1号住居（北から）



1号住居覆土内榛名山噴火に伴う降下火山灰（F A）



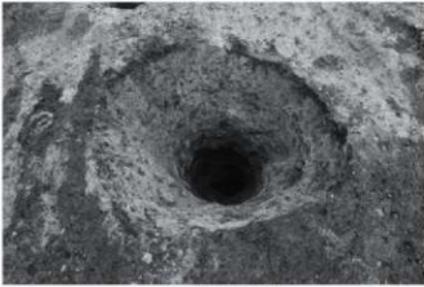
2号住居（南から）



3号住居（南西から）



4号住居（西から）



4号住居貯藏穴



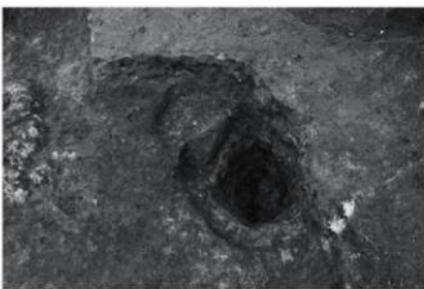
5号住居（西から）



5号住居灰釉陶器皿出土状況（第47図8・14）



5号住居カマド



5号住居貯蔵穴



5号住居貯蔵穴内灰釉陶器皿出土状況（第47図9）



6号住居（西から）



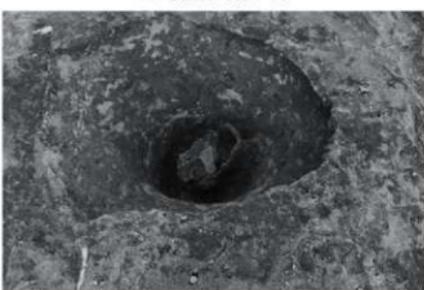
8・9号住居（西から）



10号住居（北から）



10号住居（東から）



10号住居貯蔵穴内土師器甕出土状況（第41図2）



1号匁口



1号匁口覆土内浅間A軽石層堆積狀況



2号匁口



3号匁口



1号井戸



2号井戸



3号井戸



1号溝

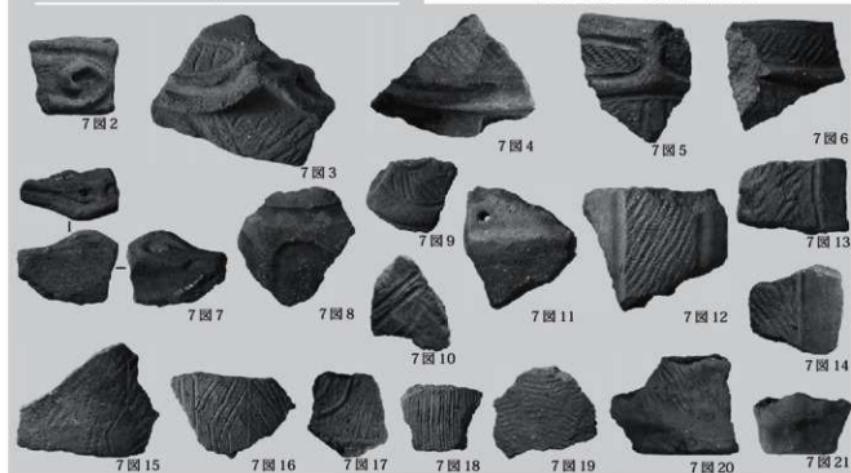


1/4
7図1

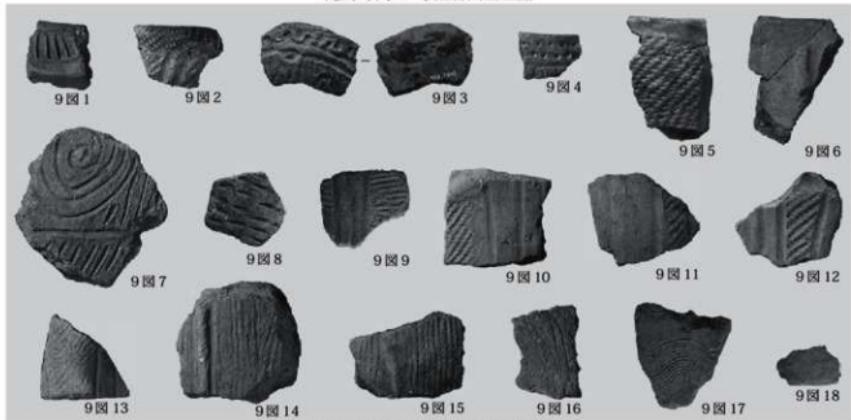


1/4 7図1

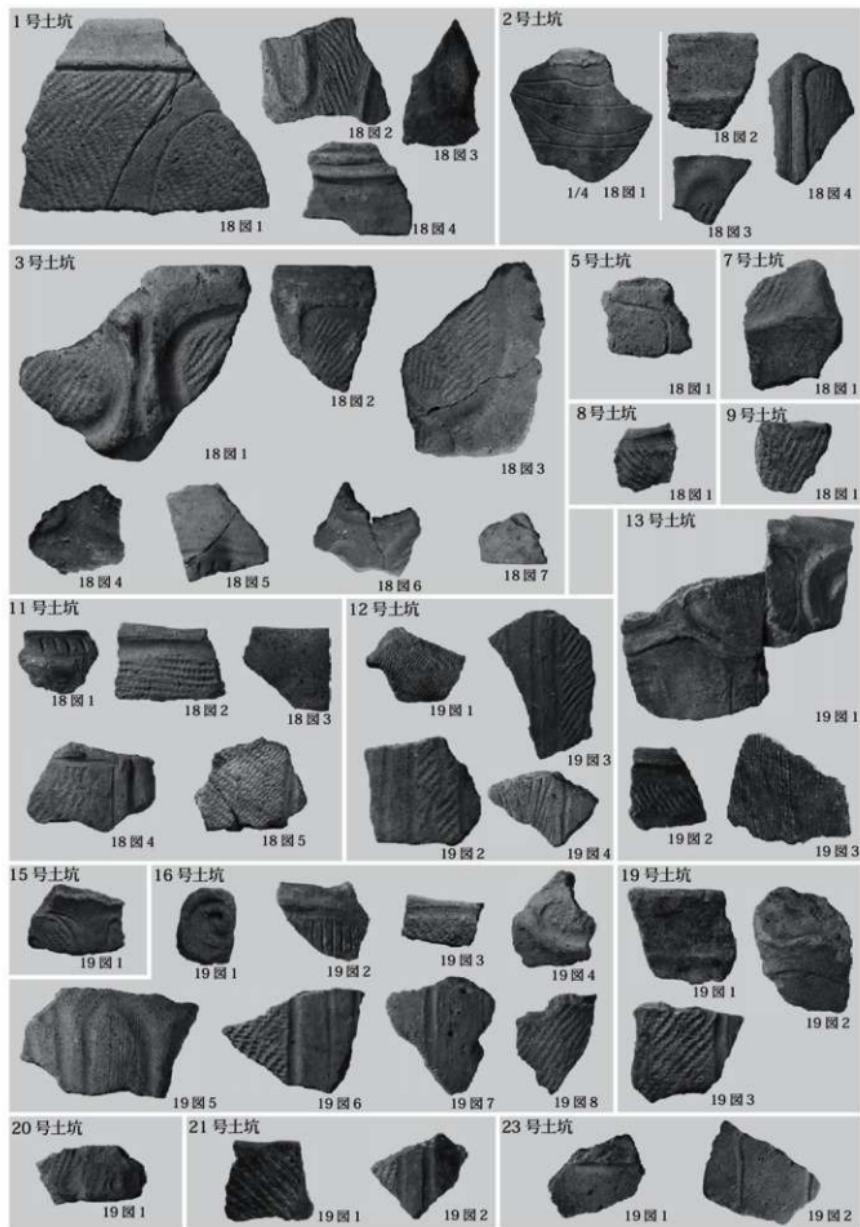
縄文時代 11号住居出土土器



縄文時代 7号住居出土土器



縄文時代 1号小窓穴出土土器

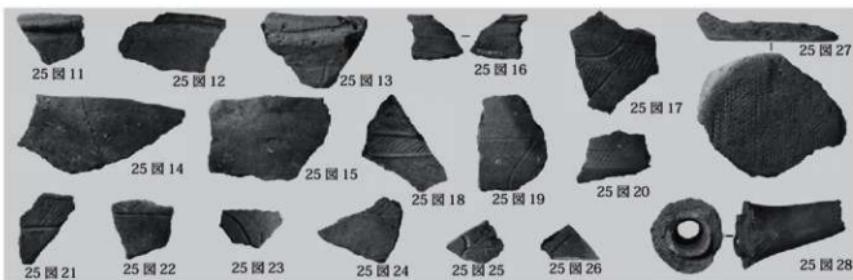


縄文時代 土坑出土土器 (1)

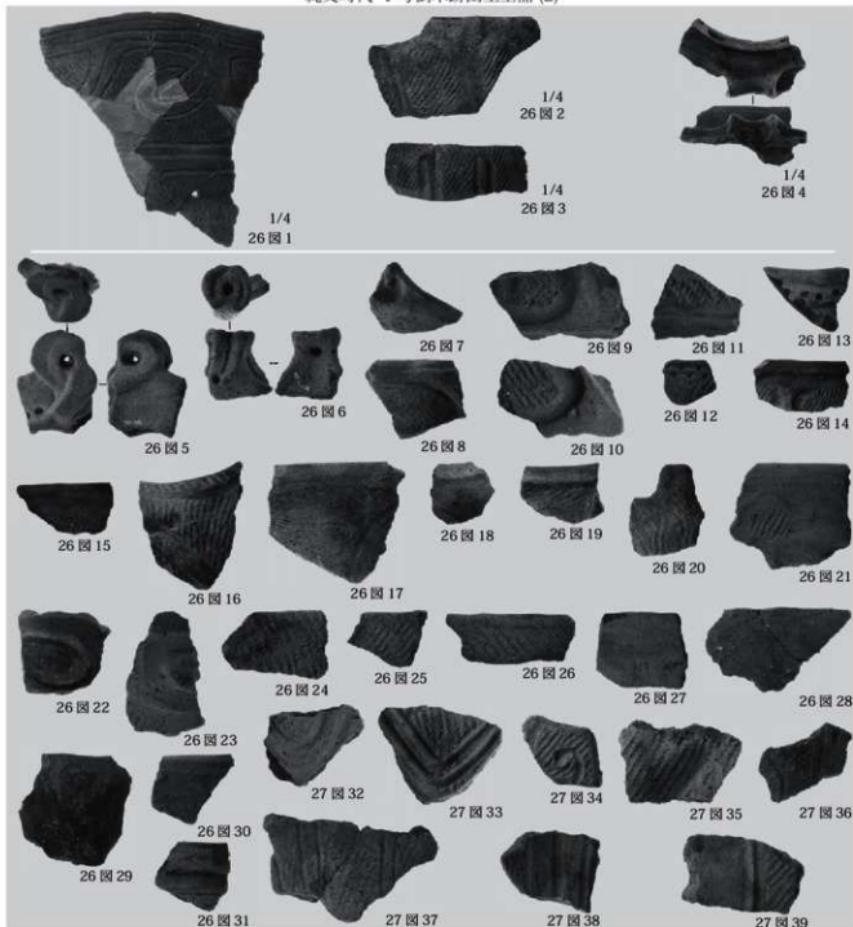


縄文時代 土坑出土土器(2)

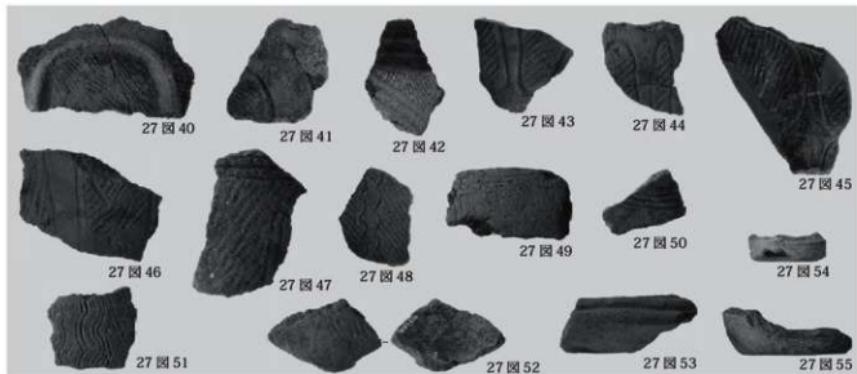




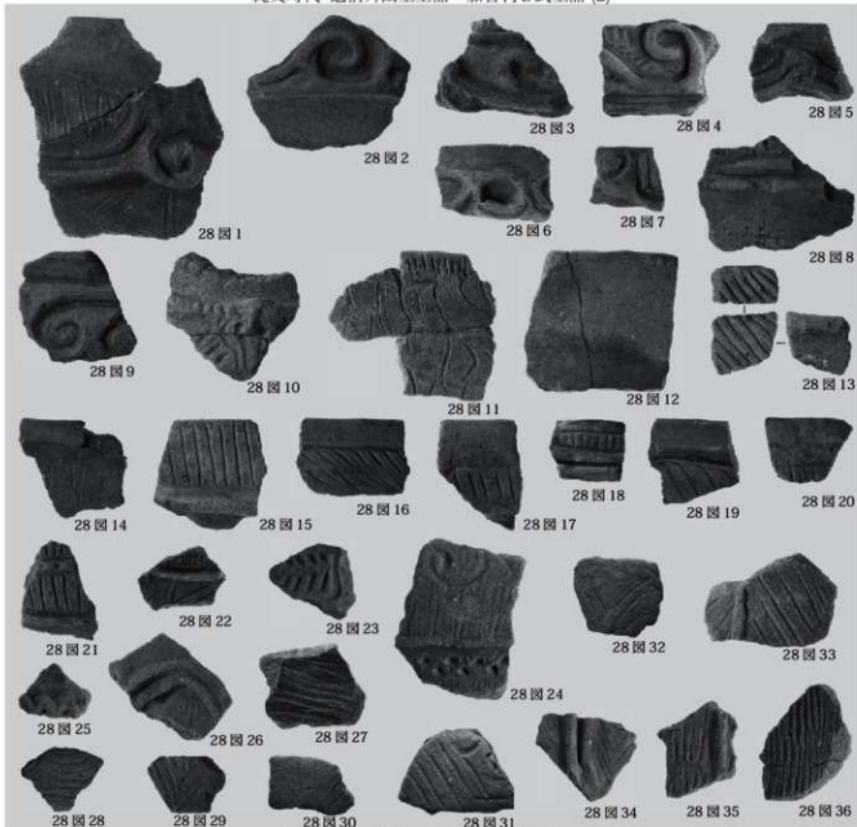
縄文時代 1号倒木跡出土土器(2)



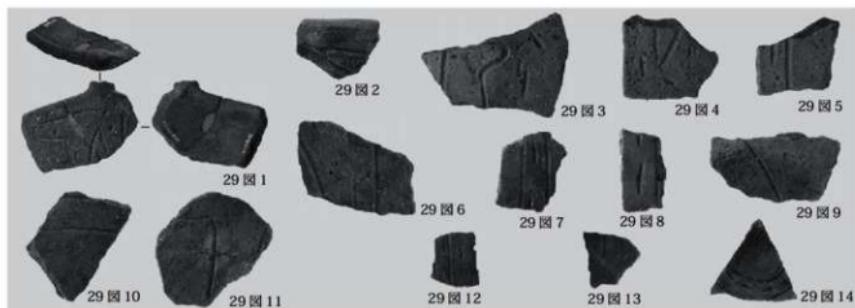
縄文時代 遺構外出土土器—加曾利E式土器(1)



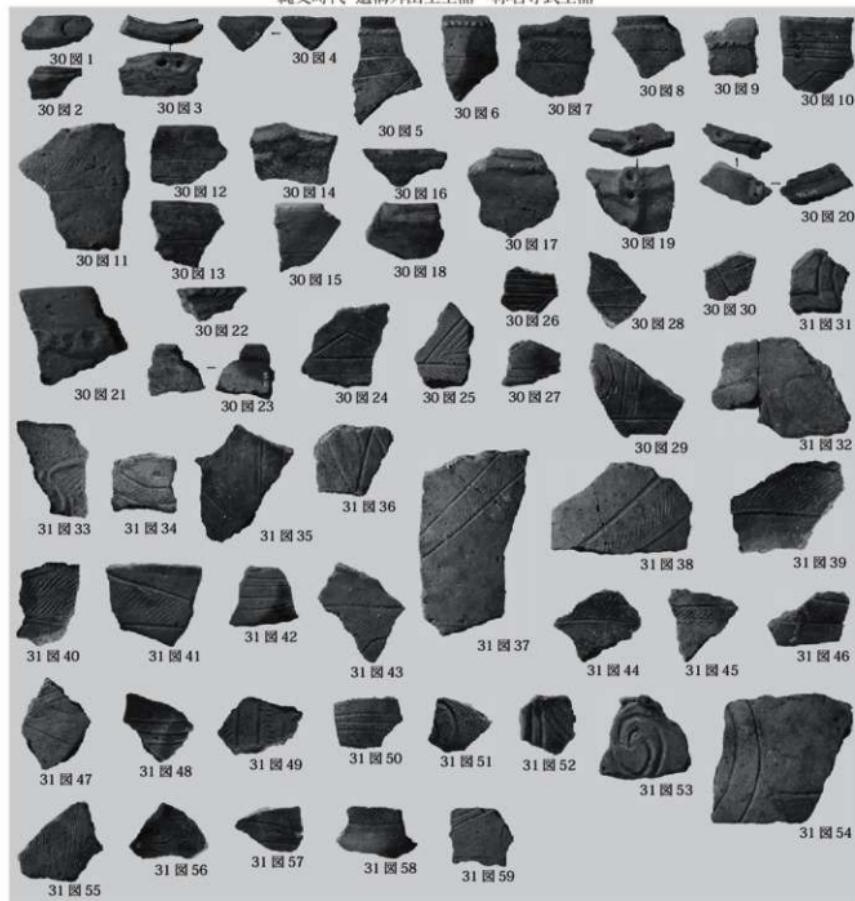
縄文時代 遺構外出土土器—加曾利E式土器(2)



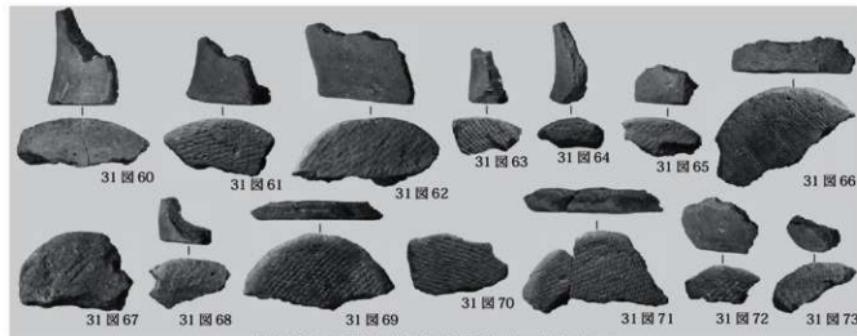
縄文時代 遺構外出土土器—曾利式土器



縄文時代 遺構外出土土器－称名寺式土器



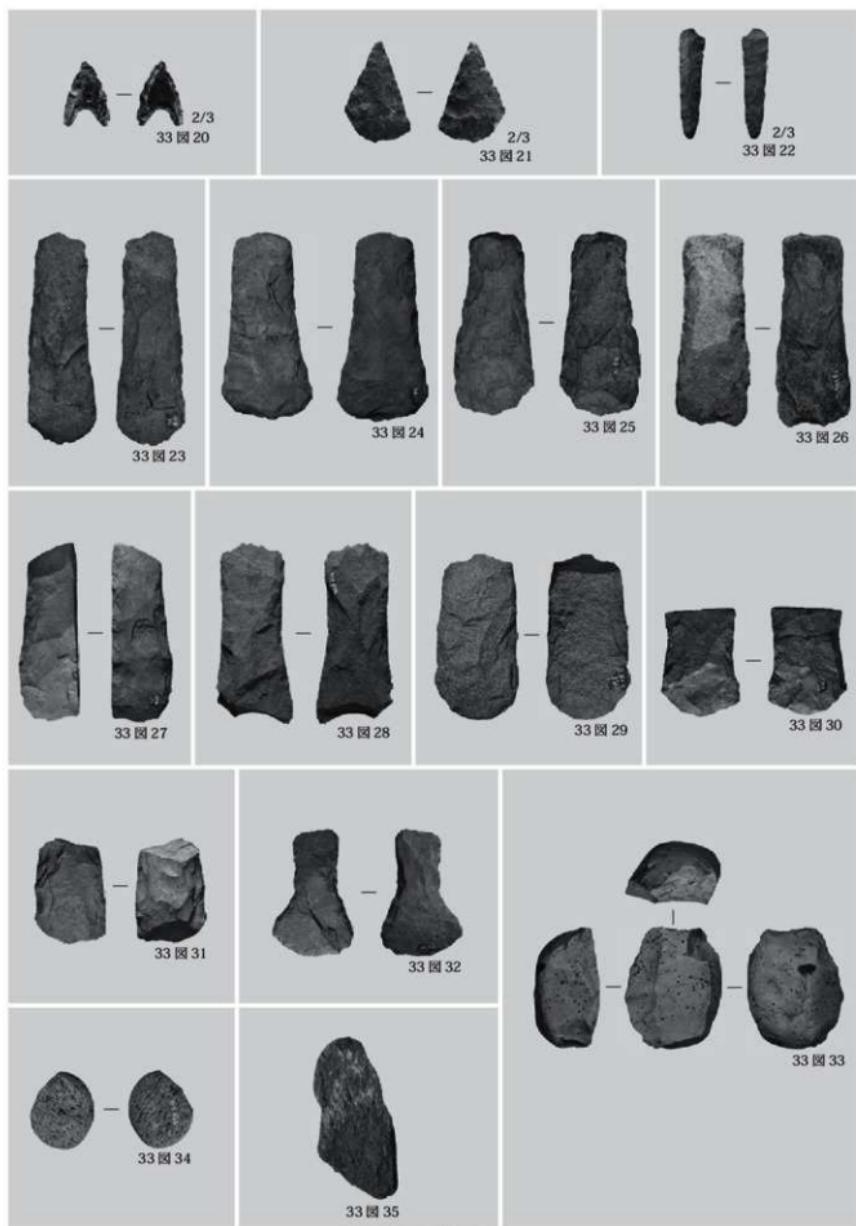
縄文時代 遺構外出土土器一編之内Ⅱ式土器(1)



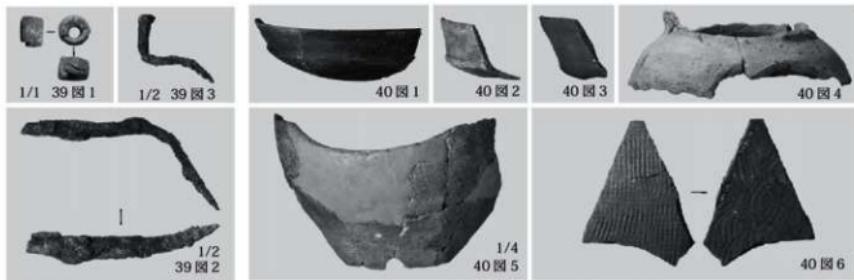
縄文時代 遺構外出土土器—堀之内II式土器(2)



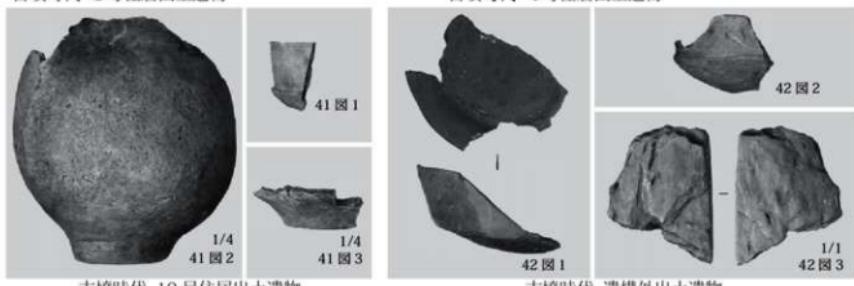
縄文時代 遺構内出土石器



縄文時代 遺構外出土石器

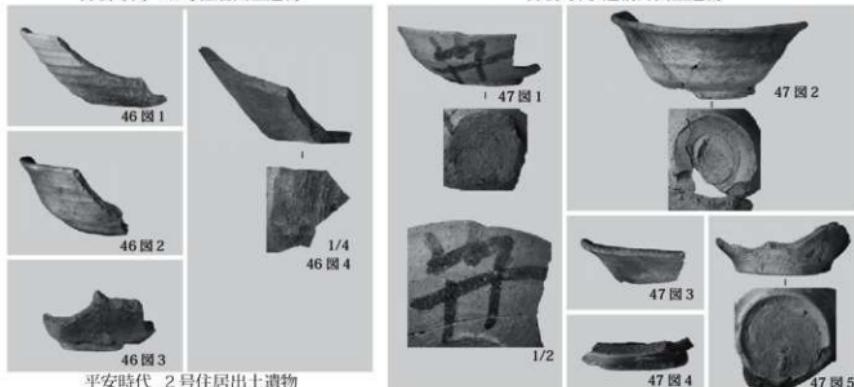


古墳時代 3号住居出土遺物

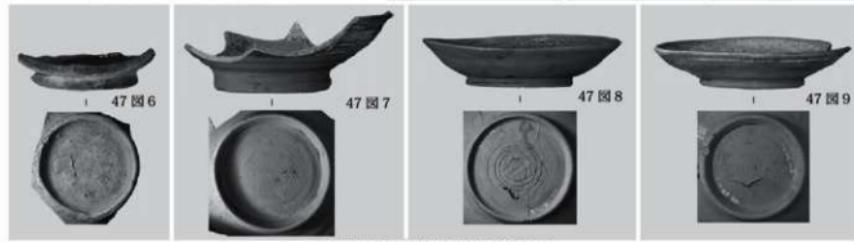


古墳時代 10号住居出土遺物

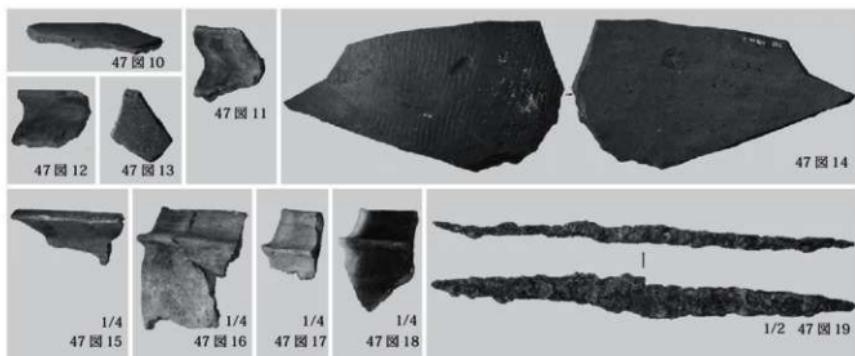
古墳時代 4号住居出土遺物



平安時代 2号住居出土遺物



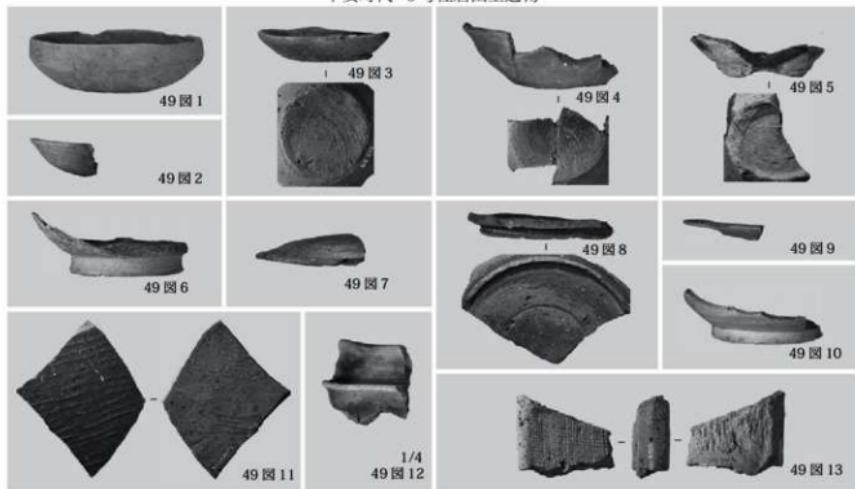
平安時代 5号住居出土遺物 (1)



平安時代 5号住居出土遺物 (2)



平安時代 6号住居出土遺物



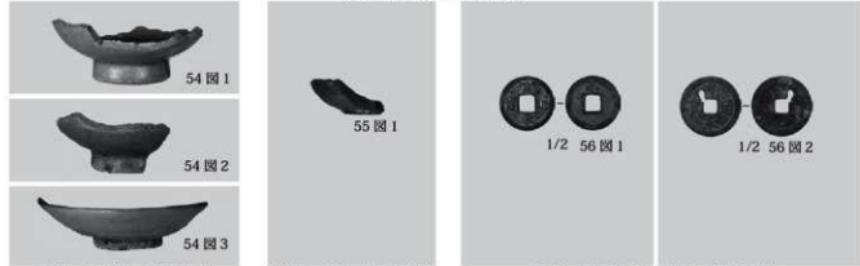
平安時代 遺構外出土遺物



当遺跡出土「かみつけの里博物館」所蔵品



近世 1号井口出土遺物



近世 2号井戸出土遺物

近世 3号井戸出土遺物

近世 遺構外出土古銭「寛永通宝」

発掘調査報告書抄録

ふりがな	むなたかにしやさぶろうかいどういせき										
書名	棟高西弥三郎街道遺跡										
副書名	宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査										
巻次											
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書										
シリーズ番号	第435集										
編著者名	大塚 昌彦										
編集機関	株式会社 澄研（文化財研究室）										
所在地	〒370-3517 群馬県高崎市引間町712-2										
発行機関	高崎市教育委員会 株式会社 澄研（文化財研究室）										
発行年月日	2019年（令和元年）8月31日										
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北	緯	東	経	調査期間			
		市町村	遺跡番号					調査面積 m ²			
やなたかにしやさぶろうかいどういせき 棟高西弥三郎 街道遺跡	群馬県高崎市棟高町 2221-1、2222-1、 2222-2、2222-3	102024	755	36° 22' 48"	139° 0' 9"	~	2019.1.28 ~2019.3.8	493			
所取遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項					
棟高西弥三郎 街道遺跡	集落	縦文時代	竪穴住居 小堅穴 土坑 ピット	縦文土器：深鉢形土器 浅鉢形土器 土製耳飾り 石製品：打製石斧 石鎌他	竪穴住居：2軒 土坑：107基 加曾利E式から称名寺・堀之内II式						
				土師器：环・壺・甕 須恵器：甕 石製品：滑石製劍形石製品・白玉 鉄製品：刀子・釘	竪穴住居：6軒 I号住居覆土堆積後FA層の降下堆積後の窪地1カ所						
	集落	古墳時代	竪穴住居	土師器：环 須恵器：环・壺・盤・甕 灰釉陶器：皿・碗 羽釜 鉄製品：刀子 古代瓦：平瓦	竪穴住居：3軒						
	屋敷	近世	ムロ 井戸 溝	陶磁器：茶碗類 瓦（近世瓦） 古銭（寛永通宝）	ムロの中に、天明3年浅間山噴火の軽石層 浅間A軽石層降下堆積層の上・下より陶磁器出土						

棟高西弥三郎街道遺跡

—宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査—

令和元年8月31日 印刷

令和元年8月31日 発行

編集 / 株式会社 澄研（文化財研究室）

〒 370-3517 群馬県高崎市引間町 712-2

TEL 027-372-6464

発 行 / 高崎市教育委員会 / 株式会社 澄研（文化財研究室）

印 刷 / 朝日印刷工業株式会社
